
CrossLord

～ふぁい～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CrossLORD

【Nコード】

N5344D

【作者名】

くふあい

【あらすじ】

世界に語られる「不死鳥の羽」めったに手に入る事ないその「羽」を、偶然手にした青年がいた…。

序 1956年1月、東京（前書き）

この小説は短編ではなく一連のストーリーとして書いております。
なかなかの長編になるかとおもいますが、どうぞよろしく願います。

序 1956年1月、東京

序

それははるか昔のこと。まだ幻想の生物が世に存在していたころのこと。

1羽の不死鳥が大空を飛ばたいいた時、その一片の羽を大地に落としたと言う。

放って置けばすぐに燃え尽きる筈のその羽だけれど、その時偶然近くにいた青年がその羽を拾ったと言う。

なぜなら、その羽を持つものは、世界を造り替える力を持つと、言われているからである。

高位であり、従順であったその青年は、すぐさまその羽を、その国の王へ届けた。

「王様、伝説の不死鳥の羽と思しきものを手に入れました。」

「なに？それはまことか、本物か？」

「おそらくは。赤々と燃えていることが何よりの証拠かと。しかし、このままではすぐに燃え尽きてなくなってしまう。」

王はすぐさまその国一高名な呪術士を呼び、羽の炎に呪をかけさせた。

その羽が、炎が絶えることなく、永遠に在り続けるように。

この世界に、『世界を造り替える力』が現れた瞬間だった。それは、この世界に於いて何にも代えがたい力の象徴となった。

しかし、同時に、容易にその力を行使する者はなかった。なぜなら『世界を造り替える』というのは、新たな世界の誕生を意味する前に、今在る世界の崩壊を意味するからだ。

しかし、その羽を所持することは、唯一無二の権威と権力を所持するに等しいこととなっていた。

だから、各民族が、それを獲得する為の争いを始めるまで、そう長い時間は掛からなかった。

そして、その争いが激化して、世界が崩壊寸前になるのにも、そう長い時間は掛からなかった。

数十年後、気がつくと世界に残っていたのは、わずかな生き物だけだった。それらの総人口は、半世まえの千分の一にも満たなかった。

誰からともなくこの戦争を止める動きが起こった。

残った民族が比較的平和的だったことも幸いし、和解は成立し、羽は『世界の果て』に葬られることとなった。こうして、世界の崩壊は免れたというわけだ。

こことは違う世界の、遠い遠い昔話であった。

その日、博史はまたも幻想的な夢を見た。やはり今回も、「現実」とは違うような世界の荒涼とした大地に一片の光が見える。彼はその光ものの元へ向かおうとするが、一向に近付くことが出来ない。

延々歩いた後、彼は疲れ果て、いつの間にか体が動かなくなつてその場に倒れこもつとしたその時…

彼の意識は

「現実」に引き戻された。

そこは、いつもと何も変わらない早朝の四畳半の自分の部屋だった。彼はその身を起こし、高校へ行く為の身支度を行った後、朝食を取りに居間へ向かった。

いつもと変わらない朝だったが、夕べ見た夢は不思議な程に彼の記憶に残っていた。

その日はさつさと朝食を済ませると、少し早めに高校へ向かった。

博史が教室に到着すると、まだ、人はまばらだったが、隣の席の由里子はすでにそこで本を読んでいた。

高二の一月のクラスともなると、クラスの大半はそこそこ話もするよつな顔見知りだが、彼は由里子とは話したことがなかった。

由里子は、どちらかと言えば端正な顔立ちをしている美人だが、ごく一部の友達以外には無愛想で、博史に限らず多くのクラスメイトは、まだ、まともに話したことがなかった。

しかし、そんな由里子が、今日すこし様子が違っていた。

博史が着席すると、由里子は妙に彼のことを気にしているようだった。やたらと彼の方を見てくるのだった。

始めの内は、さしてきにもとめない博史だったが、午前中の授業の間もずっとそんな感じなので、段々彼もずっとおしくなってきた。

昼休み、彼は思い切って、初めて自分からまともに由里子に話しかけてみた。

「あのさ」

「…何？」由里子はやはり何かを気にしてる様子だった。

「おれの顔に何かついてる？朝からずっとおれのこと見てるっていうか、気にしてただろ。」

凶星だったが、由里子は動揺することなく、淡々と博史の質問に応えた。「あなたから話しかけてくれて助かったわ。話さなきゃいけないことがあるの。…でもちょっと長くなるし、ここじゃ何だから、今日の放課後、私の家に来てくれないかしら？」

「長くって…。まだ昼休みだいぶあるだろ。いいからここで話せよ。」

「駄目。理由は言えないけどとにかく駄目。なによ、放課後用事でもあるの？」

「いや、別にないけれど…。」

たいして親しくもない女いきなり家に来てと言われて、博史は当然変に思ったが、放課後は確かに暇だったので、とりあえずOKした。

放課後、当然のことながら、帰りは博史と由里子の珍しい2ショットとなった、博史は変な噂でも立ちやしないかと気にしながら学校を出た。隣の由里子は特に気にかけない様子で、いつもどおりの無愛想だった。

その道中、二人は話らしい話しもせず、学校から十分程の由里子

の家にとりついた。

家、というか、そこは近くの神社だった。博史は彼女の家が神社であることも初めて知った。

正面から横の方に回ると、民家としての玄関があり、そこから二人は中に入り、博史は居間へ招かれた。

その神社は、古いものの、なかなか立派なもので、それは居住部分も同じのようで、伝統的な大型の日本家屋という感じだった。

彼を居間に招くと、由里子は室内の通路を通り本堂の方へ消えて行った。

数分後、彼女は大層な箱のようなものを持って現れた。

博史がその箱を見ていると、由里子は自分から説明を始めた。

「この中に入っているのは、とても大事なもので、そう、ものでは在るけれど、一般的に言えば、神の一つとして扱われるに足るものなの。この神社はね、実はこの中にあるものを祠るために建てられたのよ。私の家系はこれを守り崇めるために代々生きて来たの。」

いきなりの話に、博史はいまいち意味がのみこめなかった。

「え…と、それが大切なものだってことはわかったけど、何でそれをおれに見せるんだい？」と、言うか、具体的に、中にはなにが入っているの？」

博史そう言うと、彼女はその箱についていた紐をほどき、箱を開けた。

「…開けて良いもののなの？」

「…良い、ということはないけれど、この箱を取っても尚、幾重にも封印がなされてるし、こんな状況だから…」もちろん何をさして「こんな状況」と言っているのか彼にはまだわからなかった。

その箱の中には更に小さめの箱があった。なるほど、かなり厳重に保管されているようだ。

由里子は何かをつぶやいてその箱も開けた。

中には、何か厚手ガラスのランプのようなものがあつた。火はついたままになっていて、赤々とした光を放っていた。そして、その光は…。

「夢で見た光と同じ感じた…。」 その覚えのある、引きつけられるような輝きに、博史は思わず呟いた。

「そう、あなたはこれと同じ光を見る『夢』を見るのよね。でも、いつも辿りつけないから、これが何だか分からない…。」

博史は目を円くして由里子を見た。

「おれ、その話したっけ？」

「いいえ、でも、わかるの…。あなたが見た『夢』に出る光も、確かにこれと同じものが発しているのよ。」

「これは…何なの？」「詳しいことは私も知らないわ、これが日本に持ち込まれたのは奈良時代…唐が持ち込んだらしいけど、生まれたのはもつと西の方だと伝えられているわ。私たちの間では『鳳凰の羽』と代々呼んでいるもので、この炎はついでる事がないと言われているわ。」

「…神と同じと言われているくらいだから、ただ光るだけって訳じやあないんだよね？」

「…ええ、これが日本に伝来した当時の人々は、これになにか特別な力があると信じていたらしいわ。」

でも、その詳細についても、現在には伝えられていないの。

これがここで祠られるようになった理由は他にあって、当時何らかの理由でこれを獲得する為に、豪族って言うの？当時の力をもった人達が大規模な戦を始めたんだって。

それはもう、当時の日本が崩壊の危機にさらされるほどのものだった

たらしいわ。

それが数年間続いた後、生き残った権力者たちはやっとその危険に気付き、この羽を封印して、和解をすることにしたの。

そしてそれを守る人々として選ばれたのが私の先祖ってわけ。

どういうわけか、このおぞましい一連事件はあまり歴史上表立って取り上げられることはないらしいわ。

少なくとも、『羽』のことは一切外では語られていないと思う。当時の人は『羽』のことは葬り去ろうとしていたようね。でも、祟りを恐れて、破壊することはできず、こうして神という名目で、社を建て、外部の目に触れないようにしたってわけ。その意味では、私たち家系は、この『羽』を隠すという使命を負っているとも言えるわね。」

「…なるほど、それで、おれの夢とその『羽』になんの関係があるんだ？」

由里子はその先を話すことに少しためらいが在るようだった。

「あのね。今迄のことも充分急な話だったと思うんだけど、この後はもつと突飛もない話なのよ。だから、信じてもらえるかどうか…。」

「…まあ、とりあえず話してみろよ。」

言葉をまとめるように由里子は少し考えてから、再び語り始めた。「…あのね、実はこの『羽』、一つしかないわけではないの…。いえ、普段私たちが生きる世界には、一つしかないのだけど、その、人々が普段見たり感じたり出来ない別のいくつかの世界に、これと同じ『羽』がそれぞれあるの。」「別の…世界？」

「そう、次元が違っても言えいいのかしら。とにかく、普通の人は絶対触れられない、別の世界があるのよ。」

「普通の人？ってことはそれを見たり出来る人もいると言うことか。」

「ええ、少なくとも、代々私の家系はそれを見ることが出来た。」

夢』みたいなものとして。夢見とかつて言われたりもするのかしら。この家系が『羽』を守る役目をおわされたのは、その力があつたからなんじゃないかしら。きつと当時の何人かなんびとが、この『羽』がこの世にしかないものではないことを、気付いたり、在るいは中国の人々から聴いたりしてたのじゃないか。それでね、ここからが重要なんだけど、ここ二、三日の私の夢の『世界』の中にあなたがいたの。あなたはその『世界』で『羽』を追っていたわ。」

「ええと？どういうこと？」

「あなたは、知ってか知らずか、いつの間にかことは違う別の世界に、一時的に行っていたと言う事よ。」

「つまり、おれが夢だと思っていたあれは、その、『世界』での出来事だつていうのか？おれにはそんな君みたいな力ないよ。」

「いいえ、私たちは夢として世界たちを見ることは出来ても、そこに行く事は出来ないわ。そんなことが出来るのは、私の知る限り、あなただけ。」

博史はその話をにわかには信じがたかったが、一方で、ここ何度か見る夢が、『ただの夢』ではないという感じもしていた。記憶が断片的にもかかわらず、圧倒的な臨場感、現実感がその記憶にはあった。

「これはかなり異なことなの。人が別の世界に行けるようになるなんて……。」

「君の話が全て本当だとして、どうしておれはそんな能力を得たのだろう。」

「分からない。でも、決して偶然ではなく、それにはなにか重要な意味があるんだと思うわ。そしてあなたが経験した『現実』から察して、それは『羽』に関すること……。おそらく近い内、あなたは夢を通じて別の世界へ行く事になるでしょう。一夜の夢としてではなく、れっきとした『現実のその世界』で、生きる日々が訪れると思うわ。」

一通り話し終わると、由里子は再びランプを箱にしまい、また何

かをつぶやいた後、本堂の方へしまいにいった。

由里子が戻ってくるのは待って、博史はおいとますることにした。

「あなたは、恐らく『羽』を探す羽目になるのだと思う。この世界の『羽』のように、人が持っているとは限らないから…。」
そういつて由里子は彼を送りだした。

多くを博史に教えた、由里子だが、そのことは彼女すら知る運命になかった。

『今夜』だと言うことを……。

その夜、いつもどおり博史は風呂を済ませた後に、床についた。
由里子の話が気になってはいたが、元々寝付きがいいこともあり、
やがて夢の世界へと運ばれて行った…。

また同じ風景…。『違う』世界の荒涼とした大地…。
はるか遠くに見える赤々とした光… 由里子の家で見たのと同じ…。
…。

おれはその光の方へ歩いて行った。たどり着けないことは半ばわかっていた。でもその光に引き寄せられて、歩いていった。

届かない、届かない…。

やがておれの足は鉛のように重くなって行った…。

もう…動かない…

やがて、おれはその場に倒れこんだ……。

遠のく意識の中で誰かの声を聞いた……。

「ねえ、誰がいるよ…」

「…大変、『しゅ』に当てられたのね…」

その後も何か話していたようだったが、彼の意識は遠くへ運ばれた。

彼が、異世界へ渡ったのを、由里子はその夢で見ている。そして、この世界と、異世界をつなぐ結界が閉じられていくのを…。「ついに、逝ってしまったわね…」

夢か

『現実』かの狭間で、由里子はそつと呟いた。

由里子は、少なくともしばらくの間は、博史はこの世界からは消えてしまったと思っていた。それが現実かどうかという影響をきたすのかは彼女もしらなかったが、とにかく、彼は今『ここ』にはいない、と思っていた。

だからその翌朝学校へ行った時、博史が既に彼の席に座っているのを見て、さすがに由里子も驚いたようだった。

「よっ。」

目をまんまるにしている由里子に、博史は簡単にあいさつした。

「ど、どうして？あなたは確かに…」

「ちょっと待て、教室でその話はまずい。変におもわれるだろう。放課後にな。」

由里子は再びその日一日中彼のことが気になってしょうがなかった。

放課後、二人以外誰もなくなった教室で、博史は話始める。

「端的に言っと、だ。向こうとこちらでは時間の流れが全くちがうんだ。まあ、世界が違うんだからな。だから、向こうでいくら長い時間を過ごそうと、こっちで同じだけの時間が経つとは限らないと言ふことだ。おれがこの世界のこの時間に戻って来られたのは、向こうの世界に『そういう力』を持つ人がいたからだ。本当なら、おれは戻って来られなかったかもしれないし、戻って来られるとしても、この世界のいつに戻ってくるかは誰もわからないところだったんだが……。『力』をもつあの人に逢えたのも、また、運命ということなのだろうか……。」

「あつちでは、何があつたの？『羽』は、世界はどうなったの？」

「そう、それだ問題は。きみは当然そのことを知りたがるだろうと思っていたのだけど、だけど、おれがそのことについて詳細を語ることは出来ないんだ。」

「どうして？」

「そのことをきみに話す事によつて、この先の運命っていうのかな、この先『あらゆる世界』で起こるだろう出来事が変わってしまうかもしれないからだ。だから他人には、殊にきみには絶対に、あの世界の出来事を深く語るべきではない。ただ言えるいくつかのことは、確かにこの一連の出来事には『羽』が関連していること。そして、

まだ事態は『解決』していないこと。そして…
きみもこの事には深く関わることになるだろう。ということだ。」

「私が？」

「そう、きみはただの傍観者には終わらない。この先大きな出来事が、きみにも起こるだろう。それについては、おれも深く知る事は出来なかった。出来てもどうせきみには話せないのだろうが…。」
「とりあえずは、普段どおりの生活を送ればいい。その時が来るまでは、これといってやるべきこともないからな。」

「…わかったわ。」

博史がどこが変わったように、頼もしくなったように見受けられることから、由里子はある世界で彼にとって重大な、大変なことがあったのだろうことを察した。

続く

時代概念なし、終わりの世界「エル＝バスタ」（前書き）

第二話というところです、まだ話はとびとびに見えるでしょうが、
怒らずにお読み下さい

時代概念なし、終わりがけの世界「エル」バスタ」

二：末界

「エル」バスタ」歴概念なし

その世界ではかつて

『霧族』という種が繁栄を極めていた。いまではもうどれほど昔のことかわからないが、その種の先祖が、当時の学問の応用によって、『霧』を動力源にすることに成功した。

その方法は改良に改良を重ねられ、やがて、あらゆる作業がその霧を源とした霧機械によってできるようになっていった。彼らが『霧族』たるゆえんはここにあった。霧機械によって暮らしを圧倒的に豊かにしていった彼等だが、やがて学者達は霧の過剰使用の危険を提唱するようになる。

この世界で言うところの

「霧」と言うものが、海の液体と同じ物質、所謂水にあたるものが何らかの変化によって大気空間にたちこめるものと既に知られていた。

そして、大事なことは、霧機械が動力源として消費しているのは、この液体と言うよりは、それを空气中に漂わせる

「何らかの力」の方だということだった。液体の方は、そのまま川やら海やらに排出されていた。当時、霧は自然に発生するものだと言われていたが、霧族はあまりにも霧を使いすぎた為、その発生ペーイスは追いつかず、この先霧はどんどん減っていくというのだ。

更に、排出された液体が多過ぎるため、海の液体総量がこの先どんどん増えていく、つまり海面が上昇していくというのだ。実際、そ

のころには、標高の低い土地や小さな島などが海水浸食で消滅の危機に瀕していると言うニュースが、連日伝えられていた。

学者たちは霧を節約する霧機械の開発と、液体を霧に変えるメカニズムを特定し、霧を人工的に造り出す方法を研究するようになった。

しかし、時は既に遅かった。その後あらゆる霧機械が動作不全になっていき、幾多の大洪水が少しずつ、確実に世界を飲み込んでいった。

そして、現在、世界にはたった一つの島に一人の霧族と、ほんのわずかな生物がのこるのみとなった。

島の名前は

「エル＝バスタ」。元々そこは世界最高峰の山で、その為に、現在唯一の陸となったわけだ…。

青年は今日も島の中心部の木々から果実をとり、食事とした。最早食べられる木の実に限られていたが、青年は自分が生きる分には事足りる。と踏んでいた。

名すら失ったその青年は、自らの、そしてこの世界の運命を理解していた。

自分の死は霧族という種の絶滅であり、またその後近い内にこの島も海に飲み込まれ、この世界も終わるだろうことを。

この世界に於いて海中の生物はいないと、少なくとも思われていた。実際、青年も暇な時は必然的に海を眺めることになるわけだが、彼も海上、海中に生物を見たことはなかった。霧族にとって海とは、生も死もない無生物の世界であつた。

彼の一日は基本的に単調なものだつた。朝夕には木の実をとり、暇な時は動物と遊んだり、彼の両親が遺したわずかな書を読んだりしていた。

彼の両親がこの世を去つたのはつい最近のことだつたので、彼は言葉を操ることは、人並には出来た。ただ、それを必要とすることはもうないだろうと思つていた。

彼が名前を失つたのも、それを呼ぶ人がもつ、いないからだ…。

木の実を昼食代わりにした後、彼はいつものように浜辺で両親の本の一冊を読んでいた。それはいくつかの神話のようなものについて書かれた学問書で、彼にはもう必要のない知識だったが、暇つぶしにはなつていた。

霧族とは最後の最後まで学ぶことを止めない生き物なのだ、と彼は感じていた。

その時だつた。何か四角い箱のようなものがぷかりぷかりと漂いながら、海の向こうから近付いていた。やがて箱は波にのつて、浜辺に打ち上げられた。

青年はその箱みつけると、拾つて調べた。

表面には青年の知らない不思議な文字がかかれていて、箱自体も、何か旧時代的に感じられた。青年は霧機械時代を生きていないから、それは印象として感じたことに過ぎないのだけれど…。

箱の中にはもう一つの箱があった。それをも開けると、中には透明な入れ物に入った、なにか赤々と光る羽のような形の物体が入っていた。

青年は、それを見てすぐに思い当たり、今読んでいる書の前の方のページを開いた。

それは、

「太陽の鳥の羽」について書かれた章で、それが世界を創りかえる力を持つこと、そしてそれを手に入れることに成功した人は、世界で唯一無二の権力を手にいれられる…。ということ…。

ただの神話にすぎなかったし、青年はその話を始め信じはしなかった。しかし、一向に燃え尽きないその

「羽」が、何か不思議な力を持っているように、思えないこともなかった。

そして、もしこの羽に本当にそのような力があるならば、この終わりにかけた世界をどうにかすることができないかと考えていた。しかし、おいそれと実践するのは憚られた。

「羽」によって世界を創り替えるということが、青年の理解を超えていたからだ。世界を新しくつくろうとすることは、今ある世界を崩壊させることになるのか、そうでないにしても、新しい世界を創るという神のような行為を実行したら、なにかとてつもないことが起こるのではないか…。彼はぼんやりと、しかし強い危惧を抱いていた。

しかし、一方で、この世界はどうせ放っておいても間もなく終わるのだから、それならばいっそ…という気持ちもあった。

青年の心は揺れていた。彼が善人であったからこそ、揺れていた。結局彼は決断に踏み切ることができず、その赤々とした

「羽」は大切に保管されることとなった。

その後、青年はそれをいますぐ使うことはせず、世界が本当の本当に終わるときまでは、大切に保管しておくことに決め、やはり以前と変わらない生活を送った。

神話に書かれたとおり、

「羽」は透明な容器のなかで、尽きることなく燃え続けていた。

それから幾年がすぎたろう。当然ながら暦をもたない彼だったが、加齢による体の衰えから察して、十数年は経過したかに思えた頃、海の浸食ペースが急に早まったかに思えた。

広大な海から見れば米粒のような島だから、気候のちょっとした加減で、浸食は大きく早まる。

気がつくとは島は、かつては島の最深部だった、木々の生い茂るあたりを残すのみとなった。

「ついにその時期がきたか…。」中年にさしかかった男は数十年ぶりに呟いた…。

その時だった。

「ちょ、ちよっと待った!」

男の背後から、その男とは別の声がした。一人しかいないハズの世界で、彼とは別の声が、した。

男は一瞬、なにが起こったかわからないようだったが、すこし間を置いて、恐る恐る後ろを振り返った。

みなれない白いローブのようなものを羽織った、長身の男が立って

いた。

「『羽』を使うのは、僕の話聞いてからにしてくれないかな？大丈夫。この島が完全に消えるまでには、まだ数日の猶予があるから。」

「誰だ？」男は不審な面持ちで聞いた。

「うーん、ここで僕が詳細な自己紹介をしたところで、別の世界で孤独に生きていた君が理解出来るかは微妙なんだけど……。」すこし考えて長身の男は続けた。「僕の名はヒルバリー。わからないと思うけど、白魔法を使うことができる魔族です。きみの名は？」

「……名はもうない。この通り名前を呼ぶモノはもうないからね、名など忘れてしまったよ。」

「そうか。まあ確かにこの世界で言葉を話す存在は君一人だものね。じゃあ、そうだな……ノアと呼んでいいかな？」

「のあ？」

「僕の世界の伝説の中に、君がこれからするようなことをする男がでてきてね、それが『ノア』って言うんだよ。ま、彼は家族がいたから君よりはましかな。」

「そうか、まあ好きに呼んでくれ……呼び名がないのは不便だからな。」

「少なくとも話す存在に出会えたノアの気持ちはまんざらでもなかった。」

「そうか、よかった。では本題だ。ノア、君は最近、その『羽』をつかって世界を創ろうとしていたよね。」

「ああ、どうせこの世界はもう終わるからね、どうせならここに残るわずかな生き物に生きる道を残したいじゃないか。」

「ここにいる生き物たちのため？ノア、君は霧族を再び繁栄させようとしているのではなかったのかい？」

ノアは少し考えて応えた。

「確かに初めてこれを手にした頃はそれも選択肢の一つではあった

が：霧族はもう一人しかいないから、また増やすことは出来ない。たとえいまから新しい世界を創ってそこに新しい霧族を創り出したとしても、それは僕の中では本当の意味での子孫とは思えない。自然な形で僕やそれとどこかでつながっている霧族によって産まれたものではないからね。そして、この世界をこういう事態に追込んだのは、どうも僕の祖先らしい。それならば、別に何のつながりもない霧族を創り出すことに、僕にとってメリットはない。だから、せめて罪無き他の生物に存続の道を残してやりたいんだ。まあ、できれば僕も、最後の霧族として真っ当に人生を終えたいと思うが：。この海に飲まれること無く、ね。」

ヒルバリーはこれ幸いという面持ちで応じた。

「そうか。それなら話は簡単かもしれないな。実は僕はその『羽』をもらいにきたんだよ。使われていない状態だね。まあ、細かい話は今は置いといて、もし、僕が何らかの方法で君とこの生き物たちを助けたならば、君はその『羽』を譲ってくれるよね。」

「ああ。僕も世界を創り替えるなんて大それたことはしたくないから、もしできるなら、これは喜んで渡すが、でもどうやって？」

「実はね、この島ですつと生きて来た君は知るはずも無いんだけど、この海の遙か果てに、異世界への入口が出来ているんだ。僕はそこからこの世界に来てあとはボートに魔法をかけて、この島にたどりついたんだよ。」

「異世界？」

「うん。この世界に次元の概念があるかどうかはわからないんだけど。僕の世界で言うところの5次元空間につながっているんだよ。」

『この世』にはたくさんの世界が存在していてね。新しく生まれたり、消えたりもしているんだけど、それら世界達全体が、その5次元空間の中に存在しているんだ。そして何らかの形で世界とその5次元空間をつなぐ通路が出来た時、別の世界へ渡れる可能性があるってわけ。まあそれにも特別な力が必要なんだけど。」

それでね、いまから僕らで舟を作って、それに僕が魔法をかけるか

ら、それに乗って異世界に逃げようという訳なんだよ。とりあえず、僕のいる世界が君達を一時的に受け入れる手筈になっているからさ。

「

なるほど、よくわからない所はあるが、世界に僕しかないはずなのに、ヒルバリーがいる時点で、異世界へ渡る方法があると言うのは、少なくとも信じられそうだ。どうせこの『羽』をつかうのも、少し怖くて気が乗らなかったところだったし、一つ、君の案に乗ろうじゃないか。」

「ノアが理解力のある人でよかった。それじゃ早速舟を創ろうか。魔法で舟自体つくすることもできないことはないんだけど、実際の舟に魔法をかけた方が、負担もかからないし、強い魔法をかけられるからね。」

それから数日かけて、二人は木々などをつかって舟を作っていた。ノアは舟の作り方を知らなかったが、ヒルバリーが指導したし、最終的に魔法をかけるのだから、さほど完璧な作りである必要はなかった。ので、概ね難なくそれは完成した。

次の数日。彼らは島のなるだけの生物をその舟に入れた。これは意外と大変な作業で、各種を少なくとも一つがい以上、逃がすこと無く舟にいれなければならない。全種を集めきることは難しかったけど、最後の日がくるまでに、彼らは出来るだけの生き物を積んだ。

そして、ヒルバリーが来てから十日がたった頃だろうか。島にとてもをさす洪水が襲った。

「ノア、もう時間ない！その木で最後にしよう！」

「ああ、わかった。これを舟の中に運ぶから、手伝ってくれ！」

彼は自分の半分くらいの丈の若木と共に舟に乗り、舟の扉をしめた。

ヒルバリーはすぐさま舟の前方の机のようなものがある所にいき、動力魔法を唱え、舟は出航した。窓からは島が見る見るうちに波にさらわれていく光景が見えた。やがて島が何とかみえる程の距離まで離れた頃、島は波をかぶったまま、二度と顔を出さなくなった。

一つ、世界が消えた。

「不思議なものだな。世界が終わったにも拘らず、この世界の生き物はいまだ生きていたというのは。」

「そうだね、でも、本当の意味での終わりでは無いよ。こうしてこの世界の生き物がまだこんなにいるんだから。彼らがやがて別の世界で繁栄することで、この世界は存続するとも言えるんじゃないかな。そうだ、約束どおり、これはもらっていいかな？」

ヒルバリーはすぐ横の『羽』をさして訊いた。

「ああ、約束だし、僕にもうそれは必要ない。だが、気になることがある。君はそれを得てどうするつもりなんだ？ やっぱり世界を創るつもりなのか？」

その質問に、ヒルバリーは少し考えて、切り出した。「そうだな、それについては、少し長くなるけど、僕の世界に着くのはまだしばらくかかるから、その間の退屈のぎには丁度いいかもしれないそれに、どっち道ノアはそのことを知る日が来るだろうからね。」

舟は海しかない失われた世界の上を、すべるように進んでいった…。

続く

時代概念なし、終わりのかけの世界「エル」バスタ」（後書き）

ありがとうございました。話はまだまだ序章です、この先もひきつづきお読みいただければ幸いです。

5次元空間／フォグナ歴紀元前五年、霧の世界（「エル」バスタ」の遠い昔）

三：時間不定、5次元空間、ノアの箱舟内

舟がいくぶんか進むとやがて空は紫色に変わり、海の切れ目にさしかかった。海はそこで無くなっていたにもかかわらず、舟は空間の上を漂い始めた。5次元空間に突入した。

舟が5次元空間に投入されてもなお無事なのは、ヒルバリーの魔力によるものだった。

舟の中の二人、殊にノアは、その突入に気付きさえもしなかった。

ヒルバリーは、先ほどのノアの質問にゆっくりと応えはじめた。以下は彼の言葉である。「さて、まず君の質問に答えると、僕、というか僕ら白魔族はその『羽』を使おうとしているのではなく、少なくとも人に渡らないようにして、最終的には消そうとしているんだよ。

君は知らないかもしれないけれど、この『羽』は実は一つしかないわけではないんだ。全く同じ『羽』が世界たちの中に幾つか散らばっているんだよ。そして、僕らの最終目的であるそれらの『破壊』はそのいくつかを全て集めた上で行わなければ不可能なんだよ。」

「なぜ？」

「うーん、それはね、ちょっと説明が難しいんだけど、その『羽』がある時この5次元空間に放出されたからと言われているんだ。いま僕らや舟や生き物たちは僕の魔法によって守られているから大丈夫

夫なんだけど、そういうものを受けていない3次元の物体が5次元空間に入ってしまうと、世界軸の多層性とかいうもののせいで、複製されてしまうんだ。それはただ紙に写すようなコピーとは違って、普通の感覚で言えば、まさに『同じもの』なんだよ。ま、なんで複製されるかっていう詳しい話は、僕の世界の先端物理学を知らなければわからないからひとまず置いて、その複製された物質を消すためには、いくつかのそれを全て集めて、一つに圧縮してからでないといけないんだ。それらは元々一つのハズのものだったんだからね。

もしその中の一部のみを破壊したときどうなるのかはわからないけど、元々あるべき5次元空間のバランスを崩すことになるから、全『世界』の存在が危険になることは、間違いないだろうね。

幸い、5次元空間内にあった『羽』これは『核』と呼ばれるんだけど、それは回収したから、今も『羽』が増え続けるということはない。だがその『羽』が投入、複製された瞬間にさっきの世界のように5次元空間との通路を持っていたいくつかの世界には、『羽』が入り込んでしまったんだ。

だから僕ら白魔族は、各世界に行き『羽』を集めるプロジェクトを進行中なんだよ。使われる前にね。」

「……やはり、それを使うのはまずいことなのか？」

「うん、特にいくつかに散らばった今の状態ではね。さっきもいった通りこの『羽』は一つであって一つではないような存在だから、もしどれかが活性化：つまり世界を創る力を発動し始めると、ほかの『羽』も同様に世界を創り替え始めるようなんだ。だとすると、同時に幾つもの世界が崩壊したり、変異してしまったりするんだ。まあ世界はいずれ無くなるものだけど、そこに住む人々は、いますぐその死を迎えることは望んでいないだろう。少なくとも、僕らは望んでいない。」

「君の世界にも、その『羽』が来てしまったのかい？」

「うん。遠い昔にね。でももっともっと遠い昔から、次元さえ渡れ

る魔力を持っていた僕らはそれを使う危険を知っていたから、使おうとしたことはなかった。

かつては、僕が今つかっている魔法をかけて再放出するという話もあったんだけど、僕らの魔法は永遠じゃないから、いつか再び複製が行われ、また『羽』がやってくることはわかっていたから…。

異世界に押しつけると言う悪人も中にはいたけど…その世界の人々に悪いし…白魔族ってお人好きが多いから、そういうことは出来ないんだ。

結果、僕らは最も正しいかもしれないけど、最も大変で、危険なやり方を選んだ。それが『羽』の回収ってわけだ。」

「なるほど。それで『羽』はあとどれ位あるんだ？」

「実ははつきりとはわかって無いんだけど、5次元との通路をもつ世界ってそんなに多くはないし、なによりも『核』は回収出来たから、意外と達成は遠くないらしいよ。あ、全部集めたかどうかは、さっき言った圧縮を試しにやってみれば安全に調べられるんだって。」

「君の世界は相当学問が進んでいるようだね。」

ノアの世界ではこれらのことは霧学に該当する分野だが、世界が違えば、その呼称違うだろうから、彼はあえて『学問』と言った。

「元々僕らが次元を渡る魔力を持っていたがために、その方面の研究はとても進んだんだろうね。まあ知らなければよかったって思うようなことも、在るけれど…」

「知らなければよかったこと？」

「うん…」

ヒルバリーはその先を話そうかひどく悩んでいた。なぜならその話は、ノアを怒らせる可能性が高いからだ。しかし、彼がヒルバリーの世界に着けば、いずれ知ってしまうだろうことでもあった。ならば、やはりここで話してしまふべきなのか…。

しかし、彼は決心して、話し始めた。

「そう、実はこのことも君には話しておかなければならないと思う

んだ…。おそらく、君はこのことを知ると、ひどく怒るとおもっただけれど…。

実は、君の世界が崩壊したことには、僕らの先祖が深く拘っているんだよ。」

「なに？」

「君は『霧』は自然発生するものだったと伝えられているのだろうね。それは、確かに間違いではなかったんだけど、あれはね、本当の最初からあの世界にあつたものではなく、僕らの先祖が与えたものなんだ。」

「なに？では、霧機械と呼ばれたモノの動力源は…。」

「そう、僕らの白魔力だ…。」

四：フォグナ歴紀元前5年、霧の世界（崩壊した世界の遠い遠い昔）、ハルプ国

ルシウスはその日も、日課である朝の散歩をしに、家を出た。その日は穏やかな初夏の朝で、彼の気分も上々だったという。

彼はいつもどおり、歩きながら近所の人や、朝の見回りのために馬車で通る役人なんか、挨拶をしながら、坂を下って街のはずれの方へ歩いて行った。街の外周を囲う堀のような小川を渡ると、そこには農場がひろがる。農民の人達は手作業で草の手入れをしていた。さらに進むと農村も終わり、人はめったに立ち入らない森のところまで来た。彼の散歩コースはここでお終いだ。

引き返そうとしたその時、ルシウスは森の奥でなにかが光っているを見つけた。

それは初夏の明るい日差しの中でもはつきりとわかるほど明るく、そして不思議な色の光だった。

彼はそれに引きつけられて、森の中へ入って行った。

5分程森をさまようと、足下にその光源を発見した。

それは、なにか羽のような形をしたものだった。燃えているかのようにはみえたが、不思議と触っても熱くはなかった。「これは？」

彼はその美しさに目を奪われ、その羽を持ち帰った。学問にそれ程長けていなかった彼は、それをただ綺麗に光る羽としか認識しておらず、とりあえず玄関に飾って見た。

何日かの間そうしていたが、一向にその炎は尽きる気配がなく、一様に赤々と燃えているようだった。さすがの彼も少し不審に思い始めていた。

そんなある日、友人のジュニが尋ねて来た。

「やあジュニ、久しぶりだな。今日はとことん飲もうか。」

「ああ……ってルシウス、その棚の所に飾ってあるのはなんだ？」

「ああ、これはこの前街の南の森で拾ったんだ、あんまり綺麗なで飾ってあるんだが、どうも不思議なことに、一向に炎が弱まらないんだ。まあ綺麗だからいいけどな。」「ルシウス、そりゃ、まさか『太陽の鳥の羽』じゃないか？」

ジュニも別に博学ではなかったが、個人的興味から伝説やら神話には詳しくかった。

「昔、書物で読んだんだがこの世のどこかには『太陽の鳥の羽』ってのがあって、それはいつも炎をまとい、尽きることなく燃え続けると言われているんだ。」

「へえ、そんな大層なものなのかいこれは。」

「すごいのはここからだ。その『羽』にはな、俺たちの住むこの地を創り替える力があるんだと。」

彼らには世界という概念はなかったようだ。

「へえ、そりゃすごい。じゃ俺たちの好きな土地をつくっちゃおうか？」

「いや、駄目だ。よく考えてみる。新しい土地に『造り替える』んだ。いまある古い土地はその時無くなっちゃうんだぞ。俺たちだつてあぶねえよ。」

「…ああ、そうか、じゃ止めておこう。で、これどうすればいいんだろうな…。」

「ま、とりあえずなにもしないで、こんな風に飾っておけばいいんじゃないか？売ってしまってもいいけど、伝説に長けた商人でこの辺なかないねえだろ。こんな怪しいもの買ってくれるか微妙だぞ。」

結局彼の言葉どおり、とりあえずは今のままにして置くことにした。

その夜、ジュニが帰ったのは真夜中のことで、ルシウスは泊まっていけと勧めたが、明日は仕事だからと帰っていった。ルシウスは彼を見送ると、寝支度をしてベッドに入った。

それから数日がたち、『羽』は相変わらず燃え続けていた。彼はその日もいつもどおり仕事を終えた後、少し酒を飲み、床にいた。

彼が寝付いてから半時程経った時、突然ドアを壊す音がした。

彼はすぐに

「強盗だ」と察した。

下手すりや殺されるんじゃないかと、彼は、ベッドの中で震えていた。この家にそれほど高価なものなんてないから、いっそ持っていくたいものは持つて行ってくれという気持ちだった。

しかし、盗人は、一向に家のなかに入ってくる気配はなく、玄関の方でしばらくもの音がしたかと思うと。やがてまた夜の静けさが戻った。

それでもルシウスは怖かったので、夜明けを待つて様子を見に行った。

すると、確かにドアはぶち壊されていたが、特に大事なものを盗られたわけではなかった。

盗られたのは唯一、あの『羽』だけだった。

ルシウス宅の強盗騒ぎは一時、街一帯で話題に登ったが、その後さらなる被害もなく、ルシウス自身、被害は壊されたドアと謎の羽だけだったので、それ以上大事になることもなかった。

さて、あの事件から五日ほど経った日の昼ごろだっただろうか、ルシウスはその日は休みだったので、家でのんびりしていた。すると、思わぬ来客があった。

「ごめん下さいーい。」聞き覚えのない若い女の声だった。

「ちょっと尋ねたいことがあるんですけど……こちら辺で、こう、光る羽のようなものを見掛けませんでしたか？」

ルシウスはそれがあの『羽』のことだとすぐわかった。

「ああ、あの綺麗な『羽』かい。一週間ちょっと前に俺が拾ってし

ばらくそこに飾ってただけで、五日前に盗難にあってね。あいにくなんだが、もうここにはないんだよ。」

女はとつても焦った口調で返した。

「と、盗難！？誰にですか！？」

「さあね、まあ大して必要なものじゃなかったからね…。」

「まずいですよ…まずいですよ！」

「何だい、あれが必要なのかい。」

「はい。早く回収してしまわないと、万が一使われでもしたら、取り返しのつかないことに…。」

「使うつていうと？」ルシウスは訊いた。

「ご存じないんですか？あの『羽』には…」

「ああ、この地を造り替える力があるとか…」

「その通りです。正確には世界というものを、ですけど。それを知ってるんなら、どうしてもっと大切にしなかったんですか？」

「いや、そんなことしたら、いま住む地が無くなっちゃうんだろ？そんなこと望む奴誰もいないだろ。」

女はまだ不機嫌だったが、少し納得がいったようだった。

「そうか、この男正しい『使い方』を知らないのか…それじゃ仕方ないわね…」

「何か言ったか？」

「い、いえ、起きてしまったことは仕方ないですが、どうにかして『羽』を取り戻さないと…。」

「探すのか？なら、手伝ってやってもいいぞ。」

ルシウスは口調にはださなかったものの、彼女にとって大切なものを結果的にどこの誰かも知らない者渡してしまったことに、多少の引け目は感じていた。

「本当ですか？それはうれしいです。私『この土地』のものではないので…。」

彼女のなかで『土地』は世界を示唆したが、ルシウスにとってはそこに区別はなかった。

「んじゃまずはこの街の自警団にでも話聞きに行くか…と、ところで自己紹介まだだったな。おれはルシウスってんだ。まあ配達屋の事務をやってる。そっちは？」

「ユリコと言います。ずっとあらゆる『土地』旅をしています。この辺では聞き慣れない名だと思いますが、よろしく願いします。」

その白いローブを羽織った女は軽く会釈をした。

5次元空間／フォグナ歴紀元前五年、霧の世界（「エル」バスタ」の遠い昔）

霧の世界は思ったより長くなりそうなので途中で止めました、できるだけはやく後半書きますのでお読みいただけると幸いです。
ありがとうございました。

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界（前書き）

なかなか長くなりそうです。霧の世界編

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界

五：フォグナ歴紀元前五年、霧の世界2

ルシウスとユリコはその後、その街の自警団詰所へ行き、その晩の強盗について聞き込みに行った。

「おう、ルシウスじゃねえか、どうした何か用か？」

詰所の受付にいたのはカツ。ルシウスとは顔見知りだった。

「実はこのまえ家にはいった盗人のことを調べようと思ってな。」

「へえ、そりやまたどうした。昨日までは、大したもんはぬすまれてねえから別にいいって、話してたじゃねえか。」「いや、そうなんだが、この娘がなんかその盗まれた物を欲しいって言うてな。なんだか大切なものなんだとよ。この娘にとってはな。」

ルシウスは後ろのユリコを指差しながら応えた。

カツは後ろのユリコとルシウスを交互に見ながら言った、

「ふーん、こりやまた随分べっぴんな娘をつかまえたもんだ。どこでみつけたんだい？」

カツは明らかに勘違いをしているようだった。ルシウスはまあそう捉えるわな、と思いながら

「そんなんじゃないんだよ、この娘はその『羽』を探して家を尋ねてきたんだ。突然な。」

ユリコも何かいおうとしたが、ルシウスがめんどろになるから止めると、手で制した。

「まあいい。ちょっと待ってろ。事件についてまとめたノートがあるから、、えーと……あったこれだ。」

…悪いがあの事件のことはそれほど深く調べてなくてな…被害も小さかったし、なにしろお前がそんなに協力的じゃなかったからな…

しかし、ふむ、二件ほど、気になる証言があるな…一つ目はおまえの家から北側に三軒先のリースの話だが、真夜中に数人が道で話しているらしき音を耳にしている。その中で『光』という言葉を発していたのを記憶しているそうだ。お前さんの盗まれたものは、ランプだったんだよな？」

ルシウスは、変な顔をされるのが嫌だったので、盗まれたものを『火入りのランプ』と言っていた。

「つまり、犯人は街の北側にいるわけだな。」

そうルシウスが言くと、カツツは首を横に振った。

「いや、残念ながらそう簡単な話ではないんだ。もう一つの有力証言と言うのは、街の一番北側の牧場区との境目あたりに住む老人の話なんだが、その夜、三人くらいの人間が街を出て行くのを見たそうだ。さらにその後北の方で馬が駆けるような音も聞いたとのことだ。

つまり、その犯人…どうやら数人いるようだが、奴等は街の外へ逃げて行ったようなんだ。」

「この街の北には何があるんですか？」

ユリコが突然口を挟むと、カツツはそんなことも知らねえのか、という顔をした。

「ああ、この娘はこのあたりの人間じゃねえから、この辺の地理もわからないんだよ。

この街の北は、南と違って普通の馬でも行ける道が整備されているんだ。この街から出て、少し行くと森がある…そして森を抜けると…。

…。

「學術都市ヴィエンだな。」

「學術都市ヴィエン…？」

「ああ、いろいろな分野の学問に関する学校やら研究所やら何やら

が集まっけていてな。ハルプ国の文明進歩を牽引する都市…とかうたわれてるな。この街もそのヴィエンに近いせいか、小さい街にもかかわらず、学問の真似ごとみてえなことしてるやつは結構多い。おれは違うがな。」

『羽』の話もそういうやつに聞いたんだよ。とルシウスはユリコに耳うちした。

「そこは、例えば、神話とかを調べたり、なにか古典なんかを研究するような所もありますか。」

これにはカツが応えた。

「ああ、あるある。古書学とか言ったかな…なんかそんなのがあるよ。古い本なんか漁って、何が楽しいのか凡人には全くわからねえけどな。」

「そういうおまえも、『数学』に凝ってるってきいたが？」

「ああ…あれはおまえ、すげえぞ。東方からもたらされたらしい、インダス数字つてのはすごく便利だぜ。これのすごいところはな…」カツはその口調に似合わず数の概念を語る傍ら、ユリコは『羽』の行き先に確信をもった。

…ヴィエンに間違いない…。

「やれやれ、あいつにあれ語らせたらキリないんだから。わかんねえってな。ヴィエンの書物や器械みたいなものの中でも価値の低いものなんかはここに流れることも結構あつてな。

面白がつて読み出したり使い出す奴が結構いるんだよ。幸か不幸か、字読める奴もほかの街よりケタ違いに多いんだとよ。それで、どうも犯人は北にいるらしい。北といっても、森にいるのか、ヴィエンにいったのか、あるいは更に更に北なのか…」

「犯人はヴィエンにいます。恐らく。」

「へえ、どうして？」

「あなたの家から唯一『羽』だけが盗まれたことから察して、犯人は『羽』が目当てだったのだと思います。しかし、あなたの今迄の話を聞くと、一般的な町にしては知的な人の多いこの町でも『羽』については表面的な情報しか伝わっていない…。そしてそういう人々は、あなたの言うように、あまりあの『羽』を欲しいとは思いません。『地』を破壊したいとは誰も願わないからです。だから『羽』を欲しがるのは、あれの本当の使い方を知っている人、古い神話や伝説をより深く知ることが出来る場所…。」

「なるほどね。だからヴィエンでわけかい。で、本当の使い方ってのはなんだい？『地』を造り替える以外の力ということかい。」

「まあ『地』を破壊しなければならぬことは間違いないんですが…本人は助かるというかあらたな『地』で生きる方法があるんですよ。」

「へえ、本当かい。そりや惜しいことしたなあ。」

「いえ、でもそれを実行されては困るんです。困る人がたくさん出るんです。」

ユリコの顔が今迄で一番真剣なのにルシウスは気付いた。

「なんだかよくわからんが、俺は何とか『羽』をあんたに渡さなきゃいけないらしいな。…仕方ない。ヴィエンに行くとするか。」

ルシウスは街の事務所働いていたから、散歩コースよりも街の外側へ出るのは久々だった。盗人探しの為とは言え、ちよつとした旅行気分にもなった。彼は着替えを済ませ、お金などを用意し、出発した。

「それでも、おれにしては、上等なよそ行きなんだ。笑うなよ。なにしろヴィエンに行くんだから、できるだけおしゃれしなきゃな。あんたはそれでいいだろう。ヴィエンには異国の人間も多いと聞く

からな。その白い長いやつも特に浮いたりはしねえよ。」

ユリコの白いローブを上からしたまで眺めながら言った。

「さて、街の北側まで歩いて行つて、そこからは馬車に乗ろう。」

休日のにぎわいを見せる街の中心を通つて、二人は街の北門へ向かつた。

中心部から十分程いくと、大きな門と、その置くに馬車小屋があつた。

「このでけえ門が閉まつてりや、あんな盗みも起こらなかったのかも知れねえが、最近この辺は平和でな。夜も開けつ放しなんだよな……。ま、この街の人間がおおらか過ぎるのかも知れないな。」

それはユリコも感じていた。彼女は格好からして『よそ者』とすぐわかるにもかかわらず、この街に来て引け目を感じたり、変に避けられたりということがなかった。

彼女の故郷では感じるこのできない、好ましい、だが無防備な空気を感じた。

門をくぐるつた先の馬車小屋で、ルシウスは役人のような人に金を払い、小屋のなかでも小さな車と馬を選んだ。その後、役人が車と馬をつなぎ、二人は中に入り込む。

「あんまデカくはないが我慢しろよ。庶民のおれにはこれがいつぱいいっぱいなんだ。歩いていくよりやましだろ。半日がかつちまうからな。」

なるほど、随分しっかり整備された道が延々森の方まで続いているようだった。

二人は馬車にゆられながら、ルシウスの住む街を後にした……。

三、四時間のち、ユリコたちはヴィエンの南門到着した。

なるほど、そこがこの『世界』で進んだ『都市』であることは外観からも見て取れた。ユリコの住む世界で言えば前近代であたると思われるこの『地』にしては近代的な建物が、所狭しと並ぶ景色が、その立派な門の外からも見る事が出来た。ユリコが経験した二つの世界の歴史観からすると、二つの時代が一空間に並立しているように思える、不思議な感じがこの『地』にはあった。

門の横にある詰所で手続きを済ませると、二人はその異空間の中へ入って行った。

ユリコがまず驚いたのは、街路脇にずっと街灯が並んでいることだった。一瞬『電灯』かと思ったが、どうもそれとは違う感じがした。

「この明かりは、どうやって光っているんですか？」

「さあな、でも普通の炎とは違うらしい。おれがだいぶ昔来た時にはなかったな。」

「以前にも、来たことあるんですか。」

「ああ、もう十年くらい前になるかな。その明かりに限らず、この都市は日々変わって行くよ。おれたち民族はどうも勉強好きが多いらしい。そのせいで、どんどん進歩していつちまうのよ。」

その他、ユリコが驚いたのは、種の多様性だ。それら全てがこの『地』で同種の生き物として扱われるのかどうかは不明だったが。外見的にはとても多様な人々が普通に街路を歩いていた。なるほどこれでは私のようにちよつと変わった服を着た所で浮くはずもない。と思った。

市街地を進みながら、二人は（ルシウスはよくわかってなかったが）『古書学』に関する研究をしている所を探した。事件の関係者がそこに携わる人である可能性もあったし、ユリコはこの『地』に本当に『羽』の正しい使い方に関する説が伝わっているのかを確かめた

かったからだ。

その後街の人に聞いたり、案内を辿ったりして、ついに目当ての場所についた。もう日が落ちてからだいぶん経ったが、そこはまだ全ての窓から明かりが漏れていた。

全く前連絡もせずに、研究所の人が会ってくれるか、ユリコは正直不安だった。そこにいた、深緑色の制服のようなもの着た男は、あっさり二人を招き入れた。

その男は、二人を応接室のような所に通し、自己紹介から始めた。

「こんばんは。我がジョセブ研究所へようこそ。私は所長のジョセブです。今宵はなにか、古書に関して知たいことがありですか？」

「こんばんは。ユリコと申します。こちらはルシウスさんです。夜分に申し訳ないのですが、実は、……ええと『太陽の鳥の羽』の伝説についてお伺いしたいのですが。」

ユリコはつい一瞬、『鳳凰の羽の伝説』と切り出しそうになって、言葉に詰まった。

「ほう、『羽』の伝説ですか。それはこの『地』の伝説の中でもとくに古代から伝わるものの一つですな。よくご存じで。」

それ程有名な伝説にはなっていないのだろうか、と思いながらユリコは続けた。

「その、解釈の問題なのですが、遠い昔に於いて、その『羽』の力……つまり、『地』を造り替える力を多くの人々が求めて、争いを起こしたとありますね。しかし、もし誰かが『羽』の力を使ったら、いまある『地』が壊されて、新たな『地』に『造り替えられる』ことになってしまい、当然それを使用した当事者も消えてしまいますね。だとすると、その『羽』の力にそれほどの魅力があったとは思えないのですが。」

ユリコはここで、あえて正確ではない解釈をジョセブに話した。

「ふむ、なるほど。ユリコさんは『羽』の伝説についてなかなかお知りのようだ。感心なことです。しかし、その解釈は二つほど間違った、というか不正確な点がありますな。」

一つは『羽』の力を求めて争ったと言う部分ですが、争ったほとんどの人々は『羽』の力を実用するつもりはなかった。人々の間でその不思議な力を持つ『羽』は権力の象徴と見なされていたのですな。こういうことは他の伝説でも、また実際の歴史でもあることだそうです。人々になにをもたらず訳でもないものが、何らかの理由で神格化されたり、権力の示すものとされたり…。」

『羽』の場合、両方よね。とユリコは思った。

「…そして、もう一つの不正確な点は、この『羽』の力を使うためには、いまいる我らの『地』を壊さなければならない。と言う点です。確かに造り替えるという言葉をそのまま考えると、そう考えてしまいがちですが、

この伝説に於いて『地』は七つあると考えられていました。」

ユリコはやはり、と思いながらも、一応初耳のように振る舞った。

「七つ？私たちの住むような『地』がですか？」

「はい、そしてそれらはそれぞれ『地の果て』でつながっていたため、互いに行き来出来る。とあります。そして、『羽』の力を行使する時、壊す必要のある『地』はその七つの内一つでよいのです。従って、自分の住む『地』以外を滅ぼすことで新しい『地』をつくり、『地の果て』からそこへ赴いて、『地』の創造者になることが可能なのです。『羽』の伝説の争いの章では、これらのことを理解し、『地』の創造主になろうとした者もいた、と書かれています。ですが…。難解なためか、この部分を省いてしまう書が多いのです。知っているのは、我々ヴィエンの学者くらいでしょう。」「なるほど。そういうことだったんですか。やっと長年抱いていた疑問が解けました。ありがとうございます。ところで先日、あなたが着ている制服と似たものを着た男の方を南の町で見たのですが、研究員の方々はよく外出されたりするのですか？」

これももちろん、嘘である。

「はて？研究員は皆この近くに住んでいるし、一日の多くはこの建物内で過ごすことがほとんどで遠出もめったにしないと思うが…そういうえばここ一週間の間、ずっと姿を見せないのが三人ほどいましてな。どこにいるのかと思っていたのですが…彼らかも知れませんか。

どんな目的があるのか知らんが、来ないなら連絡くらいは欲しいものです。

まあ、ここに来ることは義務ではないから、仕方ないのかも知れんが…。」

「なるほど、きっとその方達だったんですね。あ、それではそろそろ帰ります。貴重なお話ありがとうございました。」

ユリコとルシウスは『三人』という点に半ば確信を抱いて、研究所を後にした。

とりあえずその日は、近くの宿をとることにした。

「やはり、あの研究所員が関わっていきそうですね。」

「いや、でもあの所長自体が…ってこともあるだろ。」

「はい、その可能性は確かにありますが…。でも後ろめたいことが思いあたるのなら『知らない』とか『研究員はよく外出する』と、もつと簡単に嘘をつけばいいんじゃないでしょうか。」

それに、『羽』のことについても、彼が盗んだとしたならば、彼は羽を使おうとするわけですから、あまり知られていない『羽』の本当の使い方は話したがないのではないのでしょうか。

先ほどの私の質問は、一つ目の彼の指摘だけでかわせるものでしたし。

とりあえずは、彼の話を実際だとして調べてみた方がいいのではない

いでしょうか。」

「てことは、今度はその『三人』を探すことになるな。
「そうですね。」

そこまで話した所で、二人はそれぞれの自室にもどり、ベッドに入
った。

しかし、翌朝、事態は思わぬ方向へ進んだ。

朝、朝食をとり二人が一階に降りると、下で先に食事をしてい
達の間では、ある噂でもちきりだった。
それは、

「魔法使いがあらわれた」というものだった。最初にそれを耳にし
たとき、ユリコは一瞬あせったが、どうも彼女のことを言っている
訳ではないようだ。

彼らの話を要約すると、全身『色のない』服の二人の男が夜中に都
市の外れ、スラム地区の通り裏、で光るランプのようなものをもっ
ていたらしい。二人はしばらく何かをしていたが、その後その光を
消してどこかへ消えて行ったと言う。

それを聞いたユリコは、さっきより一層顔をこわばらせていた。

一方ルシウスは魔法使いが何のことかすら知らなかった。

「へえ？ いろんな奴がいるヴィエンでも『色のない』服の奴はさす
がに噂になっちまうんだな。まあ、『色のない』布なんて、めった
にねえからな。でも『まほう』使いつて何だ？ いや何かを使うのは
わかるが、『まほう』てえのはここでは知られたものなのか？」

「あ、あの『色がない』って言うのは、透明ってことですか？」ユ

リコは恐る恐る聞いた。

「いや、まあ透明も色ないと言えなくもないが。『色がない』ってのはそーゆー状態だ。この『地』に初めから『色がないもの』なんてあつたんだな。おれは、光を遮らない限り、物の『色』はなくならないと、思ってたんだが…。」

彼は宿の物置き奥の光のあたってない闇をさした。

（やっぱり。）

そういえば彼女は、この『地』に来てから、『色がない』つまり『黒い』ものを目にしていないことを思い出した。夜の真暗闇を除いて。このヴェエンに着いてからは、夜も外は街灯が明るく照らすから、闇は室内の暗がりくらいにしかなかった。ここには黒色の概念が存在しないのだ。

ここには存在しないはずの黒を着込んだ存在、つまりは、恐らく別世界の存在……。

（まずいわ。でも、どうしてココに？ 奴等は世界を渡れないハズ…。ハズだけど…。）彼女は既にその存在に心当たりがあつたようだ

そうは案じたものの、彼女は既に、本来『渡れない』

者たちが、白魔力の助けなしに何らかの形で世界を渡る例を既に二つ知っていた…。

博史と、そして、自分のことである。しかし、いずれも極めて特殊なことで、他にはそうそう出来ないことと踏んでいた。

（いや、人違いの可能性もあるけど…たぶん間違いない…のかしら）彼女はいろいろ思案をめぐらせた。

しかし、やはりその二人を追うのが、最善の選択のように思えた。本当に二人が『黒魔族』だったら…

「ルシウスさん、その『まほう』使いを追いましょう。」

「なんだ。やっぱり光るランプってのは『羽』のことなのか？」
「わかりませんが、しかし、もし黒ずくめの二人が『まほう』使いならば、そうだと思います。彼らもまた『羽』を欲しがっていますから…。私は出来れば彼らの手に『羽』が渡るのを防ぎ、私が回収したいのですが…。こうなると、それよりも彼らに会うことの方が重要になります…。」

「なぜだ？」

「あなたの知らない『まほう』というものは、この『地』に良くないことをもたらすものなのです。何ていうか、この『地』の自然の決まり事を崩してしまうというか…。まあ毒をまかれるようなものなのです…。」

「そりゃ、確かに、まずいな。しかし、どういうことなんだろうな？ その『まほう』使いといなくなった研究員に何の関係があるんだろうな。それとも、実はどっちかは無関係なのか？」

「……わかりませんが、とにかく黒ずくめの二人を探しましょう！」

続く

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界（後書き）

すいません昨日嘘つきました。まだ続きます。ありがとうございました。

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界へ五次元空間・再（前書き）

とりあえず霧の世界は終わりです。

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界へ五次元空間・再

六：フォグナ歴紀元前五年、霧の大陸3

ルシウスとユリコの二人は『まほう』使いが目撃されたと言われるスラム街へ向かった。「スラム街というのは？」

「なんかよくわからんが、この都市の最下層市民が集まるところらしいな。発展も一番遅れているんだそうだ。」

それは都市の北端部であった。なるほど、確かに市街地中心部とくらべると建物も街灯もみすばらしく、昼間でも幾分うす暗いムードが漂っていた。

しかし、それでも五階程度の建物や、街灯があるあたり、この都市の文明レベルの高さをもの語っていた。

「この裏通りの奥の方だと言ってたな、その二人組とやらが出たのは。」

そこは何か物置のようなものが建ち並ぶ、その界限の中でもとくに薄暗いところだった。

「実際に目撃した人は誰なのでしょう…。」

二人はとりあえず近くの人に話を聞いてみることをした。

「おっと。ここらは危険な奴も多いらしいからな。気をつけろよ。」

ここはルシウスが先導して話を聞き込むことにした。

「よお、ちょっと話があるんだが、いいかい？」

ルシウスは近くを歩いていた、茶色の服の男に話しかけた。

「ああ、例の『色のない』服を着ていた奴等のことかい。そんならこの通りを10軒ほど行った所の左側の家に住む奴に訊いてみな。シエンって奴だ。」

男はさつき二人が歩いて来た広めの通りの更に先の方をさして言った。

「あいつが最初にそれを見た奴だって話だ。」

二人は例をして、シエンの家へ向かった。

「あらあ、もうどつちかつつーと夜明けに近い夜更けの頃だったな……おれは夕べは仲間で飲んでたんだがよ、その帰り道だよ。あの暗がりを通った時にな、なんか変わった色の光が見えたんだよ。

何だと思って奥の方を覗いて見るとな、なんかランプみたいなもんを持った二人組がいてよ、変な服を着てたんだよ、ランプの光で照らされてんのに『色』が見えねえんだよ。変なこともあるもんだ。で、おれはもの影から見てたんだ。そしたら、その光が消えたように見えたかと思うと、二人は立ち去って行ったんだ。」

「その光はどんな色だったんだ？」

「そうだなあ、何か赤っぽい感じだったけど、あまり見たことない、たてえようなない色だったなあ。」

やはり、その二人が『羽』を持っているのは間違いないようだった。消えた、と言うのは何かに入れたかしまったりしたのがそう見えただろうか……。

「その二人はなにか話したりしていませんか？」今度はユリコが訊いた。

「おお、何か物騒な感じだったな。『なかなか手渡さないから、少々手荒なことをした』とか何とか言つてよ。それと早く帰つた方がいい、とも言つてたなあ。」

「…あの二人がいた場所は、何か物置小屋みたいのがありましたよね？」

「ああ、見ての通りの物置だ。ま、こんな所だ。大したモンは入つてないが、おれらの中にだつて細々と商売してる奴もいるからな。そいつらの売りモンや商売道具みたいのが入つてる。ま、他所から見りやただのがらくただがな。」

「では、夜はあの中は無人なんですよな？」

「まあな、真つ暗だし、夜に来たがるやつはいねえよな。つていうか日が昇つてる時間だつて、あんなに人がいるのはまれだな。」

「…鍵は、鍵はかかっていますか？」

ユリコが焦り気味なのにルシウスは気付いた。

「…その中を調べることはできませんか。」

ユリコは何やら急いでいたが、事態は思うようにすすまなかった。彼女は、物置の中を、自分で、それも一人で調べたいと言ふのだ。しかし、スラムの人々にとっては貴重なものが入つたその中に、そうやすやす一人で入ることを許してくれる訳もなかった。

結局ルシウスの助けもあり、入口でシェンが見張ることと、ルシウスが彼女が何もせず戻ってくるまで人質代わりになることを条件に、シェンと貧商人は了承した。

そして、もう夕方も近くなるころ彼らは例の物置小屋の前に行った。

全部で四つの物置があつたが、いずれも鍵や扉は壊されては、いなかった。

しかし、むしろその事が彼女を不安にさせた。

（彼らは世界を渡れない…でも世界の中なら自由に渡れる…）

彼女はシェンに頼んで扉を開けさせた、なぜかただ開けさせただけで、特に調べもせず

「次、お願いします。」と次を開けさせた。

それを繰り返し、ついに、四つ目の扉のみが残った…。

（ここが最後：やはり思い過ぎだったのかしら…）

しかし、残念ながらユリコの予感は的中した。

その扉を開けるとなかはどす黒い霧のようなものが立ち込めていた。

そして、それは少しずつ、だが確実に外へ逃げて行った…

そして、ユリコ以外のこの『地』の人々はみな、次々倒れて行った。

ユリコは一瞬、優先順位に悩んだが、すぐ、一人物置の中に入って行った。

中を進めば進むほど黒い霧は濃くなっていき、彼女ですらそれにあってられそうになっていた。

しかし、どうにか奥の方に進むと、そこにはなにか大きな三つの塊があり、黒い霧はそこから出ているように見えた。暗がりでも見えなかったが、ユリコにはすぐわかった。

それは、奇妙に黒ずんだ死体だった。

シェンから借りた蠟燭を当てると、例の緑色の制服を着ているのがわかった。やはり、あの研究員だ

ユリコがやるべきことはわかっていた。彼女はすぐさま懐から細い

棒を取り出すと、何かを呟きながら三人に向かって順に棒を振った。

すると霧は瞬く間に黒から灰色へ変わっていった。

すると彼女はすぐさま入口に戻り、シエンやルシウス達にも同じようなことをした。すると彼らはすぐに目を覚ました。

「あれっ、おれ何していたんだ……わっ！なんだこの灰色の霧は！
目を覚ますなりルシウスが声を上げた。

「理由は後で話しますから！この界限の人に、しばらく外に出ない
ように呼び掛けてください、そして、私たちも一度シエンさんの家
に非難しましょう！」

彼らは意味が解らなかったが、その霧がなにか異変であることはわ
かったので、これにしたがった。手分けして人々を家の中にとどま
らせた後、シエンの家に入った。

シエンの家のなかでユリコはルシウスに真相を話した。理解される
かは不安だったが…。

「あの『色のない』霧の正体が、魔法、特に『色のない』魔法を使
うことによって生じる『陰』と呼ばれるもので、本来この『地』に
はない筈のもののなのです。

しかし、他のある『地』に於いてはそれが常に存在し、その人々
はそれを体のため込むことで『色のない』魔法を使うことが出来ま
す。

そして今回、何らかの理由で、そういった人達が、体に『陰』をた
め込んでこの『地』に現れ、ここでそれを使ったのです。ある三人

の男を殺すために。

魔法を使うと、『陰』はその魔法がかかった媒体から放出されます。しかし、ここは『陰』が元々存在しない筈の所、存在してはいけない所なのです。元来、『陰』が存在しないところの生き物にとって、それは死に至る猛毒…それが、魔法をかけられたあの三人の死体から放出されてしまったのです。」

「じゃあ、これからどうなるんだ。」ルシウス一人は、何とか話を理解していた。

「物質の気体と違って、『陰』はそれがなかったところに発生してしまうと、同じ濃度を保って無限に『地』全体に広がって行きます。彼らは三人を殺める時に、この『地』の生き物が死ぬに足る濃度の『陰』を放出したため、放っておくと『地』に生きる全てのものは死滅しかねない所でした、なにかで遮れば多少『陰』の拡散スピードは遅れるものの、それでもいずれば……。

…しかし、私が白魔法で中和したので、それは回避しました。」

ユリコは、本当はこのことは話したくはなかった。自分が白魔力を持つことを知られることが不安だったが、かといってそれを隠して現状をうまく説明するうまい嘘もおもいつかなかった。

「あんたも魔法使いなのか！」ルシウスは怯えと驚きを含んだ声で話した。

「はい、ただ、私の使う魔法は、あの三人にかけられたものとは異なるものです。私の魔法は『白魔法』と呼ばれ、『陰』の対にあたる存在、『陽』をため込んで放出するものです、使うと、やはり媒体から『陽』が無限放出されます。

本来、『陽』は真っ白い霧のようになって存在するのですが、先程は『陰』とまざったため、灰色の霧が放出されたのです。これは『^{なま}風』と呼ばれるものです。

『風』は中性なので、たとえ『陰』『陽』が存在しないはずの『地』でも、目立った害はありません。これも媒体から無限放出されますが、『陰』『陽』と比べ拡散がゆっくりなのが特徴です。これが世

界全体を包むまでには数十年はかかると思います。」

彼女はいずれ知られることと思いつながら、伏せておいた。

『風』も魔力であり、エネルギーを持つことを。

その後中和が完了するのを待つて、黒魔族の行方を探したものの、見つけることは出来なかった。『羽』も行方知れずのまま…。

ユリコは、魔族はもうこの世界にはいないと思った。彼らにはここに長居する気はないように思えたからだ。長居をするならば、自分たちがいる間、殺しがばれてはまずいから、死体はもっとうまく隠すだろうし、そもそも世界を滅ぼすようなことはこのタイミングではしないだろう。

最悪の事態を避けられただけでもよしとするしかないか、とユリコは諦めた。

その後数日はあたりを探したりしたが、やはり魔族は見つからなかった。

その間も町の景色は少しずつ灰色になっていった。

一体なぜこんな離れた所にいる研究員が、『羽』のありかを知り得たのか、更にはなぜここに魔族が現れたのか…数々の謎を残したまま、二人はヴィエンを後にした。

彼らが町に帰ってきたその日、またジュニが尋ねて来た。

「おう、なんだい、どこか行っていたのかい？その美人さんと一緒に」

「まあ、ちよつと探しものをな。」

「ああ、盗まれた『羽』かい？」

「そうだ、結局見つからなかったがな…。」

「そうかい、そりや残念だ…残念と言えば、実は昔例の『羽』の本を譲りつけた、おれの知り合いが、数日前に急死しちまつてな。

まあ、ちよつとものを売った程度の知り合いだけど、やつぱり恩もあるし、

何だかな…。」

「へえ、そりやまた気の毒に…。」

「ああ、先日もちらつとおまえの『羽』の話をしたら、えらく興味を持っていてな…。」

ルシウスは話を遮って、

「ん？そいつ何やつてる奴なんだ？」

「ん？ああ、なんかヴィエンで古書の研究してるやつよ。だから価値の低い書をもらったことがあつてな…。」

彼の友人が謎の一つを解いてくれた。

七：時間不定、五次元空間内

ヒルバリーはノアにユリコのことを話し、その後こう続けた。

「と、まあ研究員がジュニから『羽』のことを訊いて、盗みに入っ

たことはわかったんだけど、黒魔族がなぜそこに存在したかは未だ謎のままなんだ。彼らは世界を渡れないからね。世界の中は渡れるのだけれど。」

「世界の中？」ノアが聞き返した。

「彼らは普通の3次元空間の中に、自由に『2次元空間』を造り出すことができるんだ。『2次元』は『3次元』よりベクトルが一つ少ないから、ベクトル一つ分、

つまりある地点とある地点の距離をないことに、すなわち0にできるわけ。だから、離れた場所にすぐ行けたり、壁やなんかを抜けたり出来るんだ。これも黒魔法なんだけど、物質が媒体ではないから、『陰』は放出しない、特別な魔法なんだ。

おっと話がそれたな。

こうして、霧の世界は文字通り『風』という魔力の霧でつまれた。まあ、『僕らの白魔力』ってのは、少し適切ではなかったかな。でも、その『風』をうんだのは、やっぱり僕らの力のせいなんだよ……。そして、それから五年後になるのかな、キミの世界で初めてその霧のエネルギーの存在に気付いた霧学者が現れた。くしくも彼もまたヴィエンの者だったようだね。人々はその霧を『フォグナ』と呼んだ。

フォグナ歴の幕開けだね。その後『風』が世界を包んで行くのと同じ時に霧機械化が進み……。キミに至ったわけだ。

ユリコは一つの世界を救ったんだろうか、滅びに向かわせたんだろうか。どっちなんだろうね……。」

ノアは霧の世界の全てを訊いて、驚きはしたものの、白魔族を恨む気持ちは起きなかった。

「ユリコさんはその時できる最善のことをしたのだと思うよ。

彼女の行動が無ければ、我々はこの世界を『霧の世界』にすることすらできなかったんだ。それに、世界が滅んだのはあくまで霧族の奢りだと思っている。もうすこし『風』をうまく使う方法があった

のだろう…。」

「『風』はその拡散スピードがとても遅いから、僕らの世界の『陽』よりも、扱いは難しいからね…仕方の無いことではあったんだけど。」

「

「しかし、霧族だけならともかく、繁栄の恩恵のない他の生き物までまきぞえにしてみました…」

その後ノアは黙ってしまった。

繁栄とは何なのか。

世界は誰のものなのか。

『滅び』は避けられないのか…。

深く思案を巡らせるノアと全てを正直に話したヒルバリー、そして『エル』バスタ』の意思を継ぐ生き物たちを乗せた舟は、5次元空間を抜け、『陽』の雲の中にとびこんだ…。

続く

フォグナ歴紀元前五年、霧の世界へ五次元空間・再（後書き）

ありがとうございました。次はもちろん黒魔族について書かねばなりませんね。次もよろしくお願いします

フォグナ歴紀元前五年〜シルム時代136年冬の月、陰界（前書き）

霧の世界編が終わったといいながらまだ霧の世界です。ただし、今度は視点が違います。あくまで黒魔族編です。

フォグナ歴紀元前五年〜シルム時代136年冬の月、陰界

八：フォグナ歴紀元前五年、霧の世界

ゲシヒテとラボイデの二人が気がつくと、そこは夜の草原であつた。二人は何もないその草原の真ん中に寝そべっていた。身を起こして見ると、すこし遠くに、みなれない色に光る建物群が見えた。それは二人が見たことのない、二人の世界にはない景色だった。

「あの都市でよいのか？」ゲシヒテは訊いた。

「ああ、恐らくあれだろう。しかし、俄には信じ難いな。ここは本当に、『世』に言う霧の世界なのか？我々は、世界を渡ったというのか？」

「あの光景を見る限り、おそらくはそうなのだろう。あの建物も光も、我々の世界では見えないものだ。さあ、とりあえずはあの都市へ行こう。」

そう言うと二人は棒のようなものを懷から出し、それで空に円を描いた。すると空間が割れその円の中だけ、奥に別の景色が見えた。二人がその中に入ると、草原からは姿を消した。」

何もない草原で、風だけがざわついていた。

その頃二人はヴィエンのスラム街の人気の無い夜の通りを歩いていた。

「しかし、本当にこの都市に『羽』があるのか？」ラボイデが訊いた。

「いや、それはもつと南の方にある。ということだ。」

「じゃあ、どうしてここに？」

「わからんが、王は必ずこの世界の人間を使つて『羽』を手に入れさせる。と言っていた。どうも、王にとっては、『羽』を手に入れることだけでは、ここでの『目的』は達成されないらしい…。

それで、だ。この都市にはどうも『羽』の伝説を正確に知っている、この世界では数少ない人間がいるらしいんだ。なにかそう言う伝説とかに詳しいような人がな。

別に『使つ』人間は誰でも良いが、そう言う奴の方が話は早いだろうからな。

さあ、その『古書学研究所』とやらに行こうか。おっと、人には余り見られない方がいいらしい。この格好はこの世界では異様らしいからな。」

真夜中とあつて街にはあまり人がいなかったので、それほど気にせず市街地を進んでいった。

目的地に辿りつくと、さすがに研究所の明かりはまばらだった。中に入ると、ロビーは明かりはついてしたがひっそりしていた。

奥から若い研究員が顔を出した。

「どちらさまですか？あいにくもう所長はお帰りになりましたが。」

「少し話があるんだ。『羽』の伝説に関することなんだが。所長じやなくて、君でいいから、少し聞いてくれ。」

図らずも、この瞬間に彼の不幸な末路が決定した。

研究員は一瞬不審な顔をしていたが、逆にそこに好奇心がわいたのか、彼は二人を通した。

応接室のようなところに通されると、早速ラボイデが話を切り出した。

「君は、『羽』の伝説を正確に、深く理解しているかな。なぜ、あれが戦乱を生んだのか。そして、あれの本当の使い方。…」
すると研究員は得意な顔で、彼の質問に応えた。

彼が『知っている』ことを確認すると、ゲシヒテが本題を切り出した。

「さて、ここからが本題だ。もし、その『羽』が実在するとしたら、どう思うかね。」

突飛もない質問に彼は驚いた。しかし、彼には既に心当たりがあった。

「や、やはりあの話は本当なんですか？」

「ん？ なにか心当たりがあるのか？」

研究員は誰もいないのに、小声になって、

「実は今日、仲間の研究員が、ここから南の町で『羽』を持っている男がいるって話を聞いたんです。まだ研究員の2、3人しか知らない話なんです。」

「それは本当かね！？」

「いえ、まだ噂に過ぎませんが。…」

ゲシヒテはいよいよ、本題に入る。

「実は、君に頼みがあるんだ。その『羽』が実在するのかを調べた後、もし本当に存在するなら、どうにかして手に入れて欲しいのだが。…」

もちろん、お礼は充分するつもりだ。わたしがやってもいいのだが、なにぶんこの辺りには不案内でね、地元の人に頼んだ方が、事は楽に行くと思うんだが。…」

研究員は少し考えた後、

「わかりました。何らかの方法で手に入れることが出来たなら、あ

なたにお伝えし、相談に乗りましょう。」と告げた。

その後、二人は彼に滞在する宿を告げると、研究所を後にした。

それから三日後、その宿に例の研究員が仲間二人を引き連れて現れた。ラボイデとゲシヒテには、三人が妙におびえているように見えた。

話を訊くと、事態は思わぬ方へ進んでいた。それは、ゲシヒテとラボイデにとってさえも…。

「その日、私たちは研究所でのちょっとした会話から、噂が事実か確かめに行こうということになり、例の『羽』を持つ男の家まで行ってみることにしたのです。」研究員は自らが犯した『罪』を悔やみながら、話を続けた。

しかしその日、三人は研究が長引いてしまい、町に着く頃には、もう夜になっていた。

三人は明かりのない、なれない町を歩きながら、彼らの中の一人が聞いた噂の男の家へ向かった。

しかし、街の南側に至ると、彼らの目的地を特定することも、噂が真実であることを是認するのも、そう難しいことではなかった。

南側の通りに面したある、家のドアの窓から、珍しい赤々とした光が漏れていた。

三人はそれを見つけると、光に引きつけられるように、その家の前へ駆け寄った。

赤々とした光を三人は見つめていると、次第に光は強さを増したように思え、三人の視界は真っ赤になった。

次の瞬間、三人はドアを開けようとしていた。鍵がかかって開かないとわかると、今度はそこら辺のものを使って、ドアを壊した。

玄関の中に入ると、中では真っ暗な中にその『羽』だけがあの光を発していた。

三人は示しあわせたようにその『羽』の入った容器を手に取り、持ち去って行った…。

「その後、このヴィエンに帰ってくるまでの記憶はほとんどないのです。気がつくと、空が白み始める中、私たちはヴィエンの南門に立っていました。」

なぜ、あのような事をしてしまったのでしょうか。

確かに『羽』の噂を知った時は、こんな研究をしていますから、一目見てみたい、位には思いましたが、まさか、盗むだなんて…

私たちは、その事実を確かめた後、改めて彼に『羽』を譲ってくれるよう交渉するつもりで…。」

これにはゲシヒテとラボイデも驚きの色を隠せなかった。しかし、自らに与えられた仕事を済ますべく、話を続けた。

「その、『羽』いまどこに？」

「はい、私たちはそれ以降その『羽』、というかその光が恐ろしくなったため、明るい内に覆いで隠して、あるぼろ物置の中に隠したのです。」

それからというものの、犯行が明るみにでるのが怖くて、まともに外を歩けない始末です。」

「では、私たちにそれを譲っていただけるかな？」とゲシヒテが訊くと、

「はい、あんな恐ろしいものは、出来るだけ遠くにやってしまいたい。」

「お願いです、異国の方。あれを持って行ってしまってください。」

「では、今日の夜、その倉庫へ連れて行っていただく。」

我々はそれを受け取ったらずぐ出発する。この地でこの格好はあまり良くないらしいからな。

出来るだけ人に見られることなく、早く立ち去ろうと思うのだ。」

「了解しました。我々はそれまで自室で待機します。」

と言うと三人はそそくさと帰って行った。

「どういうことなのだろう。」ゲシヒテはさっぱり意味がわからなかった。

「わからん。しかし、話に聞く狂気の行動、そしてあの異常な怯え方：いずれも『羽』が関連しているのだろう。」

「この箱を持たせたのも、やはり意味があると言っわけか。」

ゲシヒテは隣りに置いてある、不思議な文字の書かれた『色のない』箱を見ながら言った：「。」

その日の夜中、人気がまばらになったのを見計らって、5人は彼らが言う倉庫へ向かった。

辺りは先ほどの市街地より幾分みすばらしい風景で、街灯はあるものの、かなりうす暗く感じられた。

彼らはそのスラム街の通りから更に奥まった所の、倉庫が四つほどたちならぶ所に入った。

「ここです、あれ、この前は鍵が開いていたのに……。」

「心配ない。」

ラボイデはどうせもうすぐ立ち去るのだからと、気兼ねなく懷から棒を出し、空に円をかいた。

すると円の中には倉庫のなかと思しき暗い室内の景色が現れた。

「なんです！？それは」

三人はさすがに驚いていたが、

「気にするな。さあ中へ」

とゲシヒテが先導して五人は中に入った。

その後三人はゲシヒテとラボイデを倉庫の一番奥へひきつれていき、その棚の端に置いてある楕円型の黒い包みをさして

「……これです。」と示した。三人はどこか、落ち着きがないように見受けられた。

「ほう。」

ラボイデはそれを手にとると、中身を確認する為、覆いをとってしまった……。

中にはランプのような入れ物の中に、赤々と輝き燃える『羽』が入っていた。

「間違いない。確かにこれは『不死鳥の羽』…では、いただくかな。」

……

三人から返事がない。

「ん、どうした？」とラボイデが聞き返したその時。

「それは私のだ！！貴様らには渡さない！！」と一人の研究員が叫んだかと思うと、他の二人がゲシヒテとラボイデに飛び掛かって来た。

「なんだ？どうしたと言うのだ？」

「貴様らには渡さない！！『羽』は渡さない！！」

三人は二人に覆いかぶさるようにして倒れこむと、何度も殴りかかってきた。三人は完全に正気を失っていた。

最早、何を言っても通じないと、感じた二人は、おもむろに棒を取り出し順に3人に向かって振った。黒魔法のスペルを呟きながら……。研究員はたちまちその動きを止め、その場に倒れた。もう、息はなかった。

彼らは三つの肉体に一応の祈りをささげ、倉庫を後にした。2次元を通って…。

「やれやれ、少々手荒なことをしてしまった…正当防衛とはいえ、こんなことになるなんて…これも『羽』の秘めた力のせいなのか…。

「おい、オレらだってそれにあてられては危険だ。さっさとここにしまおう。」

ゲシヒテは先の不思議な文字の書かれた箱を出し、羽をしまった。

「これで、この箱を開けない限りは安全な筈だ。さあ、早くここを去ろう。予定の時間は？」

「今日未明だな。」

二人はまた都市の北側の草原へ向かい歩いて行った。

一人のみすばらしい男が盗み聞きしていた事には気付かず…。

二人は草原に着くなり、祈りを捧げ、箱にも何かをつぶやいた後、そこに寝そべって眠った。気が遠くなると共に、意識が離れて行くような、不思議な感覚に陥った。

次に目が覚めると、黒い霧の向こうに、見慣れた漆黒の城がぼんやりと浮かんでいた。

九：シルム時代136年冬の月、陰界

二人は起き上がるとすぐさま城へ向かった。

城に入ると、真つ先に王のいる最上階へ向かった。

階段を昇った先に、二人の男が入口にいた。ラボイデが用件を伝え、彼らは王室の中に通された。

「戻ったか…待っておったぞ。」王は二人に背を向けながら言った。

「いまはあれから何年後の冬の月ですか？」

「二年だ、二年後の136年だ。あの翌年は、残念ながら同調^{シンクロ}に支障があつてな。何か別の存在の波長が妨害したのだ。それで『羽』は手に入れたか？」

「はい、ここに。」ゲシヒテは王に箱を手渡した。

王は箱の文字を確認すると、中を確かめることもなく、それを家来のものにしまわせた。

「して、だ。おぬしら二人の失態の情報は、しかとこちらにも来ておる。黒魔法を『フォグ』のない所で使うのがどうということなのかは知っておるな？」

ラボイデは恐る恐る応えた。

「はい、確かに。しかし、あの場合仕方なく…『羽』にあてられたらしき彼らを止める術は、他にありませんでした。」

「なるほど、しかし、『罪』は『罪』だ。なにしろ一つの世界を滅ぼすことになるのだからな……。」

「二人にはしばらく牢獄に入ってもらふことになる。詳しい処遇は後日言い渡すことになるう。」

「…はい。」

声をそろえて二人は承知した。

牢にいれられるとすぐに、壁越しにゲシヒテはラボイデに話しかけた。

「我々は、どうなるのだろうか。」

ラボイデは、わからんと言った後、

「普通なら一世界の崩壊は死に値する大罪だが…今回はそういうことにはならない筈だ。王はいきさつを知っておられるようだし、何しろあれは本当にやむを得なかったと言わざるをえないからな。」と続けた。

「しかし、『羽』があのように人の心を狂わせてしまうとは知らなかった。あんな恐ろしいものだったとは…。」

「ひよつとすると、あれが争いを生んだ別の理由はあれなのかも知れないな…。」

ラボイデは言葉を選びながら、

「王は、どうなんだろう…最近随分『羽』に熱心なようだ…。」
するとゲシヒテは

「めったなことをくちにするものではない。あれは、王なりの考えがあつてのことだ。恐らくな…。」とたしなめた。

そのころ王はその寢室にいた。

「ふう、ついに『羽』を手に入れることが出来た。これも、『あの

方』のお陰だ。予定が完全にうまくいっておれば、世界を一つ空白にすることにも成功した筈だが…。」王は、『霧の世界』がユリコによってその崩壊を束の間免れたことを知らないようだった。

「さて、『罪』は誰かがうけとらねばならぬ。…気の毒だが、あの二人と言つことにしようか…。頑張ってくれたのだし、いささか惜しいが…。」

王は枕元に『箱』を置いた上で、床に就いた。

続く

フォグナ歴紀元前五年〜シルム時代136年冬の月、陰界（後書き）

次回も陰界を……。と言いたい所ですが、その前に挟むお話があります。ありがとうございます。

周期制定前〱0周期、奈落（前書き）

今回から奈落編です。『奈落』は今回の世界の通り名。由来は本編を読めばお解りいただけるかと思えます。

周期制定前〱0周期、奈落

十：周期制定前〱0周期、奈落

そのころ、奈落はまだ未開の地がほとんどで、二つの国しか存在しなかった。

一つは赤羽国、そしてもう一つは青羽国

かつては、二つの国の交流は全くなく、お互い未知の存在だった。なぜなら、二つの国の間には、深い深い谷があったからだ。

その谷の底を知るものはなく、以前は、渡る方法もなかった。

状況が変わったのはいまから100年くらい前、青羽国が、赤羽国に向けて橋を建設した時であった。橋は幾人かの死者（と思われる谷底に墜ちたものは生死不明）をだしながら、20年後に完成した。

さてその橋が完成する少し前のこと、赤羽国は、丁度、君主交代の最中であった。

前の君主、慶蘭が259歳にして永久の眠りについたので。

この世界の人種は極めて長命なようで、平均寿命は300年程度と言われているので、慶蘭はいささか若い内に亡くなった方だと言う。七七日晩の話し合いの結果、次代君主に選ばれたのは末っ子の慶徳であった。彼は慶蘭の子息の中で唯一年齢がまだ二桁で、かなり若い君主といえる。

しかし、実権を誰か他人が握るといいうのではなく、れっきとした彼による政が期待されての抜擢で、それほど彼には人望も才能もあつたと言ふことなのだろう。

その日、定めに従つて、祠のなかで、即位式典が執り行われることとなつていた。

慶徳は祠用の衣装に着替え終わると、祠に向けての出発を待つていた。

「出発はまだか。」かれはとなりにいる莊孫に訊いた。

「部下たちが手配しておりますが、もう幾分かかる模様でございます。しばしのご辛抱を。」

「ふむ、そうか。ところで莊孫よ。」

「なんでしよう」

「お主は、今回の即位、正しかったと思うか？」

突然の質問に莊孫は驚いた。

「そんな、私はそのようなことに口を出せる立場ではございません。」

「

「気にするな。あくまで此所だけの話だ。と言ふのもな、私はやはり、まだ自分がこの地位に就くには未熟なのではないかと、常々思つてしまふのだ…。」

それに、兄上たちをさしおいて、このような即位…何かよからぬことが起きる気がしてならないのだ…。」

一般的に、この国の世継ぎはより世代が上で、兄弟ならば長男から、と言うのが通例であつたから、それを破ってしまった彼は、それが周りの推薦のためとはいえ、不安を隠せなかつた。

莊孫は少し考えて。

「自分はそのようなことに口を出せる立場ではございませんが……

私は慶徳様は間違いなく、それにふさわしいかただと考えます、それは私に限らず、大多数の人々が考えていることと思います。確かに、慶徳様をよく思いでない方もおられるようですが、嫉妬という邪な感情を持つ人間の全てに好かれるということは不可能なことですから致し方ないでしょう。

慶徳様がこれから、かつて私に話して下さつたような豊かな国の構想実現にむけて正しい判断をなされば、彼らも批判などできようもありません。

どうぞ、自らの才能に自信をお持ち下さい。」

慶徳もまた、莊孫を側近に選んだことが正解だつたと、この時強く思った。

しばらくすると、迎えの馬車がやって来たので、莊孫をはじめ、数人の部下と共に、祠へ向かつた。

祠へ着くと、彼らは広い小石の庭園を通り、建物の前まで行つた。しきたりで、そこからは慶徳一人で、一段ずつ階段を昇り、小高い台座の上に座した。

すると前から祠を守る守者とよばれる者が三人あらわれた。最後尾の一人は、何か黒い布にかぶさつた、卵型のものを持っていた。

先頭の守者がまず慶徳の目の前にたち、祈りを告げると横に例の卵型のものを持って来て、その覆いを取った。

中には、赤々と燃える『羽』が入っていた。君主はこの光を目にし、浴びることがしきたりになっていた。

後の世に継がれる聖人君子誕生の瞬間だった。

その後、全ての儀式が終わり、彼は最後に部下達に向かい演説をした。

「この度こうして、私が君主になった訳であるが、私あのぞんであるのは只一つ、この国が平和でありつづけてくれることである。そのためには、民が不幸にならない、不幸を感じないような政をこころがける必要があるのだと思っている。

そして私の代には、この国史上初めてのことがおこるだろう。今青羽国が建設している橋は、このまま進むと、後数年でこちらに届くであろう。

それによってこの国は青羽国との交わりを持つことになる。外の国との交わり、外交とでも呼ぶべきだろうか、この国を平和に保つためには、青羽国との関係を良好に保つこともまた、必要なことであろう。

いずれにしても、この国の民が幸福でいられるような国を目指すつもりであるから、部下たちも私の手助けを、ぜひお願いしたい次第である。さあ、

『赤羽』の下に、国よ永遠なれ！」

式典が全て終わると、帰り際、車内で莊孫と再び会話を始めた。「ふう。これで祝いごとは終わりだ。明日から君主としての日常が始まるのだな。とはいえ、先代がうまくお治めになったこともあり、現時点では、大きな変換は必要ないと思うのだ。やはり、政策上、私に試練をもたらすのは、近い未来完成する、青羽国とこの国を結ぶ橋であろうな。」

「青羽国…一体どのような人間がいるのでしょうか、そして、赤羽国に対してどのように接して来るのでしょうか。」

「最悪」…それは慶徳にとって本当に最悪なことだが、

「…最悪、突如向こうが攻め込んで来る、ということもあるうな。やはり、念のためその日に向け、軍備を整えて置くべきなのか…人を殺めるための集団を鍛えるのは気が進まぬが、向こうがもしそのような態度であれば、民を守るために、戦うことも致し方ないのだろう…。」

しかし、出来るだけ軍はつかいたくないものだ。もちろんこちらは友好的な関係を築くつもりでいる。」

「きつと、慶徳様の想いは、相手国にも伝わることでしょう…。」

その後、慶徳が予想したとおり、橋が完成するまでの四年間は、大きな変も起こらず、平和な状態がつづいた。

彼の政も、成り行きにまかせるように、大きな変換をすることなく行われた。ただし、彼があの日車の中で話していたとおり、国防軍は着実に鍛錬を進めていた。

そして、その日、その後の歴を数える上で基準となるその日に、青羽国の橋は完成した。

翌日、文を持つ青年が向こうからやってきたが、文は解読出来なかったもので、言伝で聞いた。七日後に、青羽国の君主が赤羽国を訪れるとのこと、そして会合を開いた後、橋を一般開放することになった。

慶徳はこれに了承する旨を告げると、青年はまた橋の向こうへ消えていった。

約束の日、赤羽国は青羽国の君主をもてなす準備を終えた上で、慶徳はじめたくさんの部下は、赤羽国側の橋の前で、君主を迎えるため整列した。

向こうから君主思しき人と多くの付き人が見えると、こちら側では驚きの声が上がった。

「あれか、あの一番雅な衣装の方か？あれがあちらの君主なのか？」

「まさか、だってあの人はどうみても……。」

そもそも君主が車に乗ること無くその足で渡っているのも驚きだったが、それよりも皆を驚かせたのは、

あちらの君主と思しき人は、どうみても女だったからだ。

それは遠めに見ても、若く美しい女性であった。

数分後、その美女と取り囲む部下と思しき一団が、赤羽国にその足を下ろした。

周囲がざわつくなか、まず慶徳は確認した。

「青羽国の君主に間違いございませんね？」

女は控え目に首を縦に振った。周りが一層ざわついた。しかし、慶

徳は冷静に、そして丁寧に挨拶した。

「赤羽国へようこそ。二つの国に交わりができたこの喜ぶべき歴史的瞬間をまのあたりにでき幸せに思います。私の名は慶徳。現国家君主でございます。部下たちに落ち着きがありませぬが、この国では女性が君主になるということはあまりないためもの珍しさを隠せないようです。何卒、失礼をお赦し下さい。」

すると今度は、その美女が挨拶を始めた。

「はじめまして。今日はわたくしたちにとって夢が叶った輝かしい日になりました。お会いできて光栄ですわ。わたくしは青羽国の女后、そちらの国の君主にあたる身かと思われま、青妹おうせにございます。」

その声は、その容姿にふさわしい、若々しく美しいものであったと言う。

二人は互いの部下を連れて、赤羽宮へ赴いた。

この歴史的瞬間に、二人が双国の長だったことは、慶徳、青妹二人に、そして、赤羽国、青羽国の両国に、予め定められた運命だったのだろうか。そして、この交わりが両国にもたらす事態もまた、必然であつたのだろうか…。

続く

周期制定前〓0周期、奈落（後書き）

ありがとうございました。今回はちょっと短めでしたかね。続きの構想はかたまっているので出来るだけはやく更新します。おたのしみに。

0 周期、奈落（前書き）

奈落編の続きです。諸事情で一話あたりの長さが短めになっていますが最近なかなか忙しいためでご容赦を。

0 周期、奈落

十一：0 周期、奈落

二人の長と部下たち一向は赤羽宮の東側にある庭園に集まった。

双方は二人だけで話したいと言ったので、ほとんどの部下は宮に戻り、側近も少し離れた所で待機することとなった。

今はこちらで言うなら春と呼ぶべき季節。柔らかな風が吹き、庭園の木々には桜の花が咲いていた。

「しかし、正直驚いてしまいました。まさか君主…そちらでは女后という国の長となる存在が女性だったとは…。」

「わたくしの国では、代々女性がこの地位に就くことになっておりますわ。なぜかはわからないけれど、もう遠い遠い昔からそうしているようです。」

「それと、何か車のようなものに乗って来られると思ったのですが、そちらにはそういうものはないのですか？」

「…いいえ、わたくしも普段は部下たちに頼ってしまい、自分の足で歩くことなど少ないのですが…」

今日この記念すべき日には、あの橋をどうしても、自分の足で渡りたいと、そう思いましたの。」

そこまで話すと、二人はしばし言葉を止め、目の前に広がる庭園の景色を楽しんだ。

「…すばらしい庭園ですわ。桜の花が美しい…。」

「気に入っていただけでよかった。この庭園は部下の者たちの念の入った手入れのおかげで、この国内では比類なき程の美しさだと思っております。それに、あなたは丁度良い時に来られた。やはり、桜の花に勝るものはないでしょうからね。」

「実は、このように赤羽国の君主の方とお会いするのは、長年青羽国の女後の夢でございました、しかし、いざ今日赤羽国に参るためにあの橋を渡る時は、正直不安でしたの。」

連絡のつてがなかったとは言え、いきなり橋を建設して、いきなりの訪問でしたから…悪い心情を持たれるのではないかと…。こんな話は失礼かしら。」

慶徳は首を振り、

「いえ、なにも情報がなかったのですから、不安になるのは当然でしょう。それは我々も同じこと。」

青妹后が続けた

「けれど、赤羽国が平和で友好的なようでよかったわ。とてもわたくしの国と雰囲気似ているように思いますわ。」

違いと言ったら、わたくしの国の美しい時期は、紫陽花の咲く雨の季節だということくらいかしら…。」

「近いうちに、今度は私があなたの国へ赴きたいですな。」と慶徳が言つと、

「それならば是非雨の季節に。」にこりとして青妹后が言った。

その後二人は、お互いの国について話し合った。気候や農業、手工業の様子、民の生活や商いについて……。

やはり両国は完全に隔てられていたので、そこには全く違う文化があるようだった。

青妹后は表情豊かなようで、このような話に於いても、自国との違

いが見つかる度に、驚いたり、感心したりしていた。

さて、話が一段落した時、ふと青妹后は少し遠くの景色に目をやった。ここは少し小高い所なので、国の東側の街を見下ろすことが出来る。

「あれ、なんですか？」

青妹后は東側の街のさらに向こう、小さい山の中腹にある、一風変わった建物を指差した。

それは、代々君主が即位式典を行う祠であった。

「ああ、あれはこの国を守って下さるものを祠っております。我々君主は、即位する時に、必ずそれにお祈りをし、それが発する輝きを見るのです。」

そうすることで、それから力を、この世界を平和に保つ力を得ることが出来る。と、そう信じられています。」

「『それ』はどういうものなの？ 守り神のようなものですか？」

「確かに似た部分がありますが、しかし、この国では全ての神ですら、あの『赤羽』の力の下存在していると言われております。今も言いましたが、それは『羽』、それも尽きること無く燃え続け、赤々とした光を発する『羽』なのです。我々はそれを『赤羽』、あげはと呼んでおり、この国の由来ともなっております。」

「本当に？ 本当にこの国に永久に輝く羽があるのですか？」

青妹は驚きを隠せない様子だった。

「はい、ございますが、元々『羽』のことをご存じだったのですか？」

青妹后はどこかためらいがちに

「はい…、実はわたくしの国にも祠があります。しかしそこには何も祠られていません。わたくしはそれを『空の祠』と呼んでおります。

なぜそんな祠があるかと言いますと、『将来手に入るであろう、輝く羽』を祠る為、とされているのです。

そして、それが実現したとき、二つの国は一つになり、永久の繁栄を可能にする…。このことです。」

「それは本当ですか？」

青妹后を信用しないわけではなかったが、にわかには信じがたいことだった…。

「信じられないことも知れませんが…。もしよかったら我が国にいらしてくれれば、その祠を案内致しますわ。」

「それは非常に興味深い話だ…。まことならばあの『羽』の扱いを考える必要があるな…。そうだ、ご存じならば話は早い。青妹様、あなたにあの『羽』をお見せしよう。」

そういうと慶徳は、部下を呼んで祠まで行く準備をするように伝えた。

赤羽宮から祠までは、車を使って一刻程度であっただろうか。祠の周りは、不思議な気が包んでおり、清々しいが、妙に高揚した気分になるという。

ここもやはり春の花々が咲き乱れており、庭園とはまた違う、野趣あふれる美しさがあった。

慶徳と青妹は車を降りると、祠の門の方へ進んだ。

門の所には、祠の番人がいた。

「ご苦労様。少し中を見せてもらってもいいかな。」

「もちろんでございます。そちらは…いま話題になっておられる青妹様にございますか。」

微笑んで軽くおじぎする青妹を、番人は美しいと思ったが、それを行うことが失礼にならないかわからなかったので、礼を返すだけだった。

「さ、どうぞ中へ。中の祠司が色々やってくれることでしょう。」

「あの方向か、素っ気ない感じでしたわね。」

「はは、緊張しているのですよ。それに、先ほども申しましたが、この国では、女性が君主になることはないのです、ついその接し方に困ってしまうのですよ。」

特にあなたのような美しい方では、ね。」

少し照れながら慶徳がこういうと、青妹も顔を赤くしてしまった。

やがて、即位式典のとき階段のところまでやってくると、祠司が二人を迎えた。

「話は聞いておりました。『赤羽』をご覧になるそうですね。」

「ご迷惑では無かったかしら？」

「いえいえ、これから交わりを深めて行く国の君主とあらば、我が国を守る存在である『赤羽』、一度はご覧いただくべきなのだと思います。さあ、こちらで御座います。」

二人は例の壇上に上がり正座した。祠司はおくから黒い布に包まれた卵型のものを持って来て、二人の目の前で包みを取った。

「わあ…」青妹はその赤々と燃える『羽』の輝きに、しばらくの間見入った。

「この『羽』は、遥か昔からこの国ありまして、その炎はいまだ尽

きたことがございません。」

「ところで祠司よ。青妹后によると、青羽国の祠には、『羽』にまつわる興味深い言い伝えがあるのだそうだ。」

「それはまことですか？」祠司は驚いた。そもそも交流のなかった青羽国に『羽』のことが伝わっていたことに。

青妹は先ほど慶徳に話した『空の祠』にまつわる話をした。

「ふーむ。」

「それが本当ならば、この『羽』の扱いを考える必要があるのではないかと思うのだが。」

「確かに…しかし、この『羽』は永年この国を守ってきた存在。そう簡単に外へ出すわけにも。」

赤羽国には『羽』を外に出したから、不幸やら厄災やらがふりかかるとか、その類の話があるわけではなかった。

しかし、それは『羽』が赤羽国のこの祠にあるのが当たり前で、これが別の所へ行くことなどあり得ないことであつたからだ。

「とりあえずは…やはり私とこのことに通ずる祠司も含め、一度青羽国に赴き、その『空の祠』について調べる必要があると思うのだが。」

「そうですね。確かに私、祠司と致しましても大変興味深いことに御座います。」

「では、後日、そちらにお伺いすることになるだろう。」

「はい、お待ち致しておりますわ。」

祠を出る頃にはもう日も傾きかけていたので、青妹はそのまま青羽国へ戻ることにした。

「では、翌日からこの橋は民に開放するということによろしいですね。」

「はい、人々もあちらとの交流を深める機会を心待ちにしていることでしょう。」

「そうですね。今後ともよい関係を築いてゆきましょう。では、今度はあなたが青羽国へいらっしやるのを、心待ちにしておりますわ。」

そう言って礼をすると、青妹とその部下は橋を歩き始めた。

慶徳は、青妹の姿が見えなくなるまで、ずっとそこで見送っていた。

その後宮廷で慶徳は、莊孫に青羽国のことや、『羽』のことを話した。やはり、莊孫は、『羽』のことに強い関心を示した。

「それは、まことですか？」

「もちろん、最大限悪意を持って考えるなら、青羽国の、『羽』を奪うための策略ということもあり得ないことは無いのかもしれないが……しかし、だとしても青羽国の人々がなぜ、谷の向こうにある『羽』のこと知り得るのだらう。いままでこの二国は何の交流も無かったと言うのに。それに……。」

と、言った所で、慶徳は言葉を止めた。

「……それで？なんですか？」

「い、いや、あの青妹后が嘘をついていたり、なにか悪い策略を考えているようには、どうしても思えないのだよ……。」慶徳は決まり悪そうに語尾を弱めながら言った。

「慶徳様……なにかあの方に……特別な感情をお持ちで？」と言うと、

「そ、そんなことはない！ただ、あの方も私同様に二つの国の平和を第一に考えているように思えたのだよ……今日一日話をしてな……いずれにしても、やはり私はあちらに赴き、その『空の祠』の

ことを知る必要があると思うのだ。

その時は祠司を連れて行くつもりだ。祠司はあの祠を守る役目を負う存在、外出はあまりせぬ方がいいとは言うが、何しろ今回のことは特別だ。

やはり彼がいた方が、話が円滑に進むであろうからな。」

慶徳はその日から、青羽国へ行く日を心待ちにしていた。もちろん、『赤羽』に関することにも興味があつたが、それよりも……

続く

0 周期、奈落（後書き）

ありがとうございました。時間が出来次第、次を更新致します。奈落編はもうしばらく続きそうです。

0 周期、奈落、青羽国（前書き）

引き続き奈落編です。相変わらず短めですが勘弁してくださいね。

0 周期、奈落、青羽国

十二：0 周期、奈落、青羽国

青妹が女后として初めて赤羽国へ行った記念すべき日から四十と五日程度が過ぎただろうか。

橋を利用する民もかなり増えているようで、交易も整って来ているようだった。大きなトラブルも無く、二つの国は橋完成以前の不安が嘘みたいに感じられるほど平和であった。

それはやはり、二つの国の長の人柄のお陰もあつたのかもしれない。

さて、青羽国は十日ほど前から雨降りが多くなっていた。雨の季節の到来のようだった。青妹がかつて慶徳に言つたとおり、青羽宮の庭園では紫陽花が可憐に咲いていた。

青妹はその日、いつもより早く、使いの者に起こされること無く目を覚まし、部下に客人を迎える準備を始めさせた。

自分もまた、部下と共に、庭の紫陽花のように雅ながら可憐なかさね（着物）を選び、お召し換えや、化粧など、着々と準備を進めた。

「ああ、やっとこの日が来たんですね。慶徳様にお会い出来る日が来たんですね。待ち遠しく思いますわ。」

かさねの紐を調節しながら彼女が側近の鈴音に言つと、

「まだ四十五日しか経っておりませんよ。そのような大袈裟な…。」
と、側近は笑った。

「この四十五日は人生で一番長く感じられた四十五日だった気がする

ます。ああ、早くお会い申しとう御座います。」

「また、そのような、あちらもあなた様も一国の長なのですから……ほどほどに、ですよ。」そう言ながらも、鈴音には、青妹らしい素直な振る舞いが微笑ましく感じられた。

平和が最も似合う方：彼女はよくそういった評判を受けると言う。これといってすばらしい政治家らしきことはしていないのだけれど、彼女の下では、国は自然と平和になってしまうのだ。

彼女もまた、聖后として後の世に語り継がれる存在なのであった。

数々の支度を終えると、予定の時刻が近付いて来たので、部下たちと共に橋の前で慶徳を待った。雨よけの沢山の傘を用意して。

「あ、お見えになりましたわ。」

側近の一人が向こうから渡って来る一団に気付いた。

慶徳はあの日の青妹同様に、車に乗ること無く、橋を歩いて渡ってやって来た。

「お待ち致しておりました。かつてわたくしが話したとおり、この雨の季節にお会い出来てうれしいですわ。……と言っても、ここではぬれてしまいますね。ひとまず車に乗り込みましょう。行き先はまず、『空の祠』でよろしいですね？」

確認を取ると、部下たちが出発の準備し、一同は『空の祠』へ向かった。

「こちらの国では、雨の季節は多くの花々が咲く美しい季節とされ

ていますの。雨の季節と言っただけあって、ほとんどの日はこういった雨降りなのです。雨はお嫌いでしたかしら。」

慶徳は首を振り、

「いいえ、民の生活に支障をきたすような大雨は考えものですが、このような静かな雨の景色は悪くないと思います。それに、私の国はもう初夏の季節。こちらにくるととても涼しく、過ごしやすくなります。」

これも二人が会談してわかったことなのだが、谷を隔てた二国では、季節の変化も異なるのだ。

青羽国には春夏秋冬に加え、今の雨の季節が春と夏の間に訪れる。赤羽国には秋と冬の間、紅の季節が訪れるという。

二人はしとと振る雨の中を進み、街の西側にある『空の祠』へ向かって行った。

それから半刻ほどで、一行は『空の祠』に到着した。部下たちは傘など二人が濡れないように準備をし、それが整うと、二人は外へ出た。

その祠は赤羽国のそれと同じくらい特異な、しかし立派な建物だったが、どこかがらんとして、空虚な感じがした。

「ここには祠司や守者はいないのですか。」中には誰もいない様子だったので、慶徳が尋ねた。

「はい、『守るもの』が現れるまでは、そのような者を置かないきまりになっているのです。城の部下の者が、この祠の管理を行っておりますわ。」

中には台座のようなものがあるが、その上には何もなかった。確かに、祠るものが不在になっている。と言う感じだった。

その台座のある広間の左側には勝手口のような扉があり、その奥はたくさん書物が置かれていた。

「普通、貴重な書は宮廷内の書庫室に保存されるのですが、伝記の内、特に古いものはここに保管されることになっているのです。ここにあるものは全て、新しいものでも数百年前に書かれたものだと言われています。」

その書庫室の奥にはさらに部屋があつた。そこは先ほどの部屋よりも広めであつたが、ただ一つの書だけが中央の台座の上に存在していた。

「これはこの祠や青羽国の存在理由が書かれた、この国で最も重要な書の一つで、書かれたのはこの祠が建てられたのと同じ頃。また、国が出来たのと同じ頃と言われておりますわ。」

前に慶徳様にお話したことは、この一番最初の章に書かれております。」「少し、拝見させていただいてもよろしいですか。」「祠司が後ろから声を掛けると、青妹はどうぞと言って横によけた。

「ふーむ……まず、中を見ずとも不思議なことがある。この表紙の字体は赤羽国の最も古代の頃に正式な場で用いられているものと酷似……いや恐らくは同じだ……書式も赤羽国古代のそれに非常に似ている……。」

更に彼は鈴音から渡された手袋をはめ、その表紙を捲った。

「……これは驚いた。まさかとは思つたが、文章も我が国の古文字で書かれているではないか。」

言語に於いてこの二国には面白い特徴があり、発話の上では類似していて、お互いの話はある程度通じるのに、文字はかなり違うのだ。しかし、これがここにあると言うことは、文字についても源流は同じと言うことか。その後の時代の経過で変化したために違いが生まれた……と。確かに、発話言語より文字言語の方が古代より大きく

変遷していると言われているから、その点でもうなづける。しかし、なぜそのようなことが…？二国は今迄交わりがなかったと言うのに…言語の源流が同じと言うことがなぜ起こるんだ。」

祠司はそのような疑問を抱きつつ、中身を読み始めた。
以下はその内容を要約したものである。

まだ、世界が混沌でしかなかった頃のこと。

どこからともなくそれは現れた。

それは『終えることなく輝き続ける羽』。この世を秩序づけるモノやがて、その『羽』の力によって、人間界に二つの国が生まれた。二つは共に世界を秩序づける『羽』を欲しがった。けれどもそれは一つだけ。

そのままでは争いになると感じた二人の聖人に近い存在は、この世界を超越する存在に判断を委ねた。

彼は思いを聞いて、解決策を告げた。

「二つの国の間に奈落を創りましょう。そして完全に世界を分断するのです。そうすれば、戦は避けられます。

しばらくの間、『羽』と『羽』に関する記憶』をそれぞれの国が分けて保管するのです。そうすれば、あなたがた皆が欲しがるものとしての『羽』は分断されましょう。

あなたがたは『羽』が世界を秩序づけた偉大なものだからこそ、それを欲しているのですから。

そして、二つの国が、そして、二つの国の民が充分成長して、奪い合いを起こさない平和な気運を持った時に、そして、この奈落を渡る術を見つけた時に、二つの国は再び出会うこととなります。その時もまた、二人の聖者が現れ、双国を治めているはずです。」
こうして、人間の争いを避けるべく奈落は生まれ、赤羽国が『羽』そのものを、青羽国が『羽』に関する記憶』を保管することとなる。

両国はそれぞれを保管するために祠を建てることになる。

そして、遠い未来、二つの国が再会したときには、それぞれの持ち物を共有しあうことになる。それが実現したとき、両国に平和と繁栄が訪れる…。

そして『羽』は、自らの役目を終え、真の意味で万人に共有されることとなる…。

「なるほど。『赤羽』にそのような意味があつたなんて…。」
「信じて下さいますでしょうか。」青妹は心配そうに言った。

「もちろん、本当に確かめる術はもう無いが、あの谷…この伝説で言う『奈落』によって二国は完全に隔てられていたにもかかわらず、こちらに『羽』のことが書かれていることや、双国の古代文字が共通していることから察して、この内容は十分に信憑性があると言えるでしょう。」

しかし…と祠司は少し考え、

「しかし、この先どうすればよいのでしょうか。『赤羽』と『その意味』を共有すると言っても、現実二つの国があるのにそれらは一つずつ。如何にすれば…。」

そこに慶徳は提案した。

「こういうのはどうだろう。片方が『羽』、片方が『羽の意味』…まあこの書で代えるとして、それぞれをそれぞれの祠で保管し、四季を基準に、季節が変わる毎に交換しあうと言うのは。そうすれば、ここでいう共有を出来るのではないだろうか。」

『羽』が役目を終える、と言う所はよくわからないが…。」

ここで『四季』とあえて言ったのは、両国それぞれにしかない季節二つを除いて考えると言う意味である。

祠司もまた、これに納得した。

「そうですね。それがよろしいのかと。『赤羽』は最早、我々の赤羽国だけでなく、青羽国をも守る存在になったのです。我々はここに訪れたことにより、その『羽の本当の意味』を知ることが出来たのですね。」

両国は、赤羽の夏の季節の終わりにその最初の交換を行うことで合意した。

そしてこれ以降、二国に共通した暦として『周期』を用いることにした。一回の交換毎に『周期』は変わり、次の交換の日から『一周期』になり、それまでを『0周期』と定めた。

一行は祠を後にすると、青妹は宮廷の庭園に来るよう、慶徳をお誘いした。彼は当然その誘いを受け、一行は青羽宮へ向かった。

続く

0 周期、奈落、青羽国（後書き）

さて、次回は庭園での二人の会談と言つ名のデートからです。

0 周期、奈落、青羽国 2（前書き）

やっと折り返し地点って感じですよ。

0 周期、奈落、青羽国 2

十三：0 周期、奈落

青羽宮の庭園は雨でも濡れることなく景色が見渡せるよう工夫されていて、今日は寒くもなかったので、丁度よい日和であった。

彼女が言ったとおり、水辺にたくさんの紫陽花が可憐に咲き乱れていた。その他も、青堇などの青い花が多く咲いていて、雨に映えて美しかった。

青羽国と言う名にもあつてか、この国では『青』が美しいとされ、庭園もそれに従い作られているのだと言う。

「…確かにすばらしい庭園だ。ここには私の庭園とはまた違った美しさがありますね。どこかもの悲しい、可憐な感じといいでしょう。そして、雨もこの庭園の美しさに一役かっているようです。これほどに雨が映える、そして、雨に映える庭園は初めて見ました。」

「…お喜びいただけ、なによりです。あれからお変わりはありませんでしたか。」

「ええ、相変わらず国は平和でこちらの民もしきりにいらっしやるようです。」

「い、いえ、国のことではなく…あ、もちろん国のことも大事なのですが、その……。慶徳様、あなたは、お元気でしたか…。」

青妹は顔を伏せて言った。

「あつ、私ですか。私は、そうですね、とくに変わったこともなく平和な日々を過ごしていました。でも…。」

「…でも？」

「いつもより、長く感じられる四十五日でした。」

その遠回しな言葉でも、青妹には充分伝わった。

なぜなら、彼女にとってもまた同じ感覚を抱きつつ過ごした四十五日だったからだ。

「わたくしも…。そう、長い長い、四十五日を生きておりました。」

しばらく、そうしばらくの間沈黙が流れた。

それは冷たい沈黙ではなく、お互いがお互いに言うべきことを言うべきかどうか、悩んでいる上での沈黙であった。

切り出したのは、素直な青妹であった。「慶徳様、わたくしはとうすればよいのでしょうか。このようなことは、許されないのかもしれないけれど…。だけど…。」

先ほどの言葉でお互いの想いに自信はあった。

けれど、二人は共に国を治める身。そのような二人の恋など許されるのか、青妹はわかりかねていた。

「…けれど、ならば誰か、この想いを止める術を教えてくださいませんか。体から止めど無く溢れるあなたへの想い。わたくしはどうすれば…。」

青妹はいまにも泣き出しそうな顔で、慶徳に訴えかけてきた。

それは、ずっと後継ぎとして育てられて来た彼女が、初めて抱いた気持ちだった。

「…そのような心配は必要ございません。」しばらく考えて、慶徳が切り出した。

「あなたはその気持ちに素直なままでよろしいかと思えます。

あの書にもありましたとおり、私たちは、古よりこの二つの国が交わる瞬間に、出会うことを約束されていた身だったのです。そう、私たちがここでこうして慕い合うことは、言わば運命だったのです。よう。私が聖人と呼ぶにふさわしいものを持っているかどうかは解り

兼ねますが…。」

「…運命？」

「はい、ですから、自分の身分を案じてこの心を押し殺す必要はございません。どうぞ、お互いの気持ちに素直になりましょう。」「いつの間にか彼は青妹の手を握りながら、そう言った。

「では、わたくしたちはこれで良いのですね？」

慶徳が微笑みながらうなづくと、青妹は大輪の花のような笑顔を浮かべた。

「これからも、周期の変化が訪れる度に、こうして二人きりになりましょう。待たねばならない日々は辛いですが、その分再会した時の想いは何にも代えがたいものになるはずです。」「

「…はい。」「青妹は静かにうなづいた。

その後、二人は前と同じような和やかな雰囲気でお話をした。今回は国のことより、お互いのことばかりだったけど…。

時間はあっと言う間に過ぎ、二人にしばしのお別れの時がやって来た。

青妹とその部下は橋のところで慶徳を見送る。

「また、夏の終わりに…。」

「今度はあなたがこちらにいらしてください。あの『羽の書』と共に…。お待ち致しております。」「

二人はなにごともなく挨拶を交わし、慶徳は赤羽国へ戻っていった。『なにごともなく、』…まあ側近にはもう気付かれていたけれど…。

「うまくいきましたか。」「莊孫は帰り際、慶徳に質問をした。

「ああ、きつとこれが『羽』のあるべき形なのだろう。青羽国とは、良い関係を築けそうだ。」

「またまた。そうではなく、どうですか。青妹様とは上手く行きそうですか。」

慶徳は赤らめた顔を隠すことができなかった。

「…あの書に書かれた『聖人』とは、恐らく、いえ、間違いなくあなたがたお二人をさすことと思います。さすれば、御身分を案じて…などと言う訳にもいきませんね。それほどに前からの縁だったのですから…。それに、お二方はとてもよくお似合いですよ。」

からかうんじゃない、と言おうとした慶徳だったが

「…まるでこの太平な世を象徴するかのような微笑ましきでございます。」 莊孫はこう、付け加えた。

しとしとと降る雨は橋の途中で止み、赤羽国では初夏の夕焼けが広がっていた。

「また、夏の終わりに。」 慶徳はそう繰り返した。

続く

0 周期、奈落、青羽国 2（後書き）

ありがとうございました。次回はちょっと時間が経ち、半年後にとびます。いよいよ後半戦です

1 周期、4 周期、奈落（前書き）

奈落編。この回は大事な回だと思っております。

1周期、4周期、奈落

十四：1、4周期、奈落

二人で共に『空の祠』を訪れてから数カ月が経過した。
いまは1周期の最中、赤羽国は紅の季節であった。

この季節の特徴は、全くと言ってよい程雨が降らないことと、何と
言っても、木々が赤く色付いた様子を二か月あまり保ち続けること
である。

『羽』の赤が乗り移ったと信じられている紅葉が見せる情景は、こ
の国で春の桜に並ぶ美しさだと言われる。

そんな色付いた木々の紅の庭園で、慶徳は例の『書』をもらう際に
一緒にお借りした、青羽国の歴史書や説話を読んでいた。

「今日は随分と勉強なさっておりますな。」 莊孫がお茶を出した時
に声を掛けた。

「ああ、やはり青羽国のことを知ることは必要なことだと思ってな。
説話に関して興味深いのは、やはり『羽』についての記述は多いが、
永年の隔絶があつたためか、『羽』を持つ国、つまりこちらの国の
事は、時代が下るにつれて、神が住む天の国だと思われたり、あく
まで伝説の国だと思われたりしたようだ。

『羽』についても、その実在はあまり信じられていなかったらしい。

「
そつえば伝説の内容の割に、初めて『羽』をことを話した時、青

妹様は随分と驚いていたな、と彼は思った。

「…しかし、一方で谷の対岸を知ろうとする研究はかなり昔から進められていたようで、

あの橋はその結晶とも言えるものだそうだ。人々の記憶から『羽』や遠い昔約束を交わしたこの国のことは遊離してしまったものの、どこか根源的な所で『羽』を追いつめていたのかも知れんな。」

「世界に秩序を与えた『羽』…永年の内に、人々は大切なことを忘れてしまったのですね。」

「まあ、無理も無いだろうな。その時から今までには、壮大な数の世代交替がなされ、数えられない人数の人々の生死を経ているのだから。」

だからこそこうして、二つの国が再び交わることに意味があったのだろう。…しかし…。」そこで慶徳は言葉を止めた。

「しかし…何です？」

「…いや、遠い昔この『羽』が争いを呼ぶのを避ける為に国を分けたと書いてあった。それなのに、ここに来て二つの国を交わらせることで、また『羽』がその争いの火種にはならないものなのか、と少し不安だな。」

「しかし、それは、民も国も充分に成長したからであると、あの書にも書かれているではありませんか。」

「そう、なのだが…」

慶徳の心の中にはこの平和がいつか危うくなるのではないかという一縷の不安があった。

人は時に大事なものを忘れてしまう。時には、自分がなぜ今の自分としてそこに存在出来るかという理由さえ。だからこそ、人の心はうつろいやすい。大事なものを見失ってしまうから。

「私と青妹様は本当に聖人となるのだろうか。そうだとしたら、私たちは聖人として、何をすべきなのだろうか。」

はつきりした確信ではなかったが、彼は知っていた。

世の中がただ平和であり続けるならば、聖人など必要ないことを。聖人が必要になるのは世の中の平和が崩れそうになる時である。聖人はその時に、世の中を平和へと導く存在となる。…そのことを彼は知っていた。だからこそ不安であった。自分たちが聖人であると思わせる記述が、古代の書の中にあることが。

一方で、彼の中、その根源には、記憶とは呼べない何者かがあった。その潜在的な何かが、彼に自身を聖人であると自覚させようとした。傲慢と言う言葉が最もふさわしくない彼が、そのことを外に漏らすことはなかったが。…しかし、いまは不吉なことを考えるのはよそう、現実の世界は平和なのだから…と考え直し、彼は読書が続けた。

それから何日かして、落葉とともに、冬の訪れを知らせる雪の華が世界を白く染めた。冬の季節が訪れた。

交換の儀を終えると、二人は青羽宮へ行った。庭園はもう雪景色。二人は宮廷のなかから庭を眺めていた。

「寒くはございませんか。冬の季節の入口は、急に冷えて辛く感じられますね。」

火にあたりながら青妹が言った。

「…ですが、今日はこうして二人でいるせいか、妙に心は暖かく感

じます。」二人は寒さのせいと言うことにして前会った時よりも近くに寄り添っていた。

「このままこの幸せ日々が続くことを願って止みません。いいえ、続けるに違いありませんわ。」

「そうですよ。この平和な日々を、私たちは二人で一緒に過ごして行くのです。」

二人は一周期に一日のその日を大切に過ごした。お互いの、お互いへの愛を感じ合いながら。

けれど、その日以外は、あくまでお互いの国を治める存在として過ごすことを約束した。

また次の季節に二人が会えるよう、世界の平和を保つために…。

だけど、青妹もまたこの時、慶徳と同じ感覚を既に抱いていた。この平和が永続はしないのではないかと言う、根拠はないぼんやりとした不安。そして、自らの根源あたりで感じる、自分が聖人であるという感覚。

だからこそ、二人はこうして共に会えるように、確認し合っていた。そんな不安を抱いていたから……。

さて、それから数日後、ある男が『空の祠』にやってきた。彼は『羽』と『記憶』の共有を伝えられてから、時々ここに足を運んでいた。

彼に限らず、この所、その『羽』の輝きを一目見ようと、『空の祠』を訪れる者は、かつてより幾分増えていた。

そして、一度それを見た者はたいてい、それ以後定期的にお参りするようになっていった。

「こんにちは。今日も冷えますな。そういえば、『羽』は今赤羽国に渡りまして、ここにあるのは『書』の方ですよ。」

男はそれにこう応えた。

「ええ、それはわかっておりますが、つついここに足を運ぶのが習慣のようになっております。それで。」

彼は街で私設塾をやっている人間。その勉強熱心な性格と、旺盛な好奇心は有名であったという。

その日彼は、『書』を読ませて欲しいのだと頼みに来た。『赤羽』を実際に見てからと言うもの、その『意味』についての『記憶』をもっと深く知りたくなったのだと言う。

青妹は初めての交換の時にその『羽』が空の祠に置かれたことは民に伝え、そのいきさつにも触れたものの、それを隅々まで語れば一昼夜かかってしまうため、あまり深くには関さなかった。

「…実は、この『羽』の『意味』をもっと民に広めたいと考えております。」

この『羽』は、私たちの世界を秩序づけたもの…そして、二つの国を分かったものながら、それは記憶には残っていないけれど、記憶よりも深い人の心のどこかで、二つの国を再会に導いてくれたもの…。

私はそんな存在にもっと敬ったほうが良いとおもつのです。しかし、民はまだその『意味』を深く理解していない。

大切なのは、赤羽国と青羽国がそうするように、人々の心に『羽』そのものとその『意味』を共存させることだと思うのです。

そうすることで、自分という存在を知り、この国の意味を知ることが出来る…そして、それを知らしめる『羽』に私たちは敬意を払い、こうしてお参りをする…。そういうことが、あるべきなのではないかと、思っんです。」

この男の考えに深く感心を抱いた祠司であつた。

「確かに。『羽』と『意味』を共有するからこそ、この国を知り、自分を知り、またそれらを大切に思うのかも知れません。

我々祠に関する者や、王族は既にそれらを合わせていますが、民にはまだ充分に共有されていませんでしたね。しかし、国のこと、民のことを考えれば、むしろ民に積極的に共有を促すべきなのかも知れません。

わかりました。あなたに書をお読みになって、それを塾を通じて人々に広めていただきたい。」

一般の民は、それが傷むことを案じて、『書』に触れることは出来ないとしていたが、彼は平民の中では博学で有名であり、塾という機関がその『意味』を広めるのに適していたため、特別に書を扱うことを赦された。

これは、青羽国にとって一つの契機となつた。

時を経るにつれ、その『羽』を『意味』と共に知るものは増え、比例して祠を訪れるものは増えていった。最早、『空の祠』は全くもって『空』ではなくなつていったのだつた。

「ほう、一人の男が中心となつて、民に『羽』の『意味』をひろめているのですか。」

4周期目に入るその日、青妹は慶徳にそのことを話した。

「はい、わたくしの国の成り立ちの歴史と共に。そうすることで、

我が身の存在理由も、我が国の存在意義もわかるのではないかと。

「確かに。今のままでは民には『羽』が何たるかはきちんと伝わっていないかも知れません。」

そして、人々の心に根付かなければ、私たちの『羽』の共有はあまり意味をなさないのかもしれない……。」

慶徳もやはり、青妹の、そしてあの男の考えに賛同した。

そしてその後、赤羽国でも、『羽』を本当の意味で広める活動が進められていった。

「莊孫。私たちは共有の意味を、ただ青羽国との共有、とだけとっ
てしまっていたが、それだけでは、あの『羽』と『意味』の交換に
あまり意味はないのだよ。大事なのは、赤羽国の民と、青羽国の民
がそれらを共有していくことなのだ。」

そして、その『羽』の『意味』が民に隅々まで浸透したとき、
我々は真の意味での共有を達成するのだよ。」

「なるほど。私たちは、少し解釈を違えていたのですね。」

「いいや。過程の問題だ、始めは国と国の共有：そして次は民と民
の共有：何ごともしきなり全てを達成させることなど不可能なのだ
よ。一つ一つ段を上げることで、私たちは成長していくのだ。」

雨の季節の入り口の雨は、橋の途中で止み、赤羽国の方では初夏の
夕焼けが空を染めていた。

『羽』の輝きが、人々の心を染めてゆくのを予期するかのよう……

続く

1 周期〜4 周期、奈落（後書き）

ありがとうございました。奈落編は予定では後2〜3回になると思われます。次回もよろしくお願いします

15周期、奈落（前書き）

さて、奈落編はあともう少しです。

15周期、奈落

十五：16周期、奈落

男が、民へ『羽』を広め始めて三年あまりが経過した。

『羽』の『意味』を知るものは日々増えていき、今では多くの人々が祠に訪れるようになった。

「『羽』は存在の拠り所のようなものになっています。なぜなら、『羽』の『意味』を知るとは、自らの『意味』を知ることと等しいからです。」

いつの間にか、それは一つの宗教と呼ぶべきものになっていった。

『意味』を持った『羽』への信仰：それによつて人々は、安泰な日々が過ぎることを確信出来るのであった。

それは赤羽国でも同じであった。かつてから『赤羽』は祠に存在したけれど、それは『意味』のはつきりしない、民からすれば、それは君主に力を与える存在に過ぎなかったが。その『意味』を捉えた今では、一人一人の日々につながる存在：『赤羽』は人々の心の中で以前よりずっとずっと大きくなっていった。

「すばらしいですね。『羽』がこんなに人々に浸透するなんて……『羽』への信仰が、人の心に平安をもたらすようですね。これが『羽』がもたらす真の平安なのですね。」

16周期に入るその日、慶徳と青妹は青羽宮にいた。二人は『羽』への信仰が人の心を平和にし、それによって世界も平和になるのだと、そう思っていた。

「本当に、喜ばしい限りですね。『羽』が有る限り、この世界はいつまでも平和なまま続きそうです。」

「本当に、いつまでも…。」

青妹は慶徳の目を見て言った。

「…いつまでも、わたくしはあなたのお隣りに…。」

慶徳はそつと顔を寄せ、青妹と唇を合わせた。

「…時々、煩わしくなります。私もあなたも一国の長であるということが…私が好きなのはあなたなのに、つい国のことを考えてしまうのが…。」

「わたくしも…二国が平和であるからこそ可能な恋…。それはわかっているのだけれど…。…けれど、一度でいいから、そんな堅苦しいことは忘れて、ただ…あなたを愛したい…。」

初めて、二人がその地位についてから初めて、二人が自分の身分を忘れた瞬間だった。

あくまで一人の人間として、一人きりの人間として相手を愛し、感じあった。

その日、二人は『二人だけ』の時間を味わえるだけ味わった。少しだけの間、国への願いなど、忘れてしまつて…。

しかし、今、回想して見れば、一部の人々の間にちょっとした変化が見え始めたのは、その頃からだったような気がした…。

二十日程後…

その日、鈴音が朝一番に青妹に切り出した話題は、少し気になる内容だった。

「犯罪が増加している？それはまことですか。」

「はい、いえ、それほど深刻ではありませんが、当周期に入りましてから、窃盗などの軽微な犯罪の数が、わずかながら増加しております。」

平和な国と言えど、悪人が全く無い訳ではない。けれど朝餉後の話題がそのように犯罪に関連することと言うのも、稀なことであった。「まあ、それほど重大なことではありませぬが、刑部の方々に、少し気を引き締めるよう、言っておいた方が良いかと。」

「…そうですね。あとで刑部長をおよびしてください。」

この時、青妹は妙に落ち着かない気分になったと言う。それは何年か前に抱いた一縷の不安と、よく似ていた。

そのころ、『羽』が置かれている赤羽国は相変わらず平和で、祠にはたくさんの人々が参拝に来ていた。

慶徳は、祠司に様子を聞きに、お昼下がりに祠を訪れた。

「今日はまた随分と多いな。」

「そうですね。ここの所、参ずる者は増える一方で御座います。」

「ふむ、良い事良い事。」

感心している慶徳に、言い辛そうに切り出した。

「そうなんです、最近少し気になることを申す者がおりまして…
その…次回の交換を止めて、もう少しここに『羽』を置いておかないか、とのことを…。」

慶徳は驚き、

「はて？なぜそのようなことを。あれは青羽国に置かれた『書』と共有し合うことによって意味をなすもの…。」

「しかし、『羽の意味』はもう充分民に浸透してしまいました。少なくとも民にとっては、『意味』は心に刻まれたもの…。書など今更必要ない。と言うことなのかも知れません…。それに…。」
祭司はその先を言うのを拒んだ。

そのわけは、一つは、まだ確信の持てることではなかったため。そしてもう一つは…

それが本当だとしたら、自分ももう『それ』にあてられそうになっている為。

しかし、彼は民とは違い、『羽』と共に、『その意味』を守る存在。そう、喻えいまの人々が『羽』と『意味』をもちあわせていても、形なき記憶はいつか、人々の心の奥底にしまわれて、気がつけば『羽』は、本当の『意味』をもつ『羽』ではなくなってしまうことを…少なくともいまは深く理解していた。だからその危惧を打ち明けた。

「実は、これは『羽』の『意味』を知った頃から時々感じたことなのです、

あの光、赤々としたあの輝きを目にすると、時々妙な気分になることが御座います。何か心の奥底を揺さぶるような感情がわきたちます。なにか『羽』に引きつけられるような、そんな不思議な感覚に…それは、それほど大きな、強い衝動ではありませんが、ですが

…日に日に強くなっていくような…気がします。」

「…民も同じ感覚を抱いているのでは、と言うのか？」

「…はい。なにか引きつけられるような、裏を返せば、『羽』を近くにおいておきたいような、つまり…。」

「…青羽国には渡したくないような？」

口ごもる祠司の代わりに、慶徳が続きを言った。

祠司は、静かにうなづいた。

慶徳は彼の告白に確かに驚いた。驚いたが、何かその驚きを初めから予期していたような、不思議な感覚を覚えた。

…あの『羽』は、人々の心に平安を与えるものでは、なかったのか

……

いや、あの『羽』が人々や我々の国にその存在起源を与え、人々に意味をあたえたことは間違いない。そして、それらが人々に心の平安をもたらすことも…

それらは確かにあの『羽』、そして、『羽』の『意味』を共有すること、我々が掴んだ掛け替えのないもの…。隣国とともに得た大切なモノ…。

だが、いまひよっとすると『羽』は人々の心の平安を乱している…。

一体…どういうことなんだ。

その後、赤羽国も青羽国と同様に、『羽』が不在の周期には犯罪が

増える、と言う現象が見られた。始めはその増え巾は僅かなものだったが、周期を経るごとに、少しずつ、だが確実に、その差は広がって行った。

慶徳は、この日の祠司の話を耳にしてからと言うもの、この現象を鑑みて『羽』の扱いを再び改める必要があると感じていた。

…しかし心の内なる自分がそれを止めていた。

未だ早い、と。

「そう、それは過程の問題なのだ、世界はいきなりは変わらない。階段を一つ一つ昇ることで、我々は成長していくのだ…。」
そんな言葉が、頭に浮かんだ。

うだる暑さが体にささる24周期の夏のある日、慶徳を不安にさせる話を、祠司から聞かされた。

「…実は、最近『羽』に関して少々過激な思想を持つ集団が成長しておりましてな。」

「…過激…と言うと。」

聞くと、その一団は、この周期に入って毎日必ず『羽』をお参りに来て、その光を目にすると言うのだ。彼らは、『羽』は赤羽国固有のものであると強く主張しており、青羽国に断固渡すべきではないと考えているのだった。

「青羽国に渡したくないと言う気持ちは非常に強いようで、交換を阻む運動を画策しておると言う噂もあります。」

次の交換の儀の日など、何か事件にならなければいいが……。」

しかし、この祠司の願いは裏切られ、二つの国の平和を揺るがす事件が起こったのは、25周期の夏の終わり。残暑が和らぎ早い日の入りが秋の訪れを告げたその日。

いつものとおり、赤羽国の橋のところで、慶徳らは青妹を見送っていた。鈴音の手には『羽』の入った瓶があった。

「それでは、次は冬の始まりの頃に、青羽宮で……。」

「はい、おまちしておりますわ。」

互いが互いを見つめていたその時だった。

「待て！」

何者かが叫ぶ声が聞こえたかと思うと、赤羽国の部下の列の間を分けて、男が現れた。

…手には刃物が握られている。

「その『羽』は元来我々赤羽国のもの！青羽国に持って行くべきではない！」

部下は彼を取り押さえにかかるが刃物を振り回すがゆえ、上手くはいかない。

「その『羽』は渡さない！」

止めようとする部下たちをかわし、男は『羽』を持つ鈴音に向かって突進して来た。

思わず鈴音は目を瞑った…その時、彼女が再び目を開けると莊孫が鈴音の目の前で刃物を掴んで男を食い止めていた。

手からは血が滴りおちていた。

「行ってください！ここは私たちが！」
そう言って青妹たちを橋へ急がせた。

男はその後部下たちが取り押さえ、莊孫は手に深い切り傷を負ったものの、大事には至らなかった。

しかし、国を治める二人は共に、大きなショックを受けていた。

「…何が、何が人々の心のなかで起こっているのだ…。まさかあんな凶行を起こすものが現れるなんて…」

彼の刃物の柄には『真赤会』の文字が刻まれていた。

それはどうも、祠司が言っていた、『過激な集団』のこのようなことだった。

その日、慶徳は、莊孫を丁重に見舞った後、早い時間から自室に籠り、そのまま床についてしまったという。

青羽宮の青妹もまた、強い衝撃を受けていた。

「…なぜ、このようなことに…？」

「実はお二人がお会いになっっている間、あちらの側近と話をしたのですが、どうも『羽』に関して過激な行動を画策している一団が現れたのだそうです。恐らくは、その内の人間かと。」

鈴音が青妹に告げた。

「やはり、やはりあちらもですか。」

……そう実は前の周期の間に、青羽国では『羽』を取りかえそう

とする運動が活発化していた。

その中には、赤羽国の襲撃をほのめかす者もいたという。

（どういうことなの？あれは人々に心の平安をもたらすものではなかったの…？）

いや、少なくとも『羽』とその『意味』が再会したことで、人々も国もかけがえのないものを見つけた。

そして、二人だって…。

（ならば…ならばどうして……………）

青妹もまたその日、早い内に床に就いてしまったと言う。

くしくもそれは、慶徳が眠りに就くのと、ほぼ同時刻であった…。

続く

15 周期、奈落（後書き）

ありがとうございました。奈落編は後一話か二話。暇な時間と長さを見計らいながら一気に行くか、分けるか決めます。次回もよろしくです。

夢・25周期、奈落（奈落編完結）（前書き）

奈落編ラストです。意外に長くなったと言うのが正直な感想ですね。

夢・25周期、奈落（奈落編完結）

十六：時間不定、夢、25周期、奈落

そこは何もない草原のような所だった。

慶徳はその草原の中をゆったりと歩いていた。

どこかで見た景色…。いつかどこかで感じた風…。

その先は見晴らしのいい丘のようになっていた。

下の方に街が見渡せた…。けれど、奈落は見当たらぬ。赤羽国の街は奈落のすぐ淵から奥の方へ広がっているはずなのに。街全体を見渡しているのに、奈落はそこにない。ここは…どこ…

丘の中腹になぜか二人がけの長椅子があつたので、彼はそこにこしかけてしばらくぼんやりとしていた。すると、

「慶徳様！」

後ろから青妹がやってきた。慶徳の名を呼びながら…。

二人は並んで長椅子に腰掛けた。

「ここは…どこなのでしょう。」

二人が知る世界とは明らかに違う景色。だけど、どこかで見た覚えのある景色。

遠い昔の…いつかに。

眠りは『記憶』を呼び起こす。

それは普段で言う表面的な記憶ではなく、心の奥底に眠る、潜在的な『記憶』。本人たちですら、普段は想起することない、心に埋もれてしまった『記憶』。

慶徳はようやく、気付いたようだった。

「これは…夢？先ほど私は床に就いたはず…」

「わたくしもですわ…。」

縁あるものは、夢の中ですら巡り逢うことがあるという。
深い『記憶』や『想い』を伝^{つた}にして…。

「それにしても…この景色はわたくしを不思議な気持ちにさせます
…見たことのないような…だけどどこか懐かしい…。」

それは、二人の心の中に眠る景色…

「そして、この感覚は…私が時々抱く感覚に似ている…。私を聖人
だと自認させたがる、心のどこかが鳴るときの感覚に似ている…。」

「わたくしたちは、これに似た…いや、同じ景色を見ていました。
遠い過去のどこかで…そして…。」

「その時も同じ悩みを抱いていた。」

世界に、人々に秩序を与えた存在が…人々に心の平安を与えるはず
の存在が、それが存在するということで、人々の心を波たたせると
言う『悩み』。

平和たらしめるものが平和を壊すことへの『悩み』…。

それは…。

「わかった。思い出しました。私たちはやはり、遠い昔に会っている…。そして、『何者かの処置』により、その別れを受け入れた…。世界に平和をもたらすために…。」

そう、私たち二人は…

かつて聖人に近付いた者…。

あの日、二つの離別を、二人の離別を受け入れた者…。

「だからわたくしたちは、この出会い、いいえ、再会に強い想いを感じたのですね…。」

長い間の隔絶でも途切れぬ、永く、深い縁…。

二人は『羽』を共有させ、人々に平安をもたらすために再び現れた。それは二つの国が別れたあの時に既に決まっていたこと…。

そして、二人は、それを想い出した瞬間に、これから現実ですべき最後の事に気付いていた。

それは遠い昔に、運命に命ぜられ、心のどこかにしまっておいたこと…。ただ今、夢を通じて浮かび上がった、『これからすべきこと』。それは、二人が再び巡り逢った『理由』であつた。

世界に、本当の『平和』をもたらすために…。

「それをする、わたくしたちは、どうなるのでしょうか…。」

「心配はいりません。私たちは、『そうするため』に生まれた存在……それが終われば、もう役目は終わりです。」

『二つの国』を結んだ私たちは、真に、永久に結ばれるのですよ。」

「さあ、もう時間がありません。『それ』をするのが手遅れになれば、人々は争いを始めてしまう……」

早すぎても、遅すぎてもいけないのです……。」

それは、今宵、再び朝日が国を照らす前に……。

青妹が目を覚ましたのは、まだ日を跨いだばかりの真夜中だった。
見た夢は朧げにしか覚えていない

（…慶徳様とお会いしていたような…？）

けれど、不思議とすべきことを知っていた彼女。
隣りの部屋で仮眠をとる鈴音を起こさないように、そつと部屋を抜け出した。

彼女が向かったのは、もちろん『空の祠』。目当ては布に隠された『羽』……。

祠司に無理を言って錠を解いてもらい、彼女は祠の中に入る。

「どうしたのですか。こんな真夜中に……。」

「申し訳ありません。先ほどの事件のせいか、どうも『羽』が気になってしまつて……。」

それはかつては空席だった台座に据えられていた。人々が置いた供

えと共に……。供えの数で訪れた人の数が見て取れた。

（先ほど戻ったばかりだと言うのにもうこんなに人が訪れたのですか…？

やはり、これは…この『羽』は人々の大切な心の支えになっている…。）

（…いいえ、でもその『信仰』の為に、これは存在していたのではないのです…もっと人々の深い所…深いからこそ大切な所に働きかける為に。

もう、その役目…物体としての役目は終わった…）

あとは…人々の心の中に……。

台座に昇ると彼女は祠司の隙を突いて覆いごと『羽』を持ち出した。

「青妹様！それを持って何処へ！」

「ごめんなさい！これはもうここには置けないのです。」

祠の出口に向かって走りながら祠司に告げた。

彼もまた光にはまだあてられてはいなかった…。

相手は女后…無理に追って、とり囲まえるわけにもいかず、祠司は彼女を逃がしてしまった。

そこから彼女は出来るだけ急いで橋へ向った。とはいえ、馬車でも半刻の距離…それほど自らの足で外出もしない彼女にとって楽ではなかった。

（早く…早く…人々が目を覚ます前に！）

そのころ、慶徳は書を持ち出して、橋の中あたりで青妹を待っていた。

（これはやはり、『羽』と一緒に在るべきだろう…。人々はもう、『意味』を文面で見られなくはなるが…。）
心深くに『意味』が刻まれた今、このような文章は最早必要あるまい。

『記憶』はいつまでも受け継がれるだろう。人々の深い所で。

「慶徳様！」

一刻ほどの遅れで青妹が現れた。

「間に合いましたか？」

「はい、まだ夜明けには、人々が起き出す時間までには、幾分の時間があります。」

よかった…。

「…でも、これでこの世界とはお別れなのですね…。」

心のどこかが『役目は終わり』だと告げる…。

「でも、二人は離れることはありません。これからずっと…。」

二人は互いを抱き締め、同時にうなづくと、一緒に空へ倒れこんだ。橋から、下の谷へ向かって…。

その谷に底は存在しない。そこは世界の割れ目、混沌が混沌のまま
で眠る所。

『羽』はもとの混沌に還り、二人の聖人も『役目』を終え、体を混
沌に帰した。

『羽』は人々の心の中の存在となった。本当の意味での共有が、実
現した。

今はなき『書』に書かれていたとおり…。

そして、役目を終えた聖人は、今度こそ永久に結ばれた。
それもまた、初めから定められた運命だった……。

その日、人々は皆それぞれの夢を見た。夢はそれぞれだったけれど
…『羽』の夢を見た者が多かったという。

『羽』は今も、人々の心の奥深くにある。人々に、そして世界に意
味を与えるものとして…。

翌朝、二人と『羽』が消えたことは、ちょっとした事件になったけ
れど、不思議と人々に受け入れられた。まるでそれが当然であるか
のように…。

その後人々の生活は落ち着き、再び平和が戻ったという。

そして、『羽』と共に消えた二人は…いつしか世の平和のためにそ
の体を捧げた聖人、聖后として歴史に語り継がれるようになった。
二人にとってそれは必ずしも犠牲ではなかったのだけど…。

その後、世界は平和を保ったまま現在に至る。これらのできごとを正確に記憶している人はいなくなってしまうたけれど、『大切なものはつねに、人の心のなかに』。

続く

夢・25周期、奈落（奈落編完結）（後書き）

ありがとうございました。奈落編は終わりましたがストーリーは続きます。次回もよろしくお願いします

歴概念なし、日の昇らぬ世界『ランゲナハト』（前書き）

さて、そろそろ出ていただきましょうか。
一話目に登場した彼に。

歴概念なし、日の昇らぬ世界『ラングナハト』

十七：歴概念なし、日の昇らぬ世界『ラングナハト』

ある女の夢…。

彼女は暗闇をあるいていた。決して晴れることのない暗闇を。
仲間はいたけれど、、心は不安で浸されていた。

心に光を照らせたら。
心を照らす光があつたら……。

女は幾度となくそう思っていた。その時…

西の空の方に見た…赤々とした光…女の心に強く響くような輝き
…。

空から舞い降りた光は、やがて地面へ落ちて行った。

あの光の着地点へいけば…光が手に入るだろうか？

あの光が手に入ったら。皆を闇から救えるだろうか？

女は歩み始めた…光が見えた方向へ…

男が気がつくと、そこはなにか大きなテントのような物の中。男は広めのベッドに体を預けていた。テントのようだが、ベッドの横に窓があった。今は夜のようだ。

ここは…？

一瞬記憶は曖昧だったが冷静に思い返した。

おれは確かに自宅で眠って…そして、気がつくと赤い光を追いかけて…。

その時、はっと彼女の言葉を思い出した。

「恐らく近い内、あなたは夢を通じて別の世界へ行くことになるでしょう。」

（そうか、ここはおれが今迄生きていたのとは別の世界…！）

（…それにしても、記憶によればおれは、確か平原で倒れたはず…誰が運んでくれたのだろうか…？）

その時だった。

見知らぬ女がテントのなかに入ってきた。

「お気付きになりましたか？」

「あなたが…おれをこのテントに運んでくれたのですか…？」

女はそつと頷くと、茶のようなものを差し出した。

「どうぞ…あ、普通のお茶ですが…お口に合うかどうか…」

男はそれを一口飲み、女に質問した。

「…あの…ここは？」

「ここは私たちの村。…と言っても、常に移動して生活している、流浪の村、とても言いましょうか…」

「それはまだなぜ？難民か何かですか？」

「なんみん…？ いえ、実はずっと『光』を探して、一族で旅をしているのです。」

『なんみん』は女には通じなかったようだ…。

「『光』？」

「はい、我々を照らし導く『光』…。そこに辿り着ければ…私たちは救われると、遠い遠い先祖が『夢見』たのです…。」 彼はその時夢の淵で見た『光』を思い出した。彼はそれを一生懸命に追いかけていた気がした。あれはこの世界の現実だったのか…？

「それにしても、気がついてよかったです。『呪』に当てられた者の反作用の大きさは人それぞれですから…最悪二度と目覚めない人すらありますし…。」

(しゅ…？)

「あら？ご存じありませんか？一部の人間だけが使える『呪』。その作用は色々だけれど、他人に使う場合は、その対象に抵抗力がないと、反作用に当てられて、あなたのように意識を失ったり、時には死に至ったりと、色々な悪弊が生じるのです。あなたはその『呪』をかけられたのですよ。」

…その見覚えのない格好から見て、あなたはこの辺りの人間ではないようです。だとすると、恐らく瞬間移動を促す『呪』をかけられたのです…。」

瞬間移動に心当たりはあったが、あれが『呪』かどうかは知りよ

うもない…。だが、とりあえず『呪』と言うことにして話を合わせることにした。

「よくわかりませんが、恐らくその『呪』とやらなのでしょう。確かにおれはこの辺りの人間ではなくて、眠っている間に、いつの間にかここに…というかあの平原に飛ばされて来たのです。」

少し女は考えて、

「…だとすると、あなたはこの辺りには居場所がない、と言うことになりますね。しかも、このあたりにそのような『呪』をややつるものいませんし、帰ろうにも、あなたの『故郷』の方位を知る術はない…。」

この世界にはまだ地図の類はないようだった。まあ、男の場合、『この世界の』地図があってもムダだけれど…。

「そうですね…。」

少し思案した後、女は提案した。

「…では、しばらくこの村と同行してはどうでしょう。」 急な提案ではあったが…他に選択肢はないように思えた。独りではこの全く勝手のわからない世界では、どうしようもない…。

「…わかりました、迷惑をかけてしまっていますが…その好意に甘えさせていただきます。」

「…そういえば、自己紹介がまだでしたね。私はティナ＝ラクシュエル…。ティナと呼んでください。村と同行するとなると、後で村の者も全員紹介します。あ、村の者と言っても、全員私の親戚ですからそれほどおきになさらず…。」

「おれの名前はヒロシ…聞き慣れないかもしれないけれど、おれのいた所では普通すぎるくらい普通の名前なんですよ。」

「…確かに変わったお名前…。」

ヒロシは、ピンとこない様子の女を見て、

「あ、でも、気になさらず呼びやすい呼び方で呼んでください。」
と、いうと、ティナは少し考えて。

「…では、ヒロ、でどうでしょうか。それならばラクシユウエル家の先祖におりますし、村の人達も呼びやすいかと…。」

「じゃあ、それでかまわないですよ。」

「それでは、もうすこしおやすみになってください。まだ体は万全ではないと思いますので。病ならば薬を差し上げるのですが、『呪』にあてられた者に効く薬は、残念ながらありませんので…。」

ヒロは言葉に甘えて、再び目を閉じた。

ヒロが再び目を覚ますと、外はまたも夜であった。

（どれくらい時間が経ったのだろう。一昼夜眠っていたのか、それともまだ一刻、二刻程度なのか。）

ヒロはベッドから抜け、外に出た。

外は草原のようなただっ広い所で、周囲に数棟のテントがある他は地平線がほぼ360°見渡せた。

空を見上げると、いつぱいに星空が広がっている。『故郷』では見ることのできない、綺麗な星空が…。

「目を覚ましましたか？おはようございます。」

「あつ、おはようございます。今は夜明けまえなのですか？」

ティナは首を傾げ…

「夜明け？夜明けとはなんですか？」

ヒロは、世界が違えば言い回しが違うのだろうかと思い。

「…その、空に日が昇って、明るくなることですが…ここでは言い方が違うのですか？」

「…その、日とは、空に昇る光るものなのですか？」

どうも話が通じない。

「ヒロさんのいた所では、それが昇るのですか…？」

ヒロは気付いたようだった。…そうか、世界が違うとそう言うこともあるのか。

「と、そのような質問を言うことは…。」

「…ここでは空は常に暗闇のままなのです。」
やはり。

「…だからこそ、私たちは探しているのです。…『光』を。」

ヒロは先程一度目を覚ました時に聞いた話を思い出した。

「…なるほど。そう言うことだったのですか。」

「私たちは探しているのです。私たちを照らしてくれる存在を。」

それを見つけることにより、私たちに深く根付いている、暗闇に由来する不安や沈んだ心を溶かしてくれると信じているのです。」

それは彼女の先祖が『夢見』たこと…。

「…それは、喩えようのない輝きを持つ光…赤々と永久に輝くもの。…と、代々伝えられております。」

ヒロには心あたりがあった。

…『羽』だ。

「…あなたたちのお役に、立てるかも知れません。」

「…え？」

「…僕が気を失う直前、あの辺りでそのような、強い光を感じました。」

続く

歴概念なし、日の昇らぬ世界『ランゲナハト』（後書き）

もちろん次回は『ランゲナハト』編の続きです。ありがとうございました。

歴概念なし、ランゲナハト2（前書き）

テストが忙しすぎなのです。

歴概念なし、ラングナハト2

十八：歴概念なし、ラングナハト2

「…それは本当ですか？」

「…はい。…と、ティナさんは見ていないのですか？おれが気を失った時、そこにいたんですね？」

「…いえ。」

（…それはおかしい話だ。あの光は永遠についえることが無い、と由里子は言っていた…。あの場所に着くのに多少の時間差があったとしても、ティナさんが光を見ないわけは無い…。それとも半分夢うつつだったのか…？）

そもそも、世界を渡る仕組みがわかっていない彼にとっては、あの『光』が本物かどうかなど、確かめようもなかった。

「…しかし、もしヒロさんが本当に光を見たのだとすれば、それは重要な手掛かりです。そのことを自己紹介ついでに、後で皆さんに話していただけますか。」

今一つ自分の見たものに自信が持てないヒロだったが、とりあえず了解した。

それからしばらく経って、一番大きなテントに村人が集まり、会議のようなものが開かれた。

「さて、今日集まったのは、この村にしばらく同行するものが現れたからです。」

一番年長と思われるじいさんが始めに話し出した。

「ちょっとこっちに来て、自己紹介などしてもらえるかな。」

そう言われると、ヒロシはテントの中央に出て、自己紹介を始めた。

「どうもはじめまして。ヒロシと言います。ヒロと呼んでください……。」

彼は自分が『呪』をかけられて移動させられたうえ意識を失ったらしいことや、気を失う直前に光を見たことなどを話した。

「……ふーむそれが本当だとしたら、我々の終着点は近いのかもしれない……。」

「ただ、先程ティナさんは見てませんと言っていましたし、もしかしたら半意識の中で見た夢だったのかも……。」と、ヒロは自信なさげに言う。

「本当ではないかもしれん。しかし、それは本当かもしれないと言うことだ。確かめる価値はあろうな。なに、代々に渡って旅をしてきたわしたちだ。今更徒労だった所でそれを徒労と思う感覚すら失っている。ティナ、ヒロを見つけた場所は覚えておるかね。」

「はい。だいたい。あれはここから西にある平原の端の方。森の木の実を取りに行く途中に見つけたのです。」

それほど遠いところではありません。」

「では、この会議が終わったらとつと出発してしまおうか。おつと、自己紹介がまだだった。わしは長老のアルベウスⅡラクシウエル。よろしくな。他の者も自己紹介してくれ。」

と、言うつと村人は年寄りそうなほうから若そうなほうへ順に自分の名前を言つて挨拶した。

ティナは若い方から五番目。小さな子供を除けば一番若いようだ。

「では、出発準備を。」

この世界は、おれと同じ人間に思われるような動物がいる他は、おれがいた世界と全く違う…。たくさんの家畜と荷物と数十人の列に混じつて道なき原野のようなところをひた進む。

植物は生えているけど、暗闇のせいかな、そもそもそういう色なのか、真つ黒に見えて、葉っぱらしきはなく、ただによきによきと膝の高さくらいまで伸びている。

空には雲が一つもない。ただ満面の星空だけが広がっている。よく見ると、お月さまくらいの円い、ただ緑色の星が三つ四つ浮かんでいた。

なによりも、一面の闇。あけることのない闇。無限の闇の中、ただ村人人の松明だけが、ぼつと、そこに列をつくっていた。それは確かに幾分まわりより明るかったけれど、かえって言い様のない寂しさ、闇に取り残されていることが一層感じられるがゆえの寂しさ、孤独…。

言い様のない不安…。これが永遠に続くと言ふ不安。ラクシウ

エルの人々が、『光』を求める気持ちが少しわかった気がした。

「あと、どのくらいなのでしょう。」

ヒロは隣りにいたティナに話しかけた。

「そうですね、今迄歩いた距離の倍くらいでしょうか。」

…と言われたものの、暗闇ばかりの旅路では、自分が幾何歩いたのかピンとこなかった。

時間にしたって、時計もなにもない…。空を見れば……。

…と、再び空を見上げて気付く。

（そういえば、もう随分たつのに、空は何にも変わらないな。あの月たちも全く動いていないようだ…。）

「あの、おれたち、歩き始めてからどれくらい経ちました？」

「さあ、どうでしょうね。」あまり興味が無い風にティナが応えた。

「何か時間とわかるものってないんですか？」

「時間？それはなんですか？」

…やっぱり。

この世界にはあの世界のようなはっきりした時間概念もないのだ。空の様子が全く変わらないのだから、それも無理のない話だが。

（誰が、より先に生まれたか、位の感覚しかないのか…。）

それから更に、彼の感覚的には数時間歩いたところだった。

「この景色…。」

光を追いかけることだけに意識がいつていたから、あまり覚えてはいないのだが、ヒロは何か自分がその時これに似た景色にいたような気がした。

（おれがあの時いた場所はもう近いのだろうか…。）

歴概念なし、ランゲナハト2（後書き）

ありがとうございました。色々頑張っております。

歴概念なし、ラングナハト3

十九：歴概念なし、ラングナハト3

「この辺だったと思う。」ティナが長老にそう言つと、長老の合図で列は止まった。

ヒロも、はつきりとは覚えていないが、この辺りに自分がいたような気がした。

：けれど、赤々としたあの『光』は、どこにも見えなかった。

「さて、まずは村を建てた後、おやすみして、目覚め次第行動を考えるということにしよう。」

その後、各々自分のテントを組み立て、出来上がった者から中へ入っていった。

ヒロはティナの家族と同じテントに寝ることとなった。テント設営も、出来る限り、手伝った。

「本当にこのあたりに『光』あるのだろうか…。」

テントの中の自分の割り当てのベッドの上で、気がつくヒロは呟いていた。

「本当なら、ここに来る頃にはもう光は見えるはずだったのに…。もしかしたら、やっぱりあれはただの夢だったのでしょうか…。」

それを聞いていたティナがその独り言とも話しかけてるともれな

い言葉に応えた。

「そうですね。しかし、どの道探すアテが他にあるわけではないのですから、しばらくはこのあたりにいましょうか。」

その言葉には様々な感情、或いは何とも取りがたい感情がまざっていた。希望でもないが絶望でもない。不安はあるけれど、それに慣れきっているせいで、不安はそこに常駐するものだ、と諦めている感じ。それでもやはり、『光』が心を点すことを望んでいる…。

（ここは、自分が居た世界と、何もかも違うのだ…。）改めて、ヒ口は感じたのだった。

村人と共に二度目の休みに入るヒ口だったが、自分の心が言い様のない不安によって浸されて行くのを感じていたのだった。

それは違うことへの戸惑い、特にいま自分がいる『時間』が分からないことへの戸惑い。そして、外の暗闇が永遠である、ということを知らされたが故の不安…。

帰れないことも解っていた。でも、帰れるものなら…。

「帰りたい。」

一方、その不安は、必ずしも村人が心深くに抱えているそれとは完全に重なるものではなかったけれど、何か村人と共有できているような、そう、自分も村人の一員になれるかのような…そんな気持ちにもなった。

そして…村人たちの求めるものを、おれも一緒に探せたら…。

（何とか村人のために光を見つけてあげることが出来ないであろうか…。あの見た景色は確かにこの辺りだった…あれは…。）

そう考えていたかと思うと、

いつの間にか彼は眠りの世界へ引きずり込まれて行った。

その時もまたおれはその平原にいた。

見覚えがあるな、この景色。

暗いながらぼんやり置くにそびえるあの二つの山とか。

そう考えていたときだった。

その山と山の間くらい。たぶん森になっている所、或いはその奥で、何かが赤々と光っているのが見えた。

そしてそれが目に入ったその時、ヒロは不思議な感覚を覚えた。自分のなかに、二つの心が共存しているようだった。

一人のヒロは、それが夢だと気付いていて、（何だ、またこの夢か。現実には何も光ってないじゃないか。）と、さめた気持ちになっっているのです。

けれど、彼の中のもう一人の心は、その光りに完全に引き込まれていました。

…そしてやっぱり、いつの間にかその光に向かって走り出しているのです。

（あの光に辿り着ければ、おれも、村の人々も、心の中の重い氷塊を溶かすことが出来るだろうか、そうすれば、もつと幸になれるだろうか。）

そう信じていた。そう信じて、そしてなによりも、彼の心があの『羽』に引きつけられるようにして、彼はそれへ向かって走って行った。

でも、やっぱり一向に近づく気配はない。まるでおれが動くのと一緒に景色もまるごと動いているかのよう。それともおれがその場で足踏みしてしまっているのか？

そしてその景色は少しずつ意識から遠ざかり、気がつけばまたベツドの上だった。

一体どのくらい寝ていたのだろう。
それを知る術はない。

しかし、ティナたちはもうおきているようだったので、ヒロもベツドから出て、外へ歩いて行った。

続く

歴概念なし、ランゲナハト4（前書き）

いやいや、ちょっと日にちを開けてしまいました。部活やらテスト
やらが忙しくてですよ。ごめんなさい

歴概念なし、ラングナハト4

二十：歴概念なし、ラングナハト4

ヒロは当然ながら、この夢のことをティナに話した。そして長老にも…。

少し考えた風な後、ティナはこう尋ねた。

「あなた、『夢見』の力があるのですか？」

それは唐突な質問でヒロには何のことかわからなかった。

「『夢見』というのは、自分や自分の関係者などの未来を直接的な、或いは何か暗示的な夢として見る力のことです。ほら、私たちの先祖が光のことを夢で見たのと同じ能力のことです。」

その時、ヒロは由里子のことを思い出した。そう言えば、由里子の能力もそう呼ばれていたっけ…あ、でもあれは未来じゃなく別の世界を見るものだったか。

「いえ、おれには特にそのような能力は…。」

「だとすると、どうしてあなたは私たちもあなたも知らない『光』を夢の中で見るのでしょうか。」

「よくわかりませんが…でも『光』はおれが前にいた場所で見たとありますよ。」

そう、ヒロは『羽』の光を知っている。

「えっ？あれは、あの光の源は他にもあるのですか？」

それは微妙に面倒なことだった。

ラクシュウエルの人達はヒロが別の世界の住人だとは知らない。

…というかヒロと同じような世界の概念を持っているのかもわからない。

「ま、まあそうなんです。しかし、今度見たのは明らかに夢でした。おれには夢でそのようなものを見る力はないし、かといって…。」
確かにヒロにはそんな特別な力などない。けれど、かといってあの夢がただ毎晩見ても忘れる気まぐれな普段の夢の一つだとは思えなかった。

それはぼんやりとしているのに、確実に記憶に刻まれていた。

何か、さも記憶しなきゃいけないかのように見ている夢のような…よくわからないがそのような感覚を覚えていた。

これらの事を思案したのち、ヒロは言った。

「…ですが、やはり、あの山と山の間の森の方に、何かがあるような気がしてならないのです…。根拠は全くないのですが…何かがおれにそのことを伝えているような気がするのです。」

何か

そう、まさにそんな感じだった。

自分の一部か他者なのかもよくわからないなにかが。

ヒロの言葉を隣りで聞いていた長老は、比較的すぐに答えを出した。

「よし。それならば一つそちらの方を調べて見ようじゃないか。何事もやってみないと進まないからね。」

森の中を村ごと進むのは大変なので、長老は、何人かで探索を進めることにした。

妙な感覚を持っていたヒロは自ら行くことを決め、その他、ティナと、村の青年と若い女が行くことになった。

「やっぱり、『何もない』人達だけと言うのは心細いから…」
ティナはそう呟いた。

「なにもない、とは？」

「ああ、彼らは先日あなたが受けた『呪』を使えるのです。」

「ええ？」

ヒロは『呪』を使えるものがそれほど身近にいることに驚いた。

いや、身近と言っていていいのかはわからないけど…。

「はい。『呪』の力は私たちの家の遺伝なんですけど、必ず備わっているわけではないですよ。だいたい、それを持つ人の発現割合はだいたい2割、結構貴重で、しかも私たちの村には必要不可欠なのです。」

「というと、なにか怪我を治せるとか？」

ヒロは魔法のようなものを思い浮かべてそう尋ねた。

「ああ、そうですね。傷病の治癒にも一役かっていますが、他にも方角は彼らでなければ知り得ません。」

え？と、ヒロは意外に感じたものの、まあ、世界が違うのだからそう言うこともあるのか、と思い、コンパスはないの？などとは訊かないでおいた。

「何でも、空の星のなにかを聞くことによってわかるのだそうです。『呪』の力もそうした夜空の星のなにかを借りて使うのだそうですが、何にしても一般人には理解のしようがないみたいです。」

あなたも恐らく、そう言う類にあてられたのだと思うんですが、あなたの住むところではそう言うのはないのですか？」

「…いえ、でもまあ世界にはわからないこともたくさんありますからね。おれが知らないからと言って、存在しないとは全く限らないでしょう。」

そう、世界は広い。ただ一つの世界だつてとてつもなく広い筈だ

ったのに、それがいくつもあるなんて……。改めてその壮大さをヒロはひしと感じていた。

さて、村の者達と手伝いながら、探索の準備をし、その後出発した。

基本的には村に帰って来て寝ることになっていたが、念のため多少の食料や簡易寝具を持っていくこととした。

また、ヒロの手には短とも長ともとりにくい中くらいの長さの剣がわたされた。

「あの森の深くにはまだ誰も入ったことがなく、なにがあるかわかりませんから……。」ということだそうだ。

一緒に行く男はリース、女はジュナと言った。

『呪』には人それぞれ相性があるらしく、リースは主に方位を知るとともに、獣などの襲撃に反攻することもできるという。また、ジュナは軽い傷病の治療が可能だという。

方角はともかく、その他についてはそれ程備えがいるのかと思っていたヒロだったが、その必要性はすぐ証明された。

それは、森にまだ入ったか入らないかというところであった。

リースを先頭にほぼ一列になって進んでいたとき、突如木の物陰で何かが光ったかと思うと、

がさっ

という物音と共に何かの影、人程の丈がありそうな何かがヒロ目掛けて飛び出して来るのを彼は見た。

彼が反射的に身をかがめたかと思うと、突如それは先程飛び出して来たのとほぼ逆方向に飛ばされていた。

ヒロは、その時やつと光ったものは何かの獣の目で、自分は人程もあるそれに襲われかけていたところ、リスの『呪』とやらによって獣は退治されたことをようやく理解した。

「私たち、特にあなたと違って、野生の獣はこの暗闇で充分に目がききますから、気をつけてください。」とティナが言った。

ヒロは、自分の中の不安というものが表面に浮き上がってきたように感じていた。

歴概念なし、ランゲナハト4（後書き）

ありがとうございました。次回も彼らの冒険が続きます。

歴概念なし、ランゲナハト5（前書き）

今回ちょっと短いですが、切りがいいのでここで一旦切ります。

歴概念なし、ランゲナハト5

その後もそれはそれは幾度ものピンチがヒロたちを襲う。…いや、ピンチだと認識していたのはヒロだけだったのかもしれないけれど。暗闇だからその姿形はよくわからないが、大小様々な獣らしきが次々襲いかかり、その度にリースがいつの間にか『呪』で撃退する、という具合。

しかも、明らかにターゲットはヒロかティナだった。

「獣たちは大抵、こちらが『呪』が使えるかどうかを見極めることが出来るんですよ。ですから、使えない私たち二人を目掛けて来るのが多いのです。」

襲われた瞬間くらいは身をのけ反らせるティナだったが、実に落ち着いた様子で話す。

「…大丈夫。リースは…というか使える人は皆それ相応の訓練をしていますから、滅多なことで私たちが手傷を負ってしまうことはありません。」

「…そ、そうですか。」

一人本気で怖がっている自分がバカらしかったが、また獣の目が光れば、やっぱり恐怖が彼の心を占めていた。

リースにお礼をする気持ちを持つ余裕すら、なかった。

さて、ヒロが夢で見た『光』の方向へ、なんとか進んで行くのだが、やはり現実には一向にそれは見つからない。

…やはり、あれはただの夢でしかなかったのだろうか…？ヒロには『夢見』など出来ようはずもない…。

ヒロはそう考えながらも着々と進んでいった。

気がつくとも森は急に開け、丁度山と山の間、といった具合のところにでた。

そこは四方山々や森に囲まれているのに、今迄通ってきたところと違い、植物らしきものもほとんど生えていない平地があった。

その荒涼とした風景に妙なものを感じながら、一行はさらにすすんだ。

そして、丁度その平地の真ん中くらいまで来た時だろうか。松明を持っていたリースが、何気なく地面を照らすと何かが描かれているのに気付いた。

「これは？」

その描かれた線かなにかを松明で辿って見ると、何か円形の模様が絵のようなものが描かれているのに気付いた。

一同は暗闇のせいもあり初めそれが何かはわからなかった。いや、ヒロは最後まで良くわからなかったのかもしれない。

初めに気付いたのはティナだった。

「これは…『呪印』…。」

この呟きにリースとティナは反応した。ヒロはまだわからなかった。

「早く離れて！早く！」

しかし、気付くのが少し遅かった。

ティナとリースは咄嗟にその円形の外から出た。しかし、他の二人が外に逃れる前に、その円形の模様は白く発光し出した。

次の瞬間、その光は強くなりながらヒロとジユナを包み込んだ。そして、その光はが突然消えたかと思うと、二人の姿も消えていた。

「これは…移動の『呪』が刻まれて『呪印』…。」

それは、『呪』の力を溶かし込むことでそれに触れたものに『呪』をかけることが出来る『呪印』。

これを造れるのは相当な力の持ち主…。ましてや瞬間移動型の『呪』だなんて…。一体誰が？

リスもティナも『呪』のことは当然知っている。移動型の『呪』はただでさえ使用出来るものは難しい。また、『呪印』の生成も然り。従って、瞬間移動型の『呪印』を造れるものなど、きいたことがなかった。

二人の前には、暗黒の大地と静寂だけがあった。

歴概念なし、ランゲナハト5（後書き）

次回から2方向で話を進めます。
ヒロ側とティナ側ですね。

夢／歴概念なし、ランゲナハト6

二一：夢

光に包まれたと思ったのは一瞬のこと。ヒロは一人暗闇の中を彷徨っていた。

他の三人はどこへ？ティナは？リスは？ジュナは？

辺りを見回しても闇ばかり。しかし、光に包まれる前とは景色が違った。

星明かりにぼんやり見えた山々や森は見当たらなかった。

「ここは？」

わけもわからず、とりあえず一帯をぐるぐる歩き回った。
だいたい数分経ったかと思われる頃、背後から声がした。

「ふむ。やはり予定通りだ。」

聞き覚えのない声に、ヒロはびくつとなって後ろを振り返った。
そこには人型の黒い影のようなものが立っている。黒い輪郭はあるけれど、輪郭しかない。

「おまえは今、私の『呪』を受け、気を失っているのだ。ここはおまえの夢の中。いや夢の世界。と言うべきなのだろうか。私は『呪』によってその世界におじゃまをしたと言うわけだ。」

ヒロはその影に驚きながら尋ねた。

「するとお前がああ妙な光る円を描いたのか？」

「そうだ。おまえはこれからもう一つ別の世界に行ってラクシユウエルのもの共の為に光の源を探しに行くのだ。」

「なぜ？おれが？」

「いや、もちろんそうする必要はない。全てはおまえが決めることだ。しかし…もう、そうせずにはいられないのではないか？」

それは確かに図星だった。ヒロは別に人一倍親切と言うわけではないが、ラクシュウエルの人達のそれと重なるであろう心深くの不安…。彼はそれを知ってしまった。あの世界に光をもたらして、それを取り除くことが出来たなら…。

また、由里子の言ったことも気にかかっていた。自分の身の回りに起きる一連の現象が、『羽』に関する世界達に拘ることだとしたら…。

その現象の流れに抗うのは、その世界たちの運命を変えるかもしれないこと…。もちろんよい方向に変わるか、悪い方向に変わるか、今のヒロには知るよしもないが…。悪い方向に変わる可能性が多分にあるならば、無理にその流れに抗わないほうが得策…。ヒロはそんなことを考えていた。

「…まあ、そうだが。具体的になにをすれば良いんだ？」

「それは行けばわかること。おまえがこれからいく世界は、今迄いた世界：『ラングナハト』と呼ばれている世界の対の世界だ。『ヴァイスナハト』と呼ばれている。」

「対？」

「ああ、元来二つの世界は比較的似た世界だったのだが、とある理由で自然バランスが崩れてしまったのだ。片方は闇に閉ざされ、片方は闇が存在しなくなってしまった…。」

「ではそれが光の源…。」

『羽』のことだろう。と、ヒロには察しがついていた。

「…それを回収して、ラングナハトに返せばいいのか？」

「いや、違う。それではラングナハトの闇が消滅してしまう。その光の源は元来いずれの世界にも存在しなかったはずの存在…。だから、それを手に入れたら処分してしまわなければならない。」

「処分？どうやって？」

「心配するな。それは私がどうにかする…。おまえはとりあえず、その光の源を手に入ればよいのだよ…。」

この影の存在をヒロはどう思っただろうか。もちろん完全に信用しているわけではなかっただろうが、しかし、これに背いたところで彼に出来ることはなにもない。だから、とりあえずは影のいうことに従うことにした。

「もう、夢から旅立つ時が来たようだ…。」 語尾の方はよく聞こえず、意識は遠のいて…いやある意味では戻っていった。

二二：歴概念なし、ラングナハト6

荒涼とした大地に残されたティナとリイスは、すぐさま来た道を戻り、村へ向かった。

『呪』を使えるリイスが残っていたのはある意味幸いであった。

彼らの内一人でもいてくれなければ、獣に襲われた時、なす術がない上、村の方角がわからないからだ。

「…とりあえず、長老にこのことを話して、これからの事を考えましょう。」

いなくなったのがヒロだけならば、必ずしも村でなにかをする必要は無いのかもしれないが、村の娘、ジュナも一緒にいなくなってしまった…。

それにこれもまた光の源に関連することであるとすれば、一層放って置いてはいけない事態であった。

「……瞬間移動型の『呪印』…そのようなものを造れるものがこの

世にいるというのか…。」

ティナから話を聞いた長老は、まずそのことに驚いた。

「問題は、なぜそこに呪印があったのかということ。そして、我々はなぜそこにおびき寄せられたかということ…。」

「おびき寄せられた…?」

「左様。おそらく我々は何者か、かなり力のある『呪』の能力者によつて、ここまでおびき寄せられたに相違ないだろう。」

あのヒロと言う少年が見たという赤光の夢、あるいは幻覚のようなもの…それは恐らくその『呪』を使うものが見せたものだ。」

「そのようなことが?」

「さあ…少なくともラクシュウエル家にはそのような『呪』を使える者はいないだろうが…なにしろ瞬間移動型呪印を造れる存在だ…ヒロはあの赤い光に心当たりがあったようだから、その記憶を掘り起こすなどして、現実や夢の中で再度見せたのかもしれない…。」

ラクシュウエルの人々が普段から使っている『呪』の力…しかし、それを極めるとどれ程ことが出来るようになるかはいまだ彼らも知らぬままだった。

「…問題は、その使い手が我々の敵か味方かと、いうことだ。」

「光の源をもたらす存在だとすれば、我々にとってプラスではありますが…。」

「確かに。しかし、まだ相手の存在もわからないまま突如に我々をおびき寄せ、ヒロとジュナをどこかへやってしまった。それもまた光の源を得るために必要なのかも知れないが…。わからないのは、『何故』ということだ。仮に、その存在が我々に光をもたらすのだとして、何故見ず知らずの我々にそんなことをしてくれるのだろう。」

「確かに…その存在にも何か目的があるのかも…。」

「そう。それが怖いのだ。何しろ相手は恐らく強大。その目的が我々が望むものでないとしても、抗う術はないだろう。」

「…今私たちはなにをすべきなのでしょう。」

「わからぬ。しかし、ここに来てしまったことにも何か意味があるのだろう。…もちろんその意味が我々にプラスなのかマイナスのかはわからないが…しかし、ヒロとジユナを放って置く訳にはいかないし少なくともその『意味』がわかるまでは、我々はここにとどまるべきなのであろう。」

二人の中には二つの不安と一つの希望が入り乱れていた。…強大な存在に対する不安、そして、代々受け継ぐいまはまだ永遠の暗闇のなかに生きているがための不安、そして一方で、それを晴らす時が近いのかも知れないという希望。…でもその鍵となるのは自分たちと元は関係なかったヒロや謎の存在…。

四つの『月』が相も変わらず夜闇に一端の明かりを落としていた。

続く

A - 1450年、ヴァイスナハト／ラングナハト7（前書き）

だいぶ日にちが開きましたか。実は携帯を無くしてしまったのですよ。見つかったよかったですが二日間手が付けられなかったのです。申し訳ない限りで。

A - 1450年、ヴァイスナハト／ラングナハト7

二三：A - 1450年、ヴァイスナハト／歴概念なし、ラングナハト7

目を覚ますとそこは白い部屋だった。

いや、白いのは壁面だけではなく、自分の横たわるベッドも枕も…よく見るといつの間にか着せられている服や、目の前の柵、その上にある花瓶までもが白かった。

彼はここがなんであるか何となく理解した。

ここは……病院だ。

先程の夢は彼の中に鮮明に記憶されていた。いや、記憶させられていたと言う事も出来ようか。

窓の外は一面の青空。晴れ渡る世界が広がっていた。

ここは自分の住む世界に近い…ただ、自分の住む世界の現在、と言うより、数十年後はこんな感じじゃないか、窓の景色やら病院らしき部屋なんかを見て、漠然とそう感じていた。

少しの間ぼうつとしてみると、突然、やっぱり白い扉がちやりと開いた。

「やあ、気がつきましたか。」

その白衣につつまれた男も如何にもわかりやすかった。それは

彼の世界で言う所の医者に相違なかった。

「おれは…気を失っていたのですか？」

「…はい。この病院から一里ほど離れた所に、女性の方と倒れてい

たのを発見されたのです。」

女性：ジュナのことだろうとヒロは考えた。

「……たまたま見つけた通行人は薬物か何かによる心中……まあ最近はある事ですからね。……そうだと思つて急いでウチに連絡してきたですよ。」

……しかし、別に薬物反応もないし、特に悪い所もない。

仕方なくとりあえず、普通に入院していただいたのです。」

「一緒にいた女性は？」

別の世界からきたことなど言う訳にもいかず、とりあえずヒロが尋ねたのはそのことだった。

「彼女の方が症状は軽く、あなたより二刻程早くお目覚めになりました。……しかし、記憶がないようなので、今も一応入院していただいています。いく所もないということなので……。」

そういえば、あなたのことを『しばらくしたら目覚める』なんて言っていましたね。本当にその通りになりましたな。驚いたことです。」

ヒロはもちろん、ジュナが本当に記憶を失っているわけではなく、彼女の記憶はこの世界の人に容易に語らない方が無難だと思つて、敢えて記憶がないふりをしていることを理解していた。

已むなく、彼も同様にすることにした。

「おや、あなたもやはり記憶を無くされているのですか。」

「はい。残念ながら……。そうだ、出来れば彼女と話なぞしたいのですが……。そこで何か思い出すこともあるかもしれませんし……。」

医者はその提案に賛成したようで、

「そうですね。彼女の病室はこのフロアの1210号室で、ここと同じような個室です。面会謝絶措置のようなものとはってないので、診察や消灯後以外ならばどうぞお好きに……。」

と言つて、病室を出て行つた。

ヒロが医者が去って行った後すぐに、ジュナの病室へ向かった。そこは彼の住む世界にすらまだない、20世紀末ごろにならありそうな病院で、大学病院か、都市の基幹病院程の大きさであった。50年代からやってきた彼にとつては病院の暗いイメージを覆すような『未来的』な病院であつた。

ただ病室番号を聞いただけではなかなか目的地に辿り着くのは苦勞し、二十分近く彷徨つていたかと彼は感じていた。

（そういえば、この世界には時間感覚はあるのだろうか……。）
そんなことを考えていた矢先、彼はついにジュナの病室に辿り着いた。

ノックをすると、

「どうぞ。」と言う声がしたので中に入った。

「遅かつたじゃない。やっと目覚めたの？」

今迄あまり言葉を交わしてなかつた二人だが、ジュナはまるで友達に話すかのような語り口で訊いて来た。

「はい、『呪』には慣れていないもので……。」

「気持ち悪いからそんな叮嚀な話し方やめて。」

ヒロはむっとしたものの、確かにそろそろその口調も気持ち悪くなつていたのでやめた。

「わかつた。」

「あなたが寝ている間に、この事、多少調べといたよ。全く。ここは何か白い服着た人か病人か怪我人しかいないんだから！」

こつちまで病人になりそう……。」

「仕方が無いさ。ここは病院って言つて、そう言う人達を治すための所だからな。白い服を着た人が、それらを治す専門の人。」

「あなたの住んでいた所にも、こういう所、あつたの？」

……まあ、と短く答えてそれ以上は何も言わなかつた。彼女にはここが別の世界と言う認識がないから、どう話せばいいかわからなか

つたのだ。

「…まあいいか。ここはね、おかしな所なのよ。なんてったって、ここは、永久に、この明るさのまんまなんだって。何か空にある何かが、常に地を明るく照らし続けてるらしくて。

…でも、遠い遠い昔はそうではなくて、明るいのと暗いのが交互にきてたんだって。昔って言っても、今いる人はまだ影も形も無い程遠い昔のことらしいわ。

あと、ここは私のいた所よりずっと便利らしくて、『機械』とか『コンピュータ』とか言うのがいろんなことをやってくれるらしいわ。」　なんだか似たような世界を小説かテレビかで見たことあるきがする…ヒロはそう感じていた。昼が永遠であることを抜かせば、「…でもね、こんな不思議な事も言っていた。そんな便利なのに、人々には何か物足りない感じ、空っぽな感じがする人が多くて、自分を殺めてしまう人がたくさんいるんだって。おかしな話だよね。

それで、私たちはどうすればいいの？」

「…ここに『光の源』があるんだ。それを取りに行く。」
「え？」

「ここが永遠に昼なのは、…つまり明るいまんまなのは、その『光の源』がここにあるからなんだ。それを回収して、ここに夜…つまり暗闇を、ティナやあんたのいる所に光を取り戻すんだ。」

「ちよつと待って、どうしてあなたそんなこと知ってるの？」

「昔おれがいたところでそう言うことを聞いた。…あと、夢で見たんだかよくわからないが、『呪』によつて誰かがそう言う夢を見させた、…あるいは誰かがおれの夢のなかに入ってきたらしい。」

「『呪』ってそんなことも出来るの？」

「あの『呪印』を造った奴だろう。あいつはなんだかわからないがおれたちにこのことあちら、そーゆーのを『世界』って呼ぶんだが、この世界とあの世界の秩序を戻したいらしい。目的はわからんが…今の所はあなたたちの味方って訳だ。あなたたちの旅、光を探す旅を終わらせてくれるんだからな。」

「でも、あんなの造るんだから、力のある奴…怖いわ。」

「まあ、そうなんだろうが、とりあえずは仕方ないだろ。それを見つけないと、おれたち戻れないらしいしな。」

「でも、光の源って何なのかしら。まさか、あの青空に浮かぶものを取りに行けって言うんじゃない？」

「『羽』だ。」

「『羽』？」

…ヒロには、それが光と闇の加減を変えるかどうかは知らないが、やはり得るべくは『羽』であることを確信していた。それは自分のこれまでの運命的ないきさつ、そして、何よりあの由里子の言葉の為であった。

「…この世界には、永遠に赤く輝き続ける『鳳凰の羽』があるんだ。それがなぜ永久に昼にしたり夜にしたりするのはよくわからないが、探すべきものは、その『羽』で間違いない。」

「それを、私たちの世界に持って行けば、私たちの世界にその昼とやらが訪れる…？」

「恐らく。さて、こんな所さつさと退院して、『羽』について調べないとな。」

長老の判断の下、暫くはここに滞在することとなったラクシユウエルの一行。

探索も二人の帰還次第ということで、食料採集以外にあまりすることはなかった。

その採集にしても、今回は森がすぐ近くなので、それほど苦勞なく、従って、彼らはあまりすることがなかった。

暇…それは、彼らにとって最もいやなものの一つであった。日

々すべきことをする間は深くに眠っている不安が、少しだけ表に浮き上がってきてしまうからだ。

そのような時は、誰も口にはしないだろうが、皆、なにか暗いものを心にかけていた。

殊に今回は、一族の一人がいなくなったとあって、とりわけ彼らの不安は大きかった。

ティナもその例外ではなく、いや、人一倍そんな不安を感じていた。

彼女は長老と話した後、床に就いたのだが、なかなか寝付けないようだった。

明けることのなかった闇…。

それが強大な何者かによって終わるかもしれない…。

それは確かに幸なこと。

しかし、強大なものの正体は不明…彼の目的も…。

もし、私たちに害を及ぼすのなら…。

だいたい、この闇…この明けることのなかった筈の闇がそう簡単に明けてよいものか…。

そう、簡単に明けてしまって、よいものだろうか…。

今ある状態は確かに不安…でもその当たり前の状態が『終わり』、当たり前ではなかったはずの状態へ移ることへの不安…。

そんなものを、彼女は感じていたのだった。

おばあちゃん……私は不安で不安で仕方ありません…。

このままでよいのでしょうか…？

それはまだティナが幼かった時のこと。

まだ、彼女のおばあちゃんが生きていたある日。

ティナはおばあちゃんの部屋に入るなり、屈託のない笑顔で話しかけた。

「あ、おばあちゃん。やっと目を覚ましたのね。」

そのころ彼女のおばあちゃん、エレナは寝ている時が多かった。体調も思わしくなかったらしい。

しかし、病でも『呪』のせいでもなかった。

それは、彼女のある力に起因するものだった。

「ああ、おはようティナ……。」

エレナは、やはりどうも元気がないように見えた。

「どうしたの？」

「いいえ、最近よく未来を見るからね、どうも眠っても眠っても、眠れた気がしないんだよ。」

「未来？私たちの？どんな？」

ティナは興味津々だった。まだ幼いティナはエレナがそれを語るにひどくためらっていたことには気付かなかった。

「……そうね。あまり遠い未来ではないわ。私はもういなくなった後の未来ではあるけれど、

あなたが大人になりたての頃の夢よ。」

「私がおとな？」

「そう、綺麗なおねえさんになったときのこと。」

「私、きれい？ほんと？やったあ！」

そう言うティナはぴょんぴょん飛び跳ね出した。

「まあ、お聴きなさいティナ。これは忘れてしまっても構わない事。」

いえ、本当に忘れることはないでしょうが、普段は別に心にとどめる必要のない事なのだけれど…。」

「え、なににない？」

まだ、喜び顔が抜けないままティナが訊いた。

「あなたも成長するにつれ、私たちと同じような重く冷たい何かを心の奥底に持ち始めると思うの。それは、この世界の闇に起因するもの……少なくとも私たちはそうだと思っているわ。」

「けれど、そう遠くない未来、これが私が『夢見』たものなのだけれど…その未来でこの永遠にも思える心の闇が晴れる日が来るの…。とある青年の働きによってね。」

「でもその時、あなたはきつと別の不安を抱くことになるわ…。それは今迄当たり前だったものが『そうではなくなる』ことへの不安、当たり前の日常が壊れるような…そんなことから来る不安ね。…たぶん、今のあなたにはわからないでしょうけどもうすこし聞いてね。」

その言葉を、おそらく当時ティナは理解していなかったのだけれど、それは彼女の奥深く、普段は見えない深くにしまわれていたのだった。

「…でもその変化、その日常の崩壊もまた、起こるべくして起こった必然なの。だから、その変化を…あなたたちは受け入れなければいけないのよ。」

更に彼女は自分の孫にこう告げた。

「あなたたちはきつと選択を迫られる…。その時に欲を出してはいけないわ。」

確かに光はこの暗闇の世界に於いて強大な希望なのだけれど…。闇と光のバランスを崩してはいけないの。

光は光だけでは存在しないのよ。事実、あなたたちはこの選択で言い争いになるでしょうが。よくを出してはいけないの。『それ』に火を灯した後は、『それ』はここからなくなるべきなのよ…。」

エレナはこの点について詳細を語ることを許さなかった。

元来、エレナが自分の見た未来について語る事は稀だった。そうすることで、未来が歪むことを恐れていたからであった。

しかし、ここに於いて、彼女はむしろ未来を歪めるために、つまり彼女の見た夢を現実にしな^い為にこのことを語っていた。

現時点で言葉の意味がわからない幼いティナに話しているのにも意味があった。

つまり、この言葉を理解し得る大人がこれを聞くことによって、新たな議論や言い争いやらが起こるのを恐れたからだ。

彼女は未来を確実に、しかし最小限にいい方向に歪める為にギリギリの所を見極めて語っていたのだった。

幼いティナは、そのことに気付く由もないけれど…。

ここに際して、ティナはその言葉を思い出した。

選択… なんの選択だと言うの？

外は相も変わらずの冷たい暗闇だった。

続く

A - 1450年、ヴァイスナハト／ランゲナハト7（後書き）

ヴァイスナハトは白い夜ってことでまあ白夜をイメージして付けた名です。次はヴァイスナハトのみの話になりますかね

A - 1450年、ヴァイスナハト2（前書き）

先、言つときます、今回暗いです。しかし、この世界を感じる上で重要な一話です。

A - 1450年、ヴァイスナハト2

二四：A - 1450年、ヴァイスナハト2

…そうは言っても、問題は山積みだった。まず、この世界は見た所、難しい言葉を使えば貨幣経済が成立しているらしい。病室に来る途中には金額が色々書かれた、何か飲み物やお菓子を『買える』機械があつた。自分たちにはもちろんお金がない。

…だいたい服にしたってこの病院着か向こうの世界で着ていたものだし、外の勝手も全くわからない。

…この感じだと、電車や飛行機はあるのだろうか…。何しろとりあえずの問題は金。金があれば他の問題もなしくずしに解決するように思えた。

仕方なく二人は、もう少し病院にすることを余儀なくされた。いや、ヒロはまだ当分はいることになるんじゃないか、と思っていた。

しかし、事態は意外な、但し決して望ましくない形で解決した。

それは二人が目覚めてから六日目の二度目の食事の前、であつた。そう言えば、この世界にはすっかり時計が存在し、空模様は変わらずとも、人々はそれに従い行動していた。その為、時間帯としての朝や夜といった言い方も生きていた。

つまり、これは六日目の午前中の事だった。

検査と言つても体が悪いわけではないので、軽いカウンセリングみたいなものを朝のうちに済ましたヒロは、ロビーのソファでテレビを見ながらお茶を飲んでいた。

初めて見た時、そのテレビがカラーであること、しかも画面が大きくて薄いことに驚いていたが、まあ、もう慣れてしまった。

テレビにしてもそうだが、ここにはヒロの世界にもないことはないが、ヒロの世界にあるものより、ずっとグレードアップしたようなものが数多くあった。それは逆にヒロの住む世界の未来を想像させるものだった。

（こんな便利な世にも拘らず、なぜ自殺者が多いんだろう。）

そんな疑問を抱いている時だった。

彼の隣りに40代前後と思しき男が座ってきて、何の気なさそうにヒロに話かけて来た。

「長いんですか。ここ。」

ヒロは少し驚いたが、大方ただの暇潰しだろうと思い、話相手になることにした。

「いえ、まだ一週間もないくらいですよ。」

「どこのご病気？」

「いやいや、別に悪い所はないんですが、どうも事故にあっただけで…怪我はないのですが、記憶を失ってしまっただけ。」

外見上傷病人には見えにくい彼が病院にいる上で、これは確かに便利な嘘だった。

「…他はとくに悪くないから暇で暇で。あなたは？」

「…わたしは何て事ない。盲腸ですよ。手術はもう済みました。」

「では、もう間も無く退院ですか？」

「…ええ。」

「おめでとうございます。」

…そのとき男の顔が明らかに暗くなったのがわかった。

「…あ、いえ、これは退院してから言うべきでしたか。」

「…退院ね。またあの味気無い日々に戻らなければいけないって思うとね…。」

「味気無い？ここの生活よりはましでしょう？」

「まあ、確かにここの生活も相当味気無いですが、普段の生活だった酷いもんです。ただコンピュータ相手に仕事しては家に帰って寝ての繰り返し。」

私を充足させるものはなにもない。ただつまらない毎日の繰り返し……。」

「便利な世の中になったものではないですか。」

「そう、便利になった。だからこそ、人々の心は貧しくなった。……つまらないんですよ。何もかもが。ただ何も考えず決まった線の上を等速で進むような日々がね。」

「……そう言うものですか？」

「不便、つまり物が不足しているのは確かに辛いですが、物が満ち足り過ぎていると、かえって日々はつまらないのです。私は達成感とか充実感と言うものを感じたことがない。」

ヒロにはその男の言う事は共感しようがなかった。なぜなら、彼は男の言う物が充実していない時代しか生きていないからだ。

「……そう言うものなのですか。」

「そんな他人事みたいに。いまは誰もが抱える悩み……いや、悩みとすら言えないものでしょう。……ああそうか、あなたは記憶と共にそう言う空虚感をもどこかに置き去りにしたのですね。」

「……こういうのは不謹慎極まりないですが、羨しいとすら……感じてしまいます。」

それは遠慮がちに言うからこそ、彼の本心であることが見て取れた。

「……では悩みはないのですか。」

「いえ、あなたより単純な悩みが一つ。」

「……というと？」

「金ですよ。いえ、元々無一文でわけではないのですが、何しろ記憶がありませんから、住み家も貯金のありかなんかもわからないんですよ。」

生憎、家族からの搜索願いなんかも出てなくて、この病院のお代も払えないし、退院するに出来ないのです。」

彼は多少嘘を交えてを言った。それは単に怪しまれない為の嘘だったのだが……

「なんだ。そんなことなら簡単です。私のお金の一部をあなたにあげますよ。」

「いえそんな！見ず知らずの人からお金なんて……！」

「いやいや、あなたは随分古い考えをお持ちだ……」と言っては失礼かな。しかし、今時お金なんて、生活に必要な以上持ってたってなんの役にもたちません。

……昔は守銭奴なんて言って金に執着する輩もいたようですが、いまじゃそれすら空しさを紛らわす事は出来ませんよ。ですから、むしろ是非受け取って欲しい。どうせ私には使いようのないものなんだから。」

守銭奴の方がまだ健康つてものです。男はこう付け足した。

「でも、そんないきなり……」

「いえほんとに。ほんとなら全部と言ったって良いんだ。私にはすぐに要らなくなる物だから。だがまあ一応家族に残す必要があるからね。一部で我慢して欲しいんだ。」

……余分なお金に価値なんてないんだから。」

彼はそう言った後病室に戻り小切手のようなものを彼に渡した。

その時の彼の目に、何ら生氣を感じなかったのを、ヒロは後も忘れられなかった。どうも、この行為はヒロを哀れんでの自己犠牲とか云う立派なものではなく、実際にこの世界ではお金は、少なくとも生活に必要な以外は何も価値のないものと、思われているようだった。

しかし、すぐに全て要らなくなるという彼の言葉は妙に引っ掛かっていた。

（全て要らなくなる訳ではないだろう。少なくとも生活には必要なんだから。）

しかし、確かに男は次の日の朝、財産なんてものを必要としなく

なった。

朝末明に、どしんという何か重いものが落ちる音を病院内の多くの人が聞いた。

病院の入口ホール付近にいた看護師達が駆け付けると、駐車場には例の男の死体が横たわっていた。

彼は病院の屋上から飛び降りたのだった。
確かに、彼には何も必要がなくなった。

「年々…と言っても、僕なんかが生まれる前からずっとなんだけど、ああいう人は増えているんだよ。」

ヒロの病室にやってきた医者がそう話した。

ヒロはその日彼の死を知ってから、彼のあの生気のない目をずっと思い浮かべていた。けれど、なんら具体的なことを考えられないような気がしていた。

心の籠った言の葉が何ら浮かばなかった。

「…おれにはわからない。なぜ……」

「あなたは記憶と共にその感覚も忘れてしまったのでしょいうな。」
医者は同情のなかに羨望を交えて言った。それにヒロは気付いたようだった。

「…なぜだ？なぜあなたたちは皆記憶を亡くしたおれを少なからず羨しく感じているんだ。そうでしょう？先生。あの男もそうだったおれの記憶喪失をある種羨んでいたんだ。」

「恐らく、私たちの生活が空虚で何にもならないもののように感じるからです。」

何も意味しないが無ではない…そんな、苦も楽もない空虚な存在感。

人はそんな半端な状態でいるくらいなら、全くの無になってしま

いたいと思ってしまうのですよ。

無の一つの実現があなたのようにその生活を完全に白紙にしてしまふこと。…そうでないならば…生活を『終わらせる』こと。

…後者を選ぶ者は非常に多いのです。誰でも簡単に記憶を、その空虚感と共に消せるわけではないですから。」

「なぜです。なぜこんな便利な世の中がそんなにつまらないのです。」

「これは精神科の分野なのでよくわかりませんが…。人は何かを一生懸命追い求めるその時に生きる実感を最も得られる生き物なのです。」

…しかし、何もかもがいとも簡単に可能に感じさせるこの世界は、人々にはあまりにも張り合いがないのです。ほとんど皆が、目指すべきものを失っているのですよ。

…私なんて、まだましな方です。人の命を救う仕事にはそう言ったものを幾何か感じさせる力があります。

…しかしそれも、人々が命を求めるから故の充実感。だから、このようなことがあると、最もやりきれないのは私たち医者かも知れません。」

「…おれはあの人からお金をもらう約束をされました。」

「…それは、君に必要な金ですか？」

「…まあ。おれは全てを忘れて、自分の財産を失ったも同然だから…。」

「それならば、ただいとおきなさい。不要な金ほど空虚感を呼び起こすものもないからね。」

…あなたが彼の不要な筈の金を使ってあげるとは、何かの供養みたいなものになるんじゃないかな…。

不要だった空虚なものを有効活用出来るのだからね。

…いやむしろ、あなたはそれを受け取らなければいけない。不要な金ほど人にとって毒な物はないんだ…。」

「どうして、それほど、満ち足りすぎているのでしょうか。」

「今や、科学的にも、倫理的にもあの永久に照らし続ける太陽のせいに相違ないということが解っていますね。」

科学的に言えば、あの無限に降り注ぐ光は全てエネルギーになるので、それにより機械やらなんやらは無限に稼働しえるため、人々の活動^{だったもの}を、どんどん機械に代替してしまうのですよ。

「……いいえ。それを止めればいいだろうと思うでしょう。しかし、無理なのです。私たちは便利さが心を貧しくするのを知りながら、便利になることを止められはしないのです。賢しい人間の性なのでしょうな。」

「……倫理的には、あの光は私たちに無限の希望を与えます。……聞こえはいいですが、無限の希望ほど厄介なものはないですよ。希望するのはほんの少しあるからこそ人々の奮い立たせるのです。」

無限にある希望は人々を何か醒めた気持ちにさせます。……どうにでもなるんだから、頑張るなんてバカらしい。……かみ砕いて言えばそんな気持ちです。」

それが無限に増幅すると、人々はなにもする気が起きないのです。」

「この感覚は、ヒロには理解しがたかった。しかし、もしこの医者と言つとおりなら、『羽』を回収すればこの世界の人々をも幸に出来るのだらう……。そう考えた。」

（あなたのお金、いただきます。……やっぱり少し後ろめたいけど、考えうる最も有効な使い方をさせていただきます。）

「……人々に生きる力を取り戻すために。」

「……心が遠くから戻ってきたような感じがした。」

「……たぶん彼は昨日既に、死を決していたのでしょう。そして、少しでも希望を持ち得そう……。やはりこんな世でも若さは強いのですか。」

らね…あなたに自分の空虚を与えるつもりであなたに話かけたのですよ。それが本当の意味での希望に変わることを信じて。」

こう言って医者は病室を出ていった。

窓の外は相変わらずの青空だった。ただ青いままの、空だった。

夕暮れの亡い晴天なんて……

ほんのちよつとこの世界の人々の気持ちがかかるような気がした。

続く

A - 1450年、ヴァイスナハト2（後書き）

ありがとうございました。次回からついに二つの世界を救う旅が始まります。

A - 1450年、ヴァイスナハト3

二五：ヴァイスナハト3

二人が病院を出たのはその三日後のことだった。

既に男からもらった小切手は換金済みで、ヒロにはそれによってこの世界に幸をもたらすのだという強い決心があった。

「でも、お金を得たところで、どこに行けばいいの？」

「とりあえずは図書館か何かでこの世界の宗教でも調べるか。なるだけでかいところが良いんだけど。」

そこから二人は人に聞きつつ電車で近くの都市へ行き、その地域随一だと言う図書館へ赴いた。

その間ヒロはジュナに図書館と宗教について説明してやる羽目になった。

「つまり、その宗教の中に、『光』を崇めるようなものがないか調べようってわけだ。」

「あなたの世界にも、宗教があったの？」

「ああ、色々なものがあつたし、『光』もその一派みたいのに奉られていたんだ。」

そこへ辿り着くと、まず彼らは宗教に関するあらゆる本を手当たり次第に読んだ。

『羽』を奉る宗教がないか……。大図書館とあって、その作業はなかなか進まず、駅前に宿をとって、数日をかけて、本を調べていった。

しかし、どこを調べてもそのような宗教は存在しないことがわかった。

途端にヒロは途方にくれた。彼にはある程度自信があつたのだ。『羽』が何らかの宗教的なものの信仰の対象になっていることについて。

しかし、その自信はもろくも崩れさってしまったのだ。

「どうするのよ。」

「正直、手掛かりがない……。」

仕方なく、その日二人は作業を中断し、ホテルで休むことにした。もちろん、部屋は別で。

数日間勉強しっぱなしのような心地のヒロは徒労感もあつたか、一気に疲労を感じ、ベッドで眠ってしまった。

しばらくして目が覚めると、彼は何の気なしにテレビをつけた。目覚めたらとりあえずテレビをつけるのは、この世界に来てからの習慣となっていた。

映つたのは『朝』のニュースだった。

「今日未明、KASAは遂に、スペースシャトル『Enishi』を打ち上げました。乗組員は14名。内、カムナ国からは2名が乗り込みました……」

彼は初めそれが何のことを言っているのかよくわからなかったが、すぐ宇宙へ行き作業をするプロジェクトに関するニュースであることを理解した。

そうか、ここでは人は宇宙にも行くのか……。

ニュースはこう続けられた。

「…今回は三日後に宇宙光源増幅炉『Elwina』にドッキングし、増幅炉の修理にあたるということです…。」

…宇宙光源増幅炉？

その言葉が彼の耳に強く残った。

…光源を増幅する…？…人工的に？

ヒロに一つの考えがひらめいた。

二人はまたも、図書館で調べものをした。今回は宇宙工学というヒロも馴染みのない分野の本を漁った。

「もう宗教とやらは調べ終わってたじゃない。今度はなにを読むの？」

「『今朝』のニュースでな、気になることがあったんだ…。」

そう言ったきり、ヒロは一冊の本に集中していた。

今回はそう探すのに苦労したわけではなかった。その本は同分野についてのかなり入門的な本で、ヒロにでも理解出来るものだった。

一通り読み終わると、ヒロは自分の考えに益々自信を強め、今度はジュナに説明しようとした。

「つまり、だ。あの空に浮かぶ光、『太陽』と呼ばれてはいるあれは、おれが考える『太陽』とはだいぶ違うものだったんだ。」

おれはてつきり、あの光源は自然なものだと思っていたんだ。何しろ、おれの世界では太陽は自然に昇って沈むものだからな。

…しかし、この世界で現在『太陽』と呼ばれているのは、それと違って、人工的につくりだしたものらしいんだ。」

「どうやって？」

「まあ、難しいことはおれもよくわからないんだが、何か小さな、しかし強い光源が宇宙あるらしく、その光を反射、増幅させて世界

中に光を永遠におくるシステムらしい。

そして、その光源は宇宙光源増幅炉というもののなかで保管されているそうなんだ。」

「…じゃあ、それが…。」

「残念ながら、その光源についてはあまり詳細が書かれていなかったのだが、『ついでることない光』を出すものとなっている。

…恐らくこれがおれらの求めるものだろう。」

「…じゃあ、私たちはその宇宙とやらにいかなきゃいけないのね。でも、簡単に行けるの？」

「一昔前までは素人が行くのは不可能だったらしいが…。最近はず宙旅行とやらができるらしい。その中には、宇宙光源増幅炉見学というのもあるそうだから、行ってやれないことはなさそうだ。」

続く

A - 1451 ヴァイスナハト（前書き）

非常に久しぶりです。

ちよつと続きに苦慮しておりましたが、ここから再開します

A - 1451 ヴァイスナハト

それから、しばらくは、いわゆる宇宙旅行のための準備に費やされた。

彼らは旅行代理店という店で手続きをし、必要なものをそろえたり、宇宙にいくための訓練をしたりした。

そのうちに、二人共そこでの生活に慣れていったようだった。

そして、病院でヒロが目覚めてから、二か月ほどが経過したある日、二人は宇宙空港より、出発した。

ヒロは宇宙にいくなんて、どんな巨大な乗り物に乗るのだろうと気になっていたが、まあ、何のことはなく、ヒロの『世界』の旅客機よりも少し小さいくらいの感じだった。

…まあ、彼は飛行機に乗ったこともないから、それでもそこそこ珍しく感じていたが…。

一方、ジュナの『世界』では、空を飛ぶなんて考えられないことだから、落ち着かない様子だった。

「…こんな重そうな、大きなモノが、本当に飛ぶの？あの光の所まで？」

「ああ、でもまあ、鳥っぽい格好、してるだろ。」
「そうだけど…」

彼女に揚力の説明などしても到底わかるはずないので、ジュナを信じさせようにも、ムダだった。

ジュナがあたりをきよろしている内に、宇宙航空機は、離陸した。

「う、わ、やっぱなんか上に上がってる感じ、あるね」
「まあ、でも、こんなでかいものが動いている割には、イメージほどの揺れとかないけどな。」

それもその筈。その機はこの世界で最も新しいものの一つで、乗

り心地も安全性も最高のものだった。

「どれくらいの間乗るの？これ」

「とりあえず今日は宇宙ステーションとやらに一泊するから、そこまでほだいたい四時間…って、おまえ時間感覚わくようになったのか？」

「うん。二か月いると、だいぶね」

こちらは『夜』が存在しない。いや、時間区分上の『夜』は存在するが。しかし、そこから『光』が沈んで、夕闇に世界が包まれることはない。

一方で、暗くならないにもかかわらず、『夜』と呼ばれる時間帯が存在するのはおもしろい。

やはり、文明の発展には共通な時間システムが重要なのか…これは、ヒロの言葉。

景色はどんどん小さくなる。

二人が高所恐怖症でないと言うこともあるだろうが、（というか、ジュナは『高所』に來たことがほとんどない）米粒のようなビルや家達は、彼らからすれば『超高い所』にいる感覚を逆になくすものであった。

たんに板に点々がならんでいるだけのような…。

景色が変わり始めたのは離陸から一時間と少したったころだった。キャビンⅡアテンダントが放送する。

「皆様こんにちは。今日はアルフォートスペースアラインにご搭乗いただき、誠にありがとうございます。当機はまもなく大気圏を通過し、宇宙空間へ突入します。機内の空調調整と重力調整のため、これから数分の間、揺れや騒音が予想されます…」

「要するに揺れるけどすいません、でも安全に問題はありません、と…」

「親切だね。やっぱり。安全なのに教えてくれるなんてやさしー。」

『商売』の概念がなかったジュナにとって、いわゆるサービス業のひとたちはとてつもなく親切に見えた。そこに金勘定が絡んでいると言うことも彼女はまだ今一つわかっていない。

日常の買い物くらいはわりとすぐに行けるようになったが、経済的なことややらなんやらは、まったくわかっていないだろう。

だから、彼女にとっては、周囲の人の多くが『親切』であった。

確かにそれからしばらくの間飛行機は揺れた。その間にあたりは暗くなっていき、窓の下のほうに青い巨大な球体が見え始める。

「これが私たちのいたところ？」

「ああ、地球っておれのまわりでは言ってたけど、そっぴゃここではなんて言うんだろ。」

あたりは暗くなり、ヒロやジュナの知る『暗闇』に近い感じになる。

暗闇は逆に二人を少し安心させる。

この世界に来てから遭遇することのなかった暗闇…。

かえってヒロとジュナに親近感のようなものを与えた。

ふと、ヒロは窓から進行方向を見た。

「あれか？あれが宇宙ステーションとやらなのか？」

距離感は掴めないが、ヒロの『目の前』には円筒形を幾つも組み合わせて作った建造物があつた。

それは全体として見れば、『北』の字の形に近かつた。

段々とそれは近くなり、ついに飛行機は『北』の字の右側と左側の間の隙間に入った。

「みなさん間も無く着陸でございますが、席をお立ちになるのは

今しばらくお待ちください……。」

乗務員からのアナウンスがあつてすぐ、機は止まって、なにやら出口を開ける準備をしているようだった。

宇宙ステーション：ヒロはさぞSF未来的に見えることと想像していた。

確かにそれは円筒形で『北』の形をしていたが、ヒロの目から見ても、想像より素っ気ないものであった。

はじめて宇宙に来了という実感も、この暗闇と青い球体を見ながらにしても尚、今一つ感じられなかった。

機を降りると、さっきの搭乗ロビーと似たようなところを通り、二人はホテルへと向かう。途中の通路には窓がなく、ただ案内表示に従い進むだけだった。

ヒロにとって初めて来た宇宙は、ただの通路だった。

続く

A - 1451 ヴァイスナハト2

夜。

空調音が響く部屋。

ヒロは一人部屋で眠る。

久しぶりに窓の外は暗く。

『夜』にふさわしい、夜であった。

部屋は適温に保たれ、気圧等も常に調整されているが、機械音が気になってか、はたまた別の何らかの要因によってか、今夜は眠れない。

ここは宇宙ステーションホテルの76号室。

このホテルには階層の概念がなく、『76』は単純に76番目の部屋をあらわすのだった。

なぜだかわからないが、眠れない。眠れない。

部屋の中の微かな機械音。窓の外は恐らく至って無音。

そんな夜中だったから、彼は廊下を早足に行く足音を聞いた。

単に別の宿泊客かと思ったが、妙にせわしない。

はつきりとは聞こえないが、なにか話し声もするようだ。

夜中にしては随分大勢が行き来するような…気がした。

翌朝。

ラウンジでの朝食は、ジュナと二人。

「昨日、何か事件があったみたいだよ」

「事件？」

寝不足気味の眼を擦りながら、ヒロが返す。

ジュナは『スペシャルスペースティスト』サラダの野菜を飲み込んだ後、続ける。

「うん。なんかフロントのところで、ホテルの…従業員って言うの？それっぽい人が話してた。」

ヒロは昨夜の足音を思い出す。

その時、ラウンジでアナウンスが流れる。

本日、機材調整の為、予定されていた、Elwina 光源増幅炉 の見学ツアーは中止とさせていただきます。尚、既に代金をお支払い済みの方は、払い戻しをさせていただきますので、フロント迄おこしく下さい。くりかえします……

「ツアー中止だつて。」

ジュナはさも残念そうに言うが、ヒロは当然、ジュナの云う『事件』と結び付けて考えていた。

「…ちよつとフロント行つて来るわ。ジュナは部屋で待つてて。10時半に行くから。」

そう言うつと、返事も待たずにヒロはラウンジを出て行つた。

約束より僅かに早い頃、ヒロはジュナの部屋の扉をノックした。

予め部屋を片付け終えていたジュナはすぐヒロを迎えた。

「事件のこと、ここの従業員とかから少しだけ聞いて来た。」
そう言つてヒロは自分で集めただけの情報を、ジュナに話して聞かせた。以下は彼の言葉。

どうも昨晚、Elwinaへの侵入を試みた奴がいたらしく、E

l w i n a のロックを解こうと、セキュリティへの不正な接続があったとのことだ。

まあ、早い話が、『光』が保管してある部屋の鍵を不審にもこじあけ様としたってこと。

普段からそうゆう不正な接続はあるらしいんだけど……このセキュリティ……鍵はしっかりしていて、まずびくともしないそうなんだが、今回は三つのセキュリティシステムの内二つまでが解除されてしまったらしいんだ。

で、このシステムは一つ以上が解除された状態で別のシステムへの不正アクセスが認められると、システムがダウンして、一定時間誰も開けられないようになってるんだそうだ。

だから、今回はそれのお陰でこんな事になってしまったんだ。

半日経つと、E l w i n a 管理局とか言う所のトップのみが知る特殊なパスワードによって、鍵を再起動できるようになるんだとか。

彼もジュナもコンピュータには詳しくない。ヒロはこの二か月で僅かに知識をつけたものの、ジュナは全くだった。ヒロはジュナにわかるように言葉を変換しつつ、説明を続ける。

それで、だ、世界の光源を奪ってなんになるんだ？って質問を、まあ従業員は犯人じゃないからわからないだろうが、と思いながらも一応聞いた所、彼はこう答えた。

僕は専門家じゃないから詳しい所はわからないが、二つ理由が考えられる。

一つは『光』を奪って世界政府かなんか……まあどこかに何らかの取引を要求する場合。この『光源』は世界を明るく照らすだけでなくエネルギー源にもなっているわけだから、この現代世界に於いてなくてはならないものだ。だから、この場合要求する対価は相当なものだ。おそらく金やら物品ではない。

それこそ世界政府の支配権なんかを、光を存続させる『対価』にすることも考えられるだろう。そして、実際その様な事態が発生した場合、少なくとも一時的には、その条件を飲まざるを得ないだろうね。

『光』を手に入れることは、世界を手に入れるに等しいってわけだ。だから、高いリスクや金を掛けてE l w i n a 侵入を試みるものはいないこともない。

そして、もう一つの要因が考えられる。

それは、『光』が世界を照らすのを止めるために奪う場合だよ。

君は『鴉丸連盟』という極右団体を知っているかい？

この質問にオレは首を横に振った。その連盟どころか、この世界での左右の概念も知らなかったんだけど…。で、彼はこう続ける。

そうか、最近は結構ニュースでもお目にかかるんだけどな。

鴉丸連盟は、早い話が、この世界から光を取り去って、闇をさしこむべきだ、という思想の下、『光』を奪おうところにいる人達だ。

彼ら曰く、無限の光とエネルギーに満ちているこの世界では、逆に人々はやりがいや無気力になりつつある。実際、この現代人を『機械に支配された人々』と揶揄する人は多いからね。それに無気力や虚無感からくる自殺やら無差別殺人やら…なんてのも最近は珍しくも何ともないからね。昔の人々はそういうのに対してもっと恐れたり、怒ったりしたっていうけど、今はそういうこともあまりないみたい。まあ、早い話が『どうでもいい』ってことなんだろうね。

…それで、鴉丸連盟はそういう世界を変えようって、少々過激な思想を持っているんだ。

…実際は光が取り去られたらされたで、やっぱり世界は崩壊するんだけどね…。

最後に彼が『ま、それもアリかもね』とつぶやいたのを、オレは聞き逃さなかった。

「…まあ、病院の医者からも似たような話は聞いたことがあるんだけど、この世界の人達は、エネルギーが無限にあるがゆえに、かえって生きることには消極的なんだそうだ。」

「…私からすれば贅沢すぎる悩みに感じるけど、確かに文化が発達しすぎて努力が不要になったりしたら、ちよつとつまらないかもね…」

さてと、とヒロはこれからについて考え始めた。

「どうしようか。とりあえずE I w i n aにはしばらく近付けそうもない…」

ジュナは少し考え、提案した。

「ねえ、その鴉丸連盟に会ってみるって言うのは？」

ヒロもそれは考えないわけではなかったが、なかなか口に出さな
いでいた。理由は…。

「うーん…なんか怖いんだよね。『右』って響きが」

と、言つてジュナに通じようもない。

「…でも、やろうとしていること、私たちと似てるよ？」

「そう、そこなんだよね…」

それはある程度考えていたことだが、ジュナに言われて尚気にな
った。

僕らは、この世界の光を奪ってしまうのか…？

やっぱりこの世界的には、僕らのやろうとしていることは過激な
行動なんだろう。

ならば…。

「会つてみるしかないか…。」

続く

A - 1451 ヴァイスナハト（前書き）

「左右」の概念については、現実とは違いますのであしからず。

A - 1451 ヴァイスナハト

さて、会いに行くといったものの…。

当てが全く見つからない二人。

相手が相手なので気軽に人に聞く訳にもいかない…。

さて、どうしたものか。

そうこうしながら、無下に三日が過ぎた。

しかし、彼らの悩みは、意外な形で解決する。

それは、ステーションホテル四日目の夕方。相変わらずElwinaの一般公開はなく。

二人は夕食を摂り終え、ラウンジでくつろいでいた。

二人共、ここにきて特に焦っているわけもなく、『果報は寝て待つ』的な感覚で、普通にホテル暮らしをしていた。

ラウンジには数個のテレビがある。各部屋にもあるので、さしてこれを観ることもないが、その日はこの世界で人気のスポーツ中継をやっていたので、何となく二人共々観ていた。

「私、あれまだルールよくわかんないんだけど」

テレビ画面では、スティックを持った選手達がボールを操っていた。

空中で。

基本ルールはホッケーに近いんだろうとヒロは感じていた。

両サイドの空中に輪があるので、それがゴールなんだろうと推し量ることができた。

ただ、なぜかほとんど試合は空中で展開されている。重力がかなり小さいところで行われているらしい。

ちなみに、選手は筈には乗っていない。

ケッペンパウエルと言う選手がスティックで華麗にボールを操っている映像がテレビに貼り付いていたその時、突如にしてケッペンパウエルの全身像が歪んだかと思っただけ。

画面は一瞬にしてホワイトアウトした。

そう言えばこの世界のテレビはホワイトアウトなんだ、なんてヒ口はどうでも良いことを考えた。

ラウンジにいた人はざわつきはじめた。

五秒程度、テレビ画面は白いままだったが、その後謎の男の姿が現れた。

彼は黒のローブのようなものを羽織って立っていた。
見るからに怪しいでちだ。

テレビ画面の中のその男はその格好とは似つかわしくない柔らかな口調で話始めた。

「始めに公共の電波を無断で拝借したことをわびます。私は鴉丸連盟の最高責任者、ゲシヒテと申します。

皆様ご存じの事とは思いますが、只今此の世界は非常に危険な病に脅かされて居ります。

それは所謂ウイルスや、細菌が軀を蝕むような其れとは全く性質を異にする、人々の心に巣喰う病です。

今、此の世界に於いて、向上心を持って生きている人は居りますか？何かを目標に、何かやってやろうと言う方は居りますか？

残念な事に、世界は無気力へ収束する一方。この言の葉が響く様な健康な心をお持ちの方がどの程度居るのかすら不安な現代世界に私たちは生きて居ます。

此の病の原因は、お節介にも世界を永久に照らし続ける『太陽』……Elwinaのせいで御座います。無限大なエネルギーが、私た

ちの心を蝕んで居るのです。

私達はそんなE l w i n aの稼働停止を強く求めて居ります。その為には、少々過激な手段も辞さない構えで居ります。

先刻、E l w i n aへの侵入を試みたのも、他でもない、私たちが御座います。

さて、皆様の中に私達の活動に協力したいと言う方は居りませんか？協力したい方がもしいらっしやいましたら、アクセスコードは『ヒロシマ』で御座います！

私達は共に活動してくれる同志を心から歓迎致します！」

そこまで言うと、男：ゲシヒテの姿は歪んで行き、やがて、先ほどのようなホワイトアウトになったかと思うと、すぐさま、ケッペンパウエルゴールシーンが映された。

他の人々は、ジュナも含め、今の放送をよくある（かどうかはわからないが）電波ジャックと考えただろう。

しかし、ヒロは当然、今のそれが自分に、恐らく自分のみに向けて発せられたものだと思い付いた。

この世界はヒロがいる世界とは異なるもの。当然、東京も日本もこの世界にはない。

…当然、『ヒロシマ』も。

何故かはわからない。しかし、恐らく彼らはヒロが彼の住む世界からここに來た事を知り、更には…

ヒロとの交流を求めて居る…。

なぜ彼らがヒロのことを知って居るのかは判らないが、似た目標を掲げてる彼等だ。やはり、この『誘い』には乗ってみるべきなんだろう。

ヒロは思案の末、こう結論づけた。

ヒロは以上の考えをジュナに伝えた。

「ふーん、ヒロシマってヒロの住む所の都市の名前なんだ」

「ああ、規模はまあ世界全体で見ればそこそただけ、訳あって有名な都市なんだ。」

終戦はヒロがまだ小さい頃の事だったから彼は先の戦争のことをほとんど知らない。

又、彼の一家も言わば『不幸中の幸い』な部類に含まれるようで、身内が亡くなった、或いは大怪我をした、なんて話を彼が聞いたことはない。

だから彼の中の戦争のイメージの多くは学校の授業から得ている。だからこそ、と言うべきが、大戦 ヒロシマと言うイメージは彼の頭のなかに尚強く、刻み込まれていた。『歴史的事実』として。ゲシヒテがそこまで知り得たかどうかは判らないが……。

「それで？アクセスコードってことはネットからアクセスしろってことよね？」

公共のコンピュータ使って大丈夫なものなの？」

そこはヒロも不安だった。彼らはこの世界のネットワークの仕組みをよく知らない。

公共のコンピュータの履歴は誰かが監視したり、チェックしたりするものなんだろうか……。

かと言って、誰かに聞くのも『おまえそんな怪しいもん見るのか』と思われそうだと考えると気が引けた。

結局、彼は新品を購入することにした。

ここにきて病院で譲り受けた金が、また役に立つこととなったの

だ。

翌日彼らは宇宙ステーションから宇宙飛行機で三十分の所にある『宇宙都市』へ出かけることにした。

飛行機の中でジュナが、

「てゆーかさ、この…世界って言うの？なんかどうなってるのかよくわかんないんだけど。」

…と、ここにきてざっくりとした質問をヒロにぶつけた。

でも、『世界』と言う概念はジュナも飲み込めて居る様だった。

と、言う訳で飛行機の中の三十分を使ってヒロが説明を始めた。

「まあ、おれも本で見ただけなんだけど、この前までの約二か月をオレ達が過ごした、あの窓の外に見える青い星は、E r d e エルデ と呼ばれてて、当然ながら、この世界の人間はみな元々あの星で生まれ育って居ただけだけど、時々話題に昇る文明の発達のせいで、そして、人口増加やら何やらの要因で、宇宙にも住む様になった訳だ。」

でさっきまでいた宇宙ステーションは観光向けホテルと中央空港があつて、E r d e と宇宙を中継しているんだ。

それで他に五つの施設がこのE r d e からそう離れていない宇宙空間に浮かんでて、まあすごく巨大な宇宙船が五つ浮かんで居ると思うっていいと思う。

その内四つは全部居住用地用。それぞれが『都市』と見なされていて、商業地、工業地、住居、公共施設等、普通の都市機能一式と空港が中に詰まっている。これらはE r d e と同様の季節、重力等の環境が常に保たれて居る。

今一つは前々から話題に昇っているE l w i n a …『光』それ自体と管理システム等々が詰まっている。

そして、これらとステーションそれぞれに…E l w i n a は現状のような例外もあるが…普段は飛行機が日々運航されて居る。

：まあ、今の人類の宇宙への進出具合はこんな感じだ。宇宙開発部のKASAは次はすぐ隣の衛星への進出を目指して居るようだが、あまりモチベーションは高くないようだな。」

エネルギーが余っているから仕方なく、という状況らしい。

そうこうしている内に飛行機は第3居住地『Eineulugolas』に着いた。

二人は偽者の空の下、Eineulugolasの電気街にいた。上を見上げると、はるか高い青空が見える。

それは如何にも本物のように錯覚するかの高さ、透明感……いや、むしろ高く、そして、あまりに鮮やかすぎて、逆に偽者にも思える青空だった。

もちろんそれは偽者。Eineulugolasの天井内側に、特殊な膜が貼られているためである。

二人はそんな奇妙な青空の下、電気街を進んだ。

電気街はどこも人込みでごったがえしていた。

二人を除き誰一人として髪の毛は黒ではなかった。

電気街にやたらとさかんに売られている物でヒロが気になったのは、三つつのボトルをもち、幾つかのスイッチやらボタンが付いた、弁当箱より多少大きめの機械だった。

大抵は、隣りにA薬、B薬、C薬と書かれた瓶も一緒に売られていた。

ヒロは気になったが、それらを売る店員はみな『まとも』には見えなかったたので、それらの店は素通りしていった。

「ねえこんなに店がたくさんあるなんて聞いてないよ。」

「一体どこに行けばいいの？」

「大丈夫。ちゃんと携帯用汎用コンピュータのショップを調べておいたから。」

こっちだ。と彼はジュナの手を引き、更に人込みの奥へと進む。

その間にも様々な店の前を通過していった。

内、『スーサイド専門店すいすい亭』だけは、何の店かすぐに判った。

何にしても、この電気街が病んでいることは、ヒロの目からも明確で、なるだけ早く抜けた方がいい、と彼は感じていた。

『すいすい亭』から7軒奥の3階建てビルの一階に、彼らの目的地『携帯汎用コンピュータ Are Uh』があった。

二人はすこし早足になりながらその中に入った。

三十分後、二人は店員に勧められて買った携帯汎用コンピュータ E11Basta を持って店を出た。その足で、近くのカフェには何か怪しい雰囲気があったので、少し離れた所にあったカフェ『Kopf』でE11Bastaのセットアップにとりかかった。と、言ってもセットアップは簡単で、ヒロが画面をタッチすると世界指紋データの指紋と照合の末、E11Bastaはヒロのものとなった。

全人間の指紋が登録されていることもそうだが、二か月と少ししかまだこの世界にいないヒロの指紋が登録されていることに驚いた。

ヒロは早速、ネットを立ち上げる。やり方は苦労するかに思われたが、『N・E・T』と書かれたキーを押すだけだったので容易に操作出来た。

立ち上げると、まず検索エンジンのページが表示される。

彼はキーを確認しながら、ゆっくり、『からすまどうめい』と打ち込む。すると自動で『鴉丸同盟』に変換された。

そして、検索のキーを押すと、鴉丸同盟のホームページに飛んだ。そのトップページは、全体が黒で、中心には、この同盟のシンボルマークと思しき、カラスを象った円形の模様が現れた。

ちよつと彼は、どの項目へ進むか悩んだが、『アクセスコード』
と言う項目があつたので、それにタッチした。
すると8桁の数字を入力する画面が現れた。

「あれ？ここに『ヒロシマ』って入れるとかじゃないの？」
よこにいたジュナが口を出す。

ヒロは少し考えた。ヒロシマ…8桁…。

「しかし、ヒロシマが手掛かりになつてゐることは間違いないん
だけど…。」

コードは全て数字。8桁の数字で広島…？

そこでピンと来るあたり、彼はなかなか鋭いのだろうか。

「なるほど、8桁…ね。」

彼は手早く19450806と入力した。

「それ、なんの数字？」

ジュナがとなりからのぞきこんで尋ねる。

「まあ、平和を感じる数字かな。」

ジュナには全くわからなかつた。が、説明するのも面倒なヒロは、
それ以上何も言わなかつた。

入力された画面はすこし静止した後、波打つように揺れ始めた。
波間から徐々に文字が浮かび上がって来る。

ようこそ、鴉色のチャットルームへ

オレらは同志として歓迎された

続く

A - 1451 ヴァイスナハト（後書き）

ここで、敢えて次回はゲシヒテの話に行きます。

陰界 シルム歴137年春の月（前書き）

もちろんゲシヒテは同一人物です

陰界 シルム歴137年春の月

陰界：それは、常に黒い霧のようなもの、『陰』が立ち込める世界。

ここにも幾つかの種族がいたが、黒魔族と呼ばれる種族が、この『世界』で最も繁栄していることを、疑う物はいない…。

彼らは『陰』をエネルギー媒体にして、様々な効果を物体、又は空間に作用させる『黒魔法』を使うことが出来る。

…とは言え、現在はこの世界自体、まだまだ発展途上であるため、先の霧の世界や、ヴァイスナハトの様な高度文明はまだない。

そんな世界の片隅、ムール城の地下牢に、彼は居た。

ここからの主役、名をゲシヒテと云う。

彼は、先のシンクロに依って、霧の世界へ赴き、辛くも『羽』を手に入れることに成功したものの、別世界で、黒魔法を使ったことを王に咎められ、相方のラボイデ共々、牢獄に入れられたのであった。

この牢獄にはこの民族が編み出した特殊な結界が張られていて、彼らは黒魔法でもってここを出ることはもちろん出来ない。

今は彼らが戻って来た冬の月がすぎて、春の月初日であった。

ゲシヒテは今日もつれづれなまま、ベッドと呼ばれる堅い板の上に寝転んで居た。

（長いな…。もうすぐ一月にもなる…。もうそろそろ出してくれないものだが…。）

彼は王は比較的すぐに赦してくれると信じて疑わなかった。なぜなら、彼は、多少の失態はあったものの、王が、死ぬ程欲しがっていた『羽』を手に入れた功労者だったのだから。

牢獄に入れられたばかりのころはよくラボイデと話して暇を潰していたが、最近はそれすら飽きてしまった。

（本当に、いつになったら出してくれるのかな…）

彼は高い高い天井を見上げて一人つぶやいた。

そんなとき、いきなり兵士がゲシヒテを呼ぶ。

「おい！ちよつとこつち来い！」

兵士の威勢はいいものの、その声には幾分の畏れも混ざっている。それもその筈、ラボイデ、ゲシヒテは共に王直属の兵の一人で、牢屋番とは比べ物にならない程、高い位の人間である…本来。

ゲシヒテ、格下に聞かれた偉そうな口を気にも止めず、兵士に近付いて行った。

それは、どうせすぐに出て、また元のポジションに戻る…という考え故のことだった。

兵士はその口調のまま、

「おまえに文が届いている！」

そう言って兵士は紙切れを、格子の間からゲシヒテに手渡した。そして、すぐにまた持ち場に戻って行った。

ゲシヒテには兵士のぎこちない威厳の見せ方を微かに笑いながら文を開いた。

（それにしても、一体誰からだ？）

人生の多くを王族と共に生きてきた彼は、それほど交友は広くなく、まして、牢獄の中まで文を送りつける物など…。

そこには見覚えのない名前が書いてあった。
以下はその内容である。

「ゲシヒテ様へ。

はじめまして、私は龍騎士ルートヴィッヒなる者で御座います。

突然の事ではありますが、只今この国の王は大変危険な力、そして考えをお持ちのよう。

力とは、世界の切れ目を利用した『シンクロ』による世界間五次元移動。

もう一つは、あなたも多少判っている事と思いますが、『羽』の蒐集にとりつかれております。恐らくは、『世界達』を全て手中にしようと言う悪しき気持ちの隙間に『羽』の人を引き憑ける力が入り込んだのでしょうか。

率直に言つて、王は既にしてご乱心。貴方の行く末も危険であると思われます。

私もなるべく異事にはしたくないので『いざ』と言う時になれば、初めてあなたの前に姿を表すでしょう。

繰り返になりますが、あなたのこの先は、存亡を含めて多少危険な状況のようです。恐らくあなたが思うよりも…。

ルトヴィツヒ

そんな文句で手紙は終了していた。

無論ゲシヒテはそのような文句を、すぐに信用しはしなかった。いや、大いに疑っていた。

龍騎士 それはとつくに滅んだとされる存在。太古のとある民族のみが持つ、龍を操る力の下になることが出来るもの

なのに彼は堂々と龍騎士を名乗る…怪しくない訳がない。

一方で既に一月に差し掛かうかと言う牢獄生活。自らの行く末に不安が全くないと言えば、それもまた偽であつた。

そして、この手紙の内容が真であると判明したのは、それから三日後だった。

朝早く、例の兵士が牢の外からゲシヒテを起こした。

「おい、起きろ！」

その声にゲシヒテが目覚めます。そして、兵士の方を見ると彼は鍵を開けようとしているのが見えた。

鍵を開けると、牢の中に首だけをつつこんで、

「ちよつとこつち来い！」

と、言った。

「お、ついに釈放か？」

そう言いながら彼が牢の入口側に近付いていく。すると、

「腕を出せ！」と、兵士が命令するので、両手を前に出したところ…

ガチャリ

彼の両手には頑丈な手錠がかけられた。

これもまた、特殊な力により、かけられた者の黒魔法を封じるものであった。

「よし、出る！」

彼は、こいついつまで偉そうにしてるんだよ、と思いがながらも、兵士に促されて外へでた。

ゲシヒテは当然、やっと外に出られると思っていたのだが、何故か手には黒魔法を封じる手錠。

それに、こつちはいつもの出口じゃないような…。

「あ、あの、オレは釈放されるんじゃないのか？」

そんな彼の質問に兵士は相変わらず躊躇偽味の偉そうな口調で答える。

「何言っているんだ！むしろその逆だ」

「え？」

「いまからおまえの死刑が執行される。」

え？

死刑？

「ふふっ。参ったな。これはルートヴィツヒさんを信じるしか亡
いつてわけだ。」

ゲシヒテはそうつぶやいた。

「そういえばラボーデ？あいつもオレと同じ……」

「当然だ、この後すぐにあいつも死刑台へ連れて行く。ふふっ。

二人並んで死んでもらうってわけだ。ざまないな！」

（おいおい、マジかよ……）

頼みの綱はルートヴィツヒとか言う謎の男。

何者なのかもわからない。

恐らくはゲシヒテの味方である（と信じたい）存在……。

王は御乱心……。

死刑台の麓にたどり着くと、ラボーデがそこにいた。

「よお」

「……おお、まあ久しぶり。まさかこんなことになるとはなあ」

「ああ。『羽』を手にいれたつてのに、死刑だなんてな」

それ以上の会話をする暇もなく、二人は後ろの兵士に促され、丘
の上へのグリーンマイルを昇って逝く。

この国の死刑台は丘の上にある。

所謂絞首刑的なやり方で。

丘の上の空中に迫り出した板の上に首に縄をかけて乗り、官吏が
紐を引くと床板が開き、受刑者は落ちながら首が縄に掛かると言う
わけだ。

丘の上からは街が一望出来るが、その景色を楽しむ余裕があるの
は、相当なつわものだろう。

二人は板の上に乗る。龍騎士未だ来ず。

やっぱりいたずらか何かだったのかと思い始めたゲシヒテ。

街の景色を眺めながら、王の為に生きて来た半生を思い出していた。「ふふ、ただのネジ巻き人形…」

そして、『ちよつとのへマ』でその王に殺されようとしている。

ネジ巻き人形の末路…。

今、足板が外れ、二人は空中へ出た。

ロープを首に掛けたまま…。

首にかかる衝撃を思い思わず顔をしかめる二人…。

しかし、なかなか首に死圧がかからない。

…

…

…

二人は自由落下する。

さすがに変に思っただボイデは上を見上げた。すると、自分と共に落下しているのが見えた。

ロープは切られていた。

その時、ゲシヒテは下を見ていた。

下に町並みは見えなかった。

大きな翼龍が彼と街並の間の空を覆っていた。

陰界、コ・プロイス、シルム歴137年春の月

街を覆う翼龍。

空を落ちる二人。

そのまま翼龍の背に吸い込まれて行く。

着地。

銀色の龍は動じることなく、ふわり、ふわりと翼を上下させ、高度を上げ始める。

そして、二人共に知らぬ何者かが、銀色の背に着地した刹那、龍は一気に高度を上げ、大空へ飛び立って行った。

処刑台の横の官吏達は、その様子をただただ眺めていた。

龍を実際に観たことのある者は誰もいず。驚きの声を上げることすら。

大空に吸い込まれて行く龍は、次第に姿を小さくし、やがて、消えて行く…。

龍：それは古代、龍騎士と共に既に滅んだと言われる存在。

異大陸に野生として生きているとの噂もあるが…。確認した者はいない。

いずれにせよ、人の住む所に現れた記憶や記録は、少なくともシルムに入ってからはない。

空。

着地した体勢のまま仰向けになっているゲシヒテの目には、黒ず

んだ青空が見える。

この陰がなかったらこの空はもっと美しく生えるだろうか…。それともあまりな青さにかえって興醒めするだろうか…。

そんなことを、彼はぼんやりと思っていた。

「…やはり、私の不安は杞憂とはいかなかったようですね。」「何者かが彼に話しかける。」

ラボイデとゲシヒテが起き上がって声の方に目を向けると、白いローブを着た男が立っていた。

「こんにちは。お二人にお手紙さし上げた、ルートヴィツヒというものです。」

その服は白魔族の一般的な服であったが、白魔族を知らない彼らには知る由もなかった。

「りゅ、龍：騎士？」

「はい、そうですか。」

疑いようもない。実際彼が龍を操っていないのならば、二人が生きている筈はないのだから。

「まあ、少々派手な助け方をしてしまいましたが、龍族の視力と龍の素早さを考慮すると、下手に私が城に忍び込んだりするよりは、ああするのがベストかと思ひまして。実際成功しましたしね」

「…でも、龍が現れたことは、きつと騒ぎになるぞ？こんなことは近年ではなかったことだからな…ご存じかどうかはわからないが、我々の国では、龍も龍族も滅んだということになっているからな。」

「あなたたちは古代の龍族の末裔なのか？」

「そうです。私たちはあなたたちとは交流を絶ったものの、現在に至るまでしかと存続しています。もちろん龍達もね。」

「しかし、一体どこに？我々は空間を自由に移動出来るから、誰も訪れたことのない地は、この世界にはあまりない筈…」

「いや、我々の空間移動には最低限の情報が必要だから、ひよつとすると、我々が全く感知していない場所に、まだ未開の地があつ

たのかも……」

ラボイデとゲシヒテの言葉にルートヴィツヒが答える。

「そう。あなた方はまだ全世界を知っている訳ではありません。少なくとも、私たちが住む島に、黒魔族が訪れたことは、恐らくありません。」

ルートヴィツヒは言葉を続ける。

「……実は、私たちの島は、私たち独自の術に依って、特殊な結界を張っています。これは上次元操作能力を持つ私たち特有のもの……」

「……しかし、それがまたどうして我々なんかを助ける為に現れてしまったんだ？ 問題ないのか？」

ルートヴィツヒは少し間を置いて言った。

「……普段ならばこのようなことは大問題ですし、我々とは無関係のあなた方を助ける為にこんなことをすることはもちろん無いのですが、今、こんなことは比べ物にならない程の問題が、全『世界』レベルで起こっています。」

まあ、『今』って言う言い方が適切かどうかは、また微妙ですがね……そう言ったことについては、私たちの住む国に着いてから詳しくお話ししましょう。あと、二時間程で到着します。あ、そうそう。少なくとも話を聞くまでは、魔法で消えたりしないで下さいね。私たちは危害を加えるつもりはないですし、今、あなた方が国に戻ることは、双方にとって、最悪の選択に違いありませんから」

最後に、信じていますよ、と言うと、ルートヴィツヒは目線を前に変え、龍となにやら会話を始めた。

その後少し向きを変え、太陽と真逆の方向へ進む。

直下は海。

黒魔族は船をあまり発達させておらず、遠洋（と思われる）のこのあたりに船はいない。

ルートヴィツヒの云うとおり、あれからほぼ二時間で龍は高度を下げ、ある陸地に着地した。

空から見える限りだと、ここは少々大きめの島と言った大きさの陸地のようなだった。

「着いた。さあ、降りてください。」

ルートヴィッヒが二人を促す。

「此所が龍族の住む国なのか？」

「そう。僕らの住む国、コ・プロイスです。今日はもう夕方ですから、総長に軽く挨拶だけして、明日詳しい話をしましょう。」

龍が降り立ったのは何か石造りの広場のような所だった。

二人は龍族の役人の様な格好の男に誘導され、コ・プロイスの街並を歩いて行く。その後ろに、ルートヴィッヒもついてゆく。

「この街はコ・プロイスの首都、カピトゥレーベです。」

首都は非常に三次元的で、全体として建物は塔のように高く、人々は地上を歩いているだけでなく、大小様々な龍に乗り、空中を移動していたりもしている。

「随分と発達した街だな。」

「龍は普通に移動手段として使われているんだな」

「はい。龍族は幼少期から自分専用の龍を育て、生活を共にします。ま、私たちが先ほど乗って来た龍は、長距離移動も可能だし、戦闘能力も高い政府の特別な龍で、全てがあんなに巨大な訳では無いですが」

確かに、あのサイズだと街の中ではむしろ邪魔だろう、とゲシヒテは思った。

一行は街の中心部の一際高いツインタワーへ向かって行く。

「あの高い建物は？」ラボイデの問いに、ルートヴィッヒが答える。

「あれは政府関係の施設が集まっているルピナスツインタワーと云います。議会も、総長他役人の住家も、各部署も、そして、あなた方が今夜お泊まりになる部屋もあの中にあります。」

…というわけで僕らはルピナスタワーの17階の来賓用の部屋へと連れて行かれた。

「さて、あなた方とは我々の長と会談をしていただくことになりませんが、今日はお疲れのことと思いますので、会談は明日ということに致しましょう」

その後彼は食事や、用があつたときの連絡方法など簡単な説明をした後、二人を置いて部屋を出て行った。

「なんだかよくわからないが、助かったようだな。…しかし、王が本当にオレ達を処刑しようなどとはな」

「…ああ…正直裏切られた気分だよ…今迄さんざん王に尽くして来たはずだったのに。おれもラボイデも…なあ、若い時から城に仕えていたものな」

「…しかし、これからどうなるんだろう。龍族は何をしようとしているんだ…」

「さあな、しかし、どうせもう国にはかえれないだろうからな。助けてもらったんだし、オレは彼らにつくつもりでいるよ」

窓の外では相変わらずたくさん龍が列をなして（空中でも道路の様に飛行する方向がある程度決まっているようだ）飛んでいた。

17階は彼らの城の一番高い所よりもずっと高く、下には豆つぶのような人が歩いているのが見えた。

龍を空中を飛ぶ自動車なんか置き換えるとそれは皆様の想像する未来の都市のような光景だ。

「さて、あなた方とは我々の長と会談をしていただくことになりましたが、今日はお疲れのことと思いますので、会談は明日ということに致しましょう」

その後彼は食事や、用があつたときの連絡方法など簡単な説明をした後、二人を置いて部屋を出て行った。

「なんだかよくわからないが、助かったようだな。…しかし、王が本当にオレ達を処刑しようなどとはな」

「…ああ…正直裏切られた気分だよ…今迄さんざん王に尽くして来たはずだったのに。おれもラボイデも…なあ、若い時から城に仕えていたものな」

「…しかし、これからどうなるんだろう。龍族は何をしようとしているんだ…」

「さあな、しかし、どうせもう国にはかえれないだろうからな。助けてもらったんだし、オレは彼らにつくつもりでいるよ」

窓の外では相変わらずたくさん龍が列をなして（空中でも道路の様に飛行する方向がある程度決まっているようだ）飛んでいた。

17階は彼らの城の一番高い所よりもずっと高く、下には豆つぶのような人が歩いているのが見えた。

龍を空中を飛ぶ自動車なんか置き換えるとそれは皆様の想像する未来の都市のような光景だ。

コ・プロイス、wing-free:55年目

次の日、二人は朝食を済ませた後（二人にとって幸いなことに、食生活はそれほど二人の国と違いないうだった）、ラボイデとゲシヒテはルートヴィツヒに案内され、総長と呼ばれる存在と会談することになる。

二人が通されたのは泊まった部屋よりも更に高い所33階の一室。そこは更に荘厳立派な作りであり、二人はまるで王に謁見する間に入ったかのように、自然と背筋を伸ばした。

二人にはイスが用意された。（それもまた、王が座りそうな立派のものだったが）

いささか大き過ぎる机が二人の前にあり、その向こうには、美しいドレスを着、輝かしいアクセサリを着けた、綺麗な女が、二人と向い合うように座っていた。

つい見とれている二人に向かってその女が口を開く。

「はじめまして、私は第16代コ・プロイス総長、メリダセルフィアと申します」

「あ、あなたが総長……」

二人は驚きを隠せないようだった。

「あ、そうですね、国のトップが女と言うのは、二人の国ではありえないことなんでしたね。この国では、むしろ女性になることが多いくらいなんですよ」

ちなみに総長は、代々決まった一族になるわけではなく、その度毎に選挙で決められるとのこと。任期は10年。

「まあ、今日は両国の政治体制を比較しようとしているんじゃないので、この話はおいとして……本題に入りましょうか」 メリダは気持ち姿勢を正して話を切り出す。

「本題というのは他でもなく、あなた方の国……とりわけ王さまのやろつとしていえることについてです。あなた方はまず、彼が赤い」

羽』にご執心なのはご存じですね？」

「…はい、オレ達もその手伝いをさせられましたから」

「ちよつと法外というか…良くない手段を使って手を入れようとして、ヘマをしたために、あんな風に処刑されるところだったんです」

「なるほど。では、何故彼があのか『羽』を欲しがっているかはご存じですか？」

「…いえ。それは全く…正直奇妙だったんですよ。もう十五年になりますか…急に王は『羽』を手に入れる為だと言って、世界を渡る方法を研究しだしまして、当時はそもそも世界がいくつもあること自体、僕らは知らなかったんですがね…」

それで何やら…これは僕らもわからないんですが、異界の存在からの伝授によつて、世界を渡る術を身につけたらしいのです」

ラボイデは過去を思い出しながら、霧の世界のことなんかも考えながら言った。狂った研究員の様子なんかも、彼の頭の中によぎった。役職上、人を殺めたのは初めてではないが、彼らを殺したことには、言い様のない後悔の念が、心の中にずっしりと存在していた。

「…そうですか。実は、王が『羽』を集め出したのは、我々龍族の伝説があなた方の王に流れ、信じこんでしまったからなのです」

「…？ でも、我々黒魔族の国とこの国は今迄交流があつたのですか？」

「ありません。国の長同士ですら、両国はもう永い間隔てられていました。実はこちらとしてもあなた方の国の周囲には、例えば龍に乗つてでも近付かないように決められていたのです。

いえ、そう規制するのは難しいことはありません。

我々の国の間には、深く広く黒い海があります。

あれを渡り切れる龍はそう多くなく、そう言つた龍は私直属の者たちが管理しています。その利用には私の許可があることになっていますし、私が許可を下すのは、国の要人がよほどの必要に駆られた時のみでございますから、遠洋へ龍で出ることはめつたなことでは

不可能なのです

あ、話がそれましたね。とにかく、私たちはかなり昔からお互い隔てて生きてきました。今回王に伝説が伝わったのも、そしてそれを真実と信じさせたのも、第三者が絡んでいると見て間違いないようです」

「第三の人間…」

「恐らくそれは異界の存在。恐らく彼に世界を渡る方法を教えたのと同じ人間なんじゃないかと思っています」

「ところで、なんなんですか、その伝説と言うのは」

「はい。実は『羽』は各世界に十二存在すると言われ、それらを全て集めたとき、永遠の繁栄を約束される…と言うものです。この繁栄というのは、自身の不老不死、権力的、富、名誉等々人が欲しがる全ての繁栄をさしているとのことです」

「…なるほど。如何にも王が望みそうなものだ」

人の欲望は底なしと言うことだろうか。

「問題は、この伝説は真実…少なくとも大いにそれに近いということです」

「ほ、本当なんですか…？」

「はい。この『羽』はそれぞれ大いなる力を持つもの。場合によつては一国の、いいえ、一世界全体のエネルギーにすらなり得るものなんです」

「まさか、確かに光るのは不思議ではあるが、この『羽』にそこまでの…」

「確かに信じがたいことではありますが、この国がいまこうあること自体がその証拠です」

「…と言うと？」

「…この国は、『羽』のエネルギーを抽出し、利用して発展してきたのです」

「ええ？」

二人は狐どころか、狸にもつままれたような顔をした。実際は夢じゃないかたしかめるため、互いが互いをつまんだ。

「尤も、今は別のエネルギーを発する方法が発明され、『羽』は国家機密の倉庫に大事にしまわれています。

それです。そんな強い力をもつものを一人が独占すれば、『世界』達全てを支配するも同然なのです」

「…なるほど。しかし、この国は何故『羽』を使わなくなってしまったんですか？『羽』のエネルギーが枯渴したのですか？」

この時メリダの目はどこか遠くを見ているようだった。

「…いえ。あの『羽』のエネルギーは、少なくとも我々人間レベルでは永久的と言ってよいでしょう。しかし、私たちはあれを封印することに致しました。

理由は、いまでは二つあります。

一つは事後的に生まれた理由ですが、あなたの国の王が狙っていることがわかったためです。あなた方の国に奪われることのないようにするため、人の目に触れないように封印することにしました。先ほども言ったとおり、『羽』は現在、国家最高レベルのセキュリティでもって、厳重と言う言葉では不十分な程厳重に保管されています。

「…でも、この理由は、先に述べたとおり事後的に発生したもので、本当は別にあります」

「…という？」

「あの『羽』自体が危険なものだからです。

あの『羽』は、人の心を引きつけ、惑わせ、壊してしまう力があるようなのです。長年私たちの国では、『羽』からのエネルギー抽出に携わる人々が狂乱したり、ひいては傷害、殺人などの事件が発生していました…これも国家機密の一つなので、口外は控えてくださいね…と言っても、国民もうすうす知っていることです。

…とにかく、その様な弊害があったため、エネルギーを自力で作

れるようになると、ただちに『羽』は人々の興味の届かないところへ封印したのです」

二人はその話を信じるに十分な光景を目にして来たので、特に疑う気持ちはなかった。

「さて、我が国は近年のあなた方の国の、特に王の動向を非常に危惧しています。もちろん、いまの『羽』に関連して、です。

まず、最も身近な危惧として、『羽』を求めてあなた方の国が攻め込んでくること。現在はこの国の存在はわかっていないので、切羽詰まっている、という程ではありませんがね。

そして、長い目で見ると、『羽』が一所に集まって王が全『世界』を支配してしまうこと。王が聖人君子で、世界の民は幸せに暮しました、というハッピーエンドならば良いのですが、現実の人間は慾深いもの…実際は、王はその力を欲しいがままにするでしょうね…。そして、最後に『羽』にあてられて王が狂乱したり、或いはその家来などが『羽』にあてられること…その結果が国の内乱で済めば、あなた方には気の毒ですが、私たちとしては無傷で別に良いのですが、内乱の中心が、エネルギーの源である『羽』ですから、そのエネルギーの使われ方によつては、一世界など簡単に滅びます。…と、私たちが『羽』を拒み、あなたがたの王を不安に思ふ理由はこんな所です」

二人が一気に語られたメリダの話を理解しきるのに多少時間を要した。

全ては二人にとってねみみにみみず。

しばらく空を見上げるように考えた後、ラボイデが質問する。

「…『羽』のことは概ね、大旨理解しましたが、して、貴方は…あ、恐らくは貴女の指示だと思っんですが…あなたは何故私たち二人を助けてくれたんですか。

いえ、もちろん命を助けていただいたことには感謝の言葉もあり

ませんが、そのせいで、黒魔族や…ひいては王にもあの巨大翼龍と共に龍族が姿を晒してしまつては、今迄お互い隔たつた意味がなくなつてしまふし、王は最悪こちらに積極的に干渉してきますよ？
そこまでして、何故私たちを…？」

「…ええ。もちろん。あなた方を助けたのにはわけがあります。
…が、話には順序というものがございますので、お聞きくださいね」
にこりとしたメリダの顔は美しいと言うよりはかわいかった。

それは二人も話を聞かないわけにはいかなかった。

「…まず、龍国が何故、そちらの動向を知るようになったか、という話をする必要があるでしょう。私たちを隔てた見えない壁が崩れたのは、あなた方が世界を渡つたその時です。あなた方の世界を渡る方法は、私たち龍族に伝わる『夢渡』と言うものと同じです。
…早い話が、誰か、恐らくは異界の誰かが私たちの『羽』の伝説と『夢渡』による世界渡航術をあなた方の王に伝えたのでしょうかね。

それで、とにかくこの『夢渡』なんです。誰も彼もが世界を渡つては、面倒が起こるのは目に見えています。ですから、国直属の機関を頼つてしか出来ないようになっていきます。彼らは『夢渡』を実行すると共に世界渡航者を管理する義務を追っています。

…それを遂行するため、彼らはその渡航を管理する特別な機械を持つていて…この辺りは詳しくは言えないのですが…とにかくいつこの世界の何処からどの世界のいつの何処へ渡つたかが分かるのです。正規の渡航も密航も含めて…但し渡航者がこの世界の成員でなければいけないと言う条件がありますからね。

その機械によつて、そして、私たちの調査によつて、あなた方が霧世界へ渡つたこと、そして、『羽』を手に入れたことはわかつたのです。

ここまでではいいですね？」

二人は頷いた。実際に二人は霧世界に行き、確かに『羽』を獲得していた。…三人を殺し、『陰』を持ち込んでしまったことももちろん忘れていない。

「では、ラボイデさんの質問に答えます。

まず、黒魔族が『羽』を手に入れたことで、先に言った危惧がかなり具体化してしまいましたので、最早お互い不干渉でやりましょう。なんてことには行かなくなつたのです。こちらがいくら干渉しないようにしたつて、近い将来、あなた方の国が私たちの『羽』を攻め込んでくることはもう目に見えています。

従つて、最早不干渉を守る意味はなくなりましたので、ある手段を使つて、私たちは黒魔族の動向を調べていたのです。その過程で、『羽』を手に入れた二人…あなた方のことですよ…二人が処刑台に立つことを知りました。

そこで、私たちは…私たちがいま立てている『計画』の遂行の為に、あなた方の力を借りようと思つたのです」

「ある計画とは…？」

メリダは計画について話す前に一つ呼吸を置いた。そして、話をつづけた。

「『私たち』の間では、『r e - b 計画』と呼んでいるのですが、端的に言いますと、12の『羽』を集めて処分してしまおうというものです。

『羽』は確かに多くの世界で力の源になっていますが、同時にそれ以上の弊害もあります。『羽』に頼つて生きることが、目先の発展を掴む代わりに、遠い未来の破滅を決定づけるに等しいのです。

従つて、このままでは、12の…或いはそれ以上の世界達が破滅の道を歩むことになります。

だから、幾つかの世界渡航可能民族…私たちの間ではCTPと呼んでいるのですが、CTPが同盟を組んで『羽』の回収を進めているのです。

…一つの民族が回収を進めてしまつては、いまの黒魔族の王のようになる危険がある為、互いが互いを監視しながら計画を進めます。

そして同時に、余計な争いを避ける為、全てのCTPと『羽』を所有する世界民族達がこの同盟に加わり、計画を共に進めよう運動を展開しているのです。

…正直に言いますと、実際はなかなか難航しているのですがね。世界によつては『羽』は信仰対象になつていたり、今まさに発展中の世界では『羽』は欠かせない存在…あなた方言う『陰』のような存在になつていたりするからです。

下手にこの話題を持ち込んで、世界を二分し兼ねない思想派を形成することなんかもありましたね…。

しかし、必ずしも積極的手段を使わないにせよ、私たちは少しずつPre-b計画を進めていくつもりです。

そして、いまの話からCTPとして黒魔族にも同盟に参加して欲しいと思つていることはおわかりいただけたかと思いますが。更に言うと、龍族としては、黒魔族を組み込んで行かないと、具体的な危険に晒されることになりかねないので、是が非でも手を組みたいと考えています。しかし、王があの状態ですから、武力を使わない限りいきなり同盟に組み込むことはかなり難しいでしょう。従つて、良識が比較的ありそうな、黒魔族の協力を得つつ、漸進的に同盟への参加を働きかけようということになつたのです」

「なるほど。それで、オレ達が…」

「…はい。あなた方は『羽』に起因した人間の豹変を見えていますし、高位で学識もあり、王の使命を果たしながら死刑宣告を受ける立場でしたから、恐らくは王のやつていることに疑問を持ち始めていると思つたのです。

そんなあなた方は、私たちが今強く欲している存在だったんですよ。

…とにかく、なんとか戦争という最低の筋書きを回避したいのです。

戦争になれば、…かつてこちらのみに『羽』があつた頃ならば、間違ひなく龍族に分がありました。が、今となつては互角と言う所で

しょうね。戦争において互角と言うのは生じうる最大の損害が双方に出る、ということです。

先ほども言いましたが、両民族がなくなることも充分考えられます」

「なるほど。話はわかりました」

「協力して、いただけますか？」

二人は何か大きな渦のようなものに巻き込まれるような感覚に陥る。

それは逃れられないもの。いや、逃れる必要もないもの。

人は結局、それに流されながら生きるしかないってことだ。

どちらともなくそう感じていた。

「承知しました。オレ達はその同盟に加わり、そして、やがては黒魔族全体があなた方に協力するよう働きかけていきます」

ゲシヒテがそう告げた。

「よかった。あなた方は頼みの綱でした」

「それで、具体的に何をすればよいでしょうか」

「はい。実は明後日に r e - b 計画推進委員会の会議があります。そこでは同盟に加盟する各民族の代表者が集まります。そこであなた方の紹介とこれからの方針を決めていくことになるうかと思えます。ですから、明後日の朝まではどうぞ気楽に過ごしてください」

メリダとの話はこれで終わりだった。

二人は丁重に挨拶した後、部屋を後にした。

廊下の窓から外の景色が見える。

33階の高さにはさすがに幹線『空路』は少ないらしく、それ以上の空中を滑る龍は少なかった。

眼下には列をなす龍が地面との間に幾重にもある。

どの龍も、どの列も、決まった方向へすきつと流れていた。

二人は広い廊下をエレベーターの方へ進んでいった。

A - 1451 ヴァイスナハト

その日、ヒロとジュナはホテルのラウンジにいた。

ヒロはブラウバーグコーヒーを、ジュナは虹色のジュースを飲んでいた。

二人とも、この世界にはだいぶ長い間いる形になっていた。このホテルのラウンジは、最早彼らの住家の一部に等しかった。

ヒロが時計を見る。

長、中、短、三つの針がそれぞれ赤、緑、白を指していた。

「もう、そろそろだな」一人ごとのようにヒロが言った。

それから、一色程経った頃、二人の目の前に、黒いネクタイ、黒いシャツの上に黒いスーツを羽織った二人の人間が現れた。

その格好だけでも、ヒロが判断するには充分だったが、更に胸についた円の中に鴉が描かれたエンブレムを見て、確信した。サイトで見たトレードマークだった。

「鴉丸同盟の方ですね」

「ええ、よくわかりましたね」

敢えて流して。

「あなた方が代表者ですか」

というヒロの質問に対して、

「…いえ、我々はあなた方を代表者の下へ案内すべく参りました。私はパタ、こちらはハイドと言います」

よろしく、とハイドが頭を下げた。

パタなのにもう一人はハイド…？

「それでは殺鼠く、こちらへどうぞ。私たちの本居地へ案内致します」

パタはそう言ってヒロとジュナを促した。

たどりついた先は、私用宇宙飛行機の発着場だった。

いくつもの飛行機がそこには止まっていたが、一つだけ真っ黒のそれがあった。

「あの黒いのに乗るんですか？」

ヒロがパタに聞いた。

「はい、よくわかりになりますね。以前も私たちの招待を受けているのですか」

敢えて流して。

二人は簡単なチェックを受けた後、問題無しと判断されたようで、飛行機に乗り込んだ。

続いて操縦席と助手席にハイドとパタが乗り込み、飛行機は滑走路へ向かった。

「三周程度の長旅になります。しばらくおくつろぎください。そこに簡単なお飲み物等も御用意させていただきましたので、どうぞお好みにあわせて召し上がって下さい」

ヒロの席の隣に謎の透明な素材で出来たグラス、その横には四つのボタンと液体の出口が付いた機械があった。

ボタンの上にはそれぞれ、ブラックコーヒー、黒烏龍茶、黒葡萄ジュース、そしてミルク……と書いていた。ミルクはミルクのこのようなのだ。

やがて、飛行機は離陸し、スペース空間を滑空し始めた。

ヴァイスナハトの地球周辺の宇宙空間はヒロの住む世界のそれと比べるとかなり明るい。もちろんElwinaの光の為である。

しかし、飛行機はみるみる内に地球から遠ざかって行く。それは同時に星の周辺にある、Elwinaや居住区からも離れていくことを意味する。

少しずつ、未開の、本当の『宇宙』へ向かって飛ぶ。

空は次第に色を『失って』逝く。暗黒に近付いて逝く。

「こんな果てに本拠地が？」

ヒロが不安になってパタに聞く。

「はい。私たちの本拠地は、可能な限りElwinaから離れた所にあります。鴉は黒を好みます。黒より暗く、です」

やがて辿り着いたのは漆黒の建造浮遊物。一か所だけ飛行機の発着場らしき入口が開いていて、四人の乗る機はそこへそこへと近付いてゆく。

中には滑走路があり、間もなく機は着地した。

「さあ着きました。いま扉を開けますので、お降りになってください」

二人は、滑走路からつながる通路へ案内される。外見とは違って中は普通に明るく、先ほどのホテル同様、清潔さを感じさせた。

この施設はかなり広く、ヒロとジュナは、案内なしには再びここら出ることは不可能に感じられた。

しばらく歩いた後、黒い大きな観音開きの扉の前に到着する。

扉の横にはスピーカーと、何かセンサーのようなものがあり、パタはそれに手を当て、何かを話しかける。

やがて、扉が開き、ヒロとジュナは中に招かれた。

中は果てしなく広い部屋。果てしなく高い天井。真ん中に誰も座っていないイスが二つ。

その前に、向かいあうようにもう一つイスがあり、そこには誰かが座っている。

その『誰か』は真黒なローブを着ていた。そのローブは鴉丸同盟によく合っていた。つまり言えば、黒魔族のそれに違いなかった。ちなみに黒を羽織る本人以外の四人全員が黒魔族を知らない。彼らは本来『交わるはずではなかった』存在だった。

流暢に流動していた世界に一の羽が舞い落ちるまでは。

「はじめまして。私は鴉丸同盟の代表役。ゲシヒテと言います。よろしく」

三人は互いに軽く会釈した。

「君達は、私たちの鴉丸同盟に興味があつて来たんだね」

「はい。僕がヒロ、彼女がジユナ、と言います」

よろしく、と再度軽く会釈した。

「ふむ。君達が協力の意思を持つてくれたことは代表者として非常に嬉しい限りだ。もしよかったら、動機のようなものを聞かせてくれてもいいかな」

ヒロは少しだけ考えたが、一応答えは用意してあつた（と言うか、それは実際に理由の一部であつた）。

「元々、世界が無気力に陥っていることは知っていたのですが……」
ヒロは長い話をした。病院で入院したこと。その時に老人が突如自殺し、自分達に大金を託したこと、そもそもそのお金でもって地球外に来ていること……。図書館で調べた『羽』のことや、実際暮しみて感じたこと……。もちろん彼らが別の世界から来たことは言わなかった。

「なるほど。君達は私たちの活動の主旨を充分理解しているようだ」

「Elwinaは確かにこの世界の発展に大きく貢献して来た。しかし、もうその役目は充分果たしたと思います。これからは人間が自ら努力して生きていくべきなんじゃないでしょうか」

「そう。世界は既に充分に発達しきつている。今ならば人間は自ら必要なエネルギーを自ら作り出して、自らの力だけで発展していくことが出来るのだ。にもかかわらず、空にElwinaが存在しているのは、過保護な親と同じで、正直あまりいい影響を人間に与えない」

「無気力感から来る鬱はその端的な形と言う訳ですね」

「しかし、Elwinaの撤去運動はかなり難航しているのが実情だ」

「どうして？爆弾か何かで壊してしまえばいいじゃない」

ジュナの方を向いてゲシヒテが答える。

「…もちろんそう出来れば話は早いのだが…しかし、二つの理由からやはりそうは出来ないんだ。

一つは、私たちは別にテロ集団ではない。カルト宗教でもない。れっきとした根拠の下、平和的にElwina稼働停止の必要性を主張する集団、一国の政治に喩えるなら政党に近いものだ。だから、もちろん武力は使おうとは思わない。

倫理的に間違っているのは明確だし、その様なことをしては事後的な弊害があまりにも大きくなってしまふんだ。

だから、Elwinaの稼働停止は、きつちり地球首脳会議で取り決め、その後の人類の発展の方向性や具体的方法などを準備した後に稼働停止へと進めていかなければならない。

第二に、図書館で見ただろうが、Elwinaの核になっている『羽』は超強力なエネルギー体だ。従って、それに爆発物やそれに準ずる破壊兵器を用いるのは危険極まりない行為だ。それだけで『世界』が消えるような事故が起きかねない。

…繰り返すが私たちは別に世界をスクラップにして神と共に新しい世界を作りましよう的なアブない考えを持っているわけではないんだ。

…その辺りを誤解している人はいまだ数多くて、なかなか困っているんだが…」

「難航している、というのはそれが理由ですか」今度はヒロが尋ねる。

「そうだな。その誤解ゆえ議会での理解をなかなか得られないってのはある。しかし、難航するのにはもっと大きな理由があると、私は思っている」

「と、言いますと？」

「君達を感じないだろうか。あの光は単なるエネルギーと言う意味での力以外に、何か人を引きつけるような、安心させるような力があることを」

それは『羽』の光の力。

人の心を、理屈よりずっと曖昧な階層で、思考よりずっと原始的な部分で共鳴させる、魅力…いや魅力よりももっと穏やか…しかし、強い感覚。

「…あたしは感じことがあるよ。あの光が良くないものだと知ってた今でもね…」

ジュナはなにかも手に取るような仕草をしながら云う。

「なんだろうな…光がなくなること…明るくなくなること…不安のような、暗く…いや暗いのはあたりまえだけど、何か冷たいようなものを感じる…。もちろん『想像でしかない』んだけどね…まあ実際は人工的な方法で光を作るんだろうから、真っ暗って訳じゃないんだろうけど、やっぱり何かね。

なんだろう、子供の時に置き去りにされたような…仲間外れにあるような…それに似た怖さがあるな」

彼女は想像だというが、本当は彼女は『ここ』に来る前に実際に感じていたことだった。

永久に等しい『永い夜しかない世界』で…。

「そう、やはり、『そう言う誤解』も一つの原因ではあるのだろうな。君達は天文学にはそれほど詳しくないのかね？」

二人は首を横に振る。

「ふむ。実はこれは何故かあまり知られていないことなんだが。

この世界にはちゃんと『世界を照らす存在』が他にあるんだよ」

「ええ？」

ジュナは非常に意外だ、という声を出した。ヒロも一応そう言うリアクションをとった。

しかし、ヒロにしてみれば、彼が住む『地球』にしてみればそれは普通のことだ。よほど高い緯度にはないかぎり、どんな季節にだって、一日の何時間かは、太陽というものが世界を明るく照らす。

「なぜこのことが、これほどに科学が進歩していながら、信じてもらえないのか謎なんだが、宇宙には自ら光を放つ星がたくさんあ

る。

そして、私たちの住む星の近く…近くと言っても私たちが飛行機で行ける距離ではないが、その放つ光が充分届く距離にその光る星が存在する。従って、Elwinaがなくなったとしても、その光によって一日の大半は今同様に明るいんだ。…まあ、自転の関係で暗い『夜』ってやつも来るがね。

人々は、Elwinaの為にあまりにも空が明るいせいで、そんなこともわからないんだ。我々を照らすものは、ちゃんと存在するんだよ。Elwinaなんて言う人工物なくしてもね」

「…そうなんだったんだ。知らなかったな…星が世界を照らすなんて」

「…先ほども言ったが、なぜこのことがあまり知られていない、或いは信じられていないのか、本当に疑問だ。

この事実が広まれば、私たちの目的も果たしやすくなるだろうに…」

そうゲシヒテはつぶやいた。しかし二人は、そんな簡単な問題ではないような気がしていた。

『羽』の光は特別…例えばそれに代替する光が、自然なる光が存在するとしても、やはり、多くの人間が、『羽』にとりつかれるのではないだろうか…。

「…ところで、仮にElwinaを停止させたとして、『羽』はどうやって処分するんです。

さっきの話を聞いた所、破壊するわけにはいかなそうですが…」
「それについては、また考えてある。いまはまだ詳しくは言えないが、あれの処分には、コツがいるんだ」

ヒロはさっぱり解らなかったが、それ以上は語ってくれなそうだったので、更に質問することは避けた。

「さて、実際の活動だが、しばらくは地味なものしかないんだ。まだ議会で勝負するには足場が不十分だからね。二人は明日から、

更に協力者を募って欲しい。主に政財界の有力者に会って、PRをしてもらうことになるだろう。詳しい連絡はメールですから、とりあえず今日はここまでと言つことで」

二人はその後、再びパタとハイドに案内され、ホテルへの帰路についた。

A - 1451 ヴァイスナハト（後書き）

「殺鼠く」誤植ではございません

A - 1451 ヴァイスナハト

その後、二人はまず、居住区に身を移した。

鴉丸同盟によって住処は提供され。しばらくそこを生活拠点にするようになった。

活動は、ゲジヒテの云うとおり、地道、という言葉がよく合っていた。

各地（地球内外の）で演説をしたり、ビラを配ったり、学者を通じて講義みたいなもの開いたりといったものだ。

テレビのコマーシャルによるPRなんかも頻繁に流されていた。

ヒロとジュナはまだ新入りなので、仕事は雑用が多かった。

ビラを作ったり、講義の会場設営をしたり、と言った程度のことだ。

もちろんヒロたちはそんな作業がやりたくて同盟に加わった訳じゃない。

しかし、同盟の加盟者に接することでE l w i n aに関して、何かしら情報が得られるんじゃないかと期待し、二人は積極的に活動に参加した。

しかし、実際には同盟の活動自体が結実し出す方が先だった。

そう。同盟が情勢を動かし始めたのだ。

同盟を支持する政党は世界のあらゆる国に散らばっている。これは世界全体に働きかけなければ実現しないプロジェクトだから当然だ。

しかし、前にも言ったとおり、人間のほとんどは、『光』をかかせないものと信じて止まないの、大抵はかなり少数派の政党となっている。

しかし、この度、とある議会で、鴉丸同盟支持政党が遂に与党に転じたのだった。

とある議会。それは宇宙連合議会であつた。

宇宙に居住する人々は、国と言うものには属していない。変わりに宇宙連合と言う特別な自治体に属している。

これは実務的には国とあまり違いはないのだが、当時の国々がお金を出し合つて発足したものであり、また永世中立であるため、国とは別個の肩書きがついているのだ。

その宇宙連合の国会にあたる連合議会で、鴉丸同盟の支持するノア党が、与党に転じたと言うわけだ。

これが世界全体に大きな影響を及ぼすことは目に見えていた。

なぜなら、宇宙連合はElwinaとつながりの深い自治体だ。

Elwina自体は全ての国の代表者が集まる、コンスルの管轄だが、やはり同じ宇宙空間に属しているため、より身近な存在であることは間違いない。

よつて、宇宙に関しての世論は、宇宙連合の意見が大きく影響を及ぼすのが実態なのだ。

「…ひよつとしたら、本当に議会の力でElwina停止つてこともあるかもしれないな」

ゲジヒテはニュースを見ながらパタに話す。

「遂に、という感じですね」

「…ああ」

ゲジヒテはガラス張りの天井に移る空を眺めている。

そこには沢山の星空が。

地球からでは見えない星空が広がっている。

「地球の人々がこの星空を見る日も、近いのかもな。しかし…」
ゲジヒテは少し顔を曇らせる。

パタは、

「しかし、なんです？」と尋ねる。

「しかし、まだ話が順調に進むとは限らない。億単位の人々の意見を一つにまとめると言うのは極めて難しいことだから……」

むしろここからが一番気をつけなければならないところだ……

ゲジヒテはそう言う。

「……なにか不安なことがあるのですか？」

パタは、思いも寄らない、と言う顔で質問する。

「世論の分断をナメてはいけない。世論の分断が国家内外の分断、対立につながり、やがては……なんてシナリオは歴史上に腐るほど散らばっているからな」

「……そして、この『世界上』にですか」

パタの言葉にゲジヒテは無言でうなづく。

「まず大事なものは、私たちはあくまで、出来うる限り穏健派で居続けることだ。ここで私たちが過激になっては、止めるものがいないからな」

「ところで、今回の成果の報酬は誰に？」

「そうだった。忘れていたよ。後でヒロとジユナを呼んでくれ。

重要な話があるんだ」

言うまでもなく、宇宙コロニーの居住区に住処を与えられた二人は、宇宙連合内で主に活動を行っていた。

この頃には、二人の仕事振りは評判になっていて、今回の功績も、二人にあると評するものは多い。

翌日、二人はまたあの暗い本部にやってくる。

「いつ来ても暗いな此処は」

相変わらずの星空を見ながらヒロが呟く。

「でもなんだろうね。用事って」

「さあ。まあ宇宙連合でノア党が与党になったことと関係あるんじゃないかねーか？」

「じゃあなんか貰えたりするのかな」

「…かもな」

話している内に二人はゲジヒテの部屋に到着した。

「こんにちは。お久しぶり…ではないか。ノア党の祝賀会にはいらしてましたものね」

「…ああ。まあこっちに来てくれ」

二人は案内に従い、そこに置かれたソファに腰掛けた。

「さて、まずは宇宙連合での君たちの活動。誠に精力的で実のあるものだった。

お陰で議会でも影響力を持ち始めているし、何よりも世論が動き始めている。本当に、宇宙連合支部の活動の成果だろう。

…そして君たちの協力は、その中でも大きなものだと思っている。本当にありがとう」

ゲジヒテは恭しく礼をした。

「それで、だが。どうだろう。宇宙連合支部は二人に仕切ってもらいたいんだ。大分多くが議会に行ってしまったからね。人手が足りないんだよ」

それはつまり、幹部になると言うことだ。

「しかし、良いんですか？ 僕らなんか団体の中じゃかなり日の浅い方ですが」

「なに、大事なものは年じゃない。むしろ、こういうのは未来ある若い衆がやった方がいいんだよ」

ゲジヒテは笑って言う。

今のところヒロはそれ程為になりそうな話をこの組織で聞いてはいない。

幹部になれば、議員なんかとの接点も増える分、『羽』についてなにかわかるかもしれない。

そもそもこの活動が実を結べば、『羽』の活動を止めることが出来るのだから、積極的に協力すべきなのかもしれない。

始めは、何かしら強硬手段に出て、『羽』を得るしかないだろう、そう考えていたヒロだったが、今では、この活動を通じて『羽』に近づくことを決して非現実的ではない気がしていた。

「わかりました。それではやらせていただきます」
それからというもの。

ヒロ達は自ら活動を企画する側に回ることになる。

次はどのような運動をするか。

ビラはどれくらい撒くか。

誰の講演を企画するか。

どんな話を聞いてもらうか、など。かなり忙しい存在になっていた。

あの日、二人は次回の第三居住区立での講演の準備を進めていた。地球の方では冬に当たる季節だ。しかし居住区は常に快適な温度が保たれているため、季節感はあまりない。

ヒロは事務所で7日後に講演を行う教授と打ち合わせをしていた。

「…では、話す内容は、大まかに言って以上のようなものですね」

「ああ。私の言いたいことが上手く伝わるといいね」

髭を生やした40後半の男がヒロに言う。

「大丈夫ですよ。先生は影響力をお持ちの方ですから。思いのままに話していただければ、きっと本意は伝わるでしょう」

ヒロはそう言うが。正直、彼はこの教授のことをよく知らない。

ただ、世界的に有名で鴉丸同盟支持者であることも有名であることだけは知っていた。（と言うか教えられた）

「そうだと良いね」

「券も早々と完売しましたからね。明日は大勢の方がやってきますよ」

その後、教授は一段テンションと声のトーンを落として言った。
「…そう。今や宇宙連合では鴉丸同盟に関心が集まり、支持者も増えつつある。だが…」

「…だが？なんですか？」

ヒロには全く見当がつかないようだった。

「こんな話は講演の前には不適切かも知れないが…君は今や同盟の幹部。やはり知っておいた方がいいだろうな。」

君は何故君がこの同盟の幹部に抜擢されたか知っているか？」

教授の意味深な質問に、正解ではないんだろなと思いつつ、ヒロは答える。

「ゲジヒテさんからは、僕らがこの同盟によく貢献してくれたことと、こういうのは、若い人がやった方がいい、と言うことを聞きましたか…」

教授はやはり、と言う顔で口を開いた。

「…まあ。それは確かにそうなんだが…いや、それはそれで理由の一部ではあるんだ。しかし、実はもっと大きな理由があるんだよ。今回幹部を比較的加盟してから日が浅く、若い君たちを選んだのはね」

と、其処まで話し終えたところで、ジュナが部屋に入ってきた。

「ヒロ。会場の方もセッティング終わったって。これであれば本番を待つだけ。」

あ、先生こんにちわ。打ち合わせは終わりましたか？」

教授はジュナに向き直り云う。

「ああ、今終わったところだ。そうだ丁度いい、ちょっとヒロ君に話そうとしていたことがあったんだが、君にも関係があるだろう話だから、ちょっとこっちに来て聞いてくれないか？」

…なに、ちょっとした年寄りの四方山話だよ」

ジュナはどうせ暇になったところらしく、断る理由もなかったで、空いているヒロの隣に座った。

「さて、話はなぜ君達が幹部になったかと云うところだが、君たちはこの同盟についてどんな印象を持つ？」

質問が漠然としていたので二人は答えに困ったが、やがてヒロが答える。

「そう、ですね…穏和と言つか、平和的と言う感じがしますよね。これだけ大きな目的を掲げていながら、あくまで民主的に目的の達成を目指しているのですから」

「そう。私もそこがこの同盟の素晴らしい所だと思っているんだよ。あくまで過激な手段に出ず、今回の催しのように、こちらの想いを伝えることで共感を得るような、ね」

まだ二人には話が見えてこない。

「…良い話だと思うんですが、それが何か？」

ジュナが首を傾げながら問う。

「いや、それ自体は、さっきも話したとおり非常に良いことだと思うよ。だからこそ、私もこのような講演をしようとしているんだただね、と言って教授は一つ呼吸を置く。

「…ただ、これだけ大きな組織担ってくるとね。その基本原理を維持して、同盟をまとめるのが難しくなってくるんだよ」

「というと？」

「つまり、…これは既に今実際に起きている話なんだが、『異端』が現れる危惧が日に日に大きくなっていくというわけだ」

『異端』という言葉聞いてヒロはようやく話がみえてきたようだった。

「…つまり、過激派が現れる恐れがある。って言うことですね？」
「正確には『恐れがある』のではなく、既にちらほら現れて来ている。まだ派閥と言うほどのものではないがね。」

正直あれがまとまり始めるのは時間の問題だよ」

「過激派：具体的にはどういうものが？」

「まず一番危険なのは、Elwinaの強制崩壊を画策している者。具体化には至ってないものの、そう言うことを口に出す輩は数人心当たりがある。」

また、政治的イニシアティブを非民主的な方法で得ようと主張する者。

こちらは結構いると聞く。潜在的な者も含めるとね。軍人あがりのような血の気の多い連中に多い。

いずれは『羽』を停止して、夜を取り戻そうと言う本来の目的を見失い始めているヤツも現れるかもな。人は権力には弱いもんだよ」

ジュナは言うまでもなく驚いた顔をしていたが、ヒロは、まああり得なくはない話だと、教授の話に耳を傾けていた。

「それで？そのことと私たちが抜擢されることと何の関係があるんですか？」

「問題は、異端児はまだ潜在的で表面的にはよくわからない可能性が多分にあると言うことなんだよ。」

ただ、傾向として、同盟に加盟している年月が長い人ほど、思想を自分流に吸収し変質させている可能性が高いんだ。

そして、加盟年月が長い人は、それだけ影響力もある。

だから、この先そう言った者を幹部にするのは、危険になってくる、と言うわけだ」

「なるほど。だから逆日が浅い僕らを選んだわけか」

「そう言うことだ。そしてヒロ君、ジュナ君、この先はそう言った連中に注意を払う必要性がでてくると言う訳なんだよ」
そこには色んな危険がつきまとうわけだ。

同盟内での衝突もありえるし、過激派によって外交問題や、テロ、戦争などが起きることもありえる。

最悪にはElwinaの強制停止……一方間違えれば……もちろん宇宙全体が危険ってわけだ。

「そう、世界を改善しようとしている私たちによって、害悪が生じてしまう。そう言った危惧があるわけだ」

「何とか過激派をなくせないのかな…」

ジュナは溜息をついてつぶやいた。

「それは不可能だろう。人の数だけ考え方は存在する。同盟が大きくなれば、異端が現れるのは、むしろ必然なことだな」

「…そう。忌々しいことに、組織が目的の達成に近づけば近づくほど、彼らの危険は大きくなるわけだ。

君たちは、そして我々はこの考え方を世界に発信すると同時に、そういった異端と上手くやっていかなければいけないんだ」

話はヒ口にとってあまりにも実感のわきすぎるものだった。それにしてもこれほどに人の考えに影響を及ぼす『羽』…。気がついたら、世界は『羽』を軸に動いているのだった。

A - 1451 ヴァイスナハト 七十分の一の意義

「…とにかく、そうだな。今はこれと言って出来ることはないし、またやらなければならないことはない。異端に対してはね。…だが、そうだ、一人会ってみるといいだろう。そう言った人物にね」

そう言い終えると、教授は紙に名前とメールのアドレスを書いた。

「…ライネス「クリアウオータ」？」

「そいつは私が知っている異端の芽の一人だ。機会があつたなら、ちよつと話を聞いてみるといいだろう。そいつに限って言えば、人柄自体は非常に好感のもてる人物だよ」

教授は其処まで言うのと、そろそろ時間だ、と言って、別れの挨拶を済ませた後二人のもとから離れていく。

しかし、異端に対する見通しが甘かったことを、ヒロとジュナ、そして教授共々、翌日に知ることになる。

翌日、二人は朝の7時ころには目が覚め、居住地から会場へ移動した。

講演は一時からなので、その間に会場のチェックを終わらせた。会場内に特に問題はなく、不審物などもなかった。

警備体制も問題ない。教授の話を聞いていたので、二人は少し警戒していたが、これなら多少の事件は未然に防げるだろう、ヒロはそう思つて、チェックを終えた。

「あ、ねえ、そろそろ教授を出迎える時間よ」

ジュナに言われてヒロが時計を見ると、10時半を指していた。

「そうだな。じゃあ、そろそろ行こうか」

教授は11時に、会場から至近の駅に来ることになっていた。

駅まで、二人は教授を迎えに行く。

今日は休日にあたる日なので、この時間の人通りは多く、駅には買い物やら、旅行やら…みんなそれぞれの予定をもつ人たちが歩いていた。

たいていの人は普段着か、お出かけ用の服なので、スーツ（例によつて黒い）の2人は明らかに浮いていた。

「この格好つて、やっぱり少し恥ずかしいんだよね…」 「鴉丸同盟に入っていること、まるわかりだしな」

ヒロが周りを少し見ながら言う。

「私たちが入った頃は、今ほどは有名じゃなかったんだけどね。今じゃ加盟者も多いから…」

2人はそれから三十分ほど待った。

色んな方向に、色んな予定の下歩く人々を見ながら。

11時を過ぎたが、教授はやってくる気配がない。

「…遅いな。まあ、開始まで余裕はあるからいいか」

「先生から何かしら連絡は？」

「…ないな」

11時半を過ぎても、先生はやってこなかった。

「さすがに遅すぎない？」

「そうだな。ちよつと連絡してみようか」

ヒロは携帯電話を取り出し、予め聞いていた連絡先に電話をつないだ。

…

…

「…出ないな…」

「携帯にかけてるんなら、電車の中だから話出来ないのかな…」

しばらくコール音を聞いた後、ヒロは電話を切った。

刹那。

「待ち人は来ないんじゃないかな」

ヒロの背後から見知らぬ声がある。

「…誰だ？」

振り返ると、見覚えのない中年の男がヒロとジュナの方を向いていた。彼は左手をポケットに入れたまま、ヒロ達に話かけていた。

「…待ち人は来ないよ。絶対に」

「…教授の知り合いなの？」

「…まあ、そんな所かな。とにかく、彼は今、此処には来られない。そして…」

二人はそこでようやく彼が左手にもつ『もの』に気付く。

それはレーザーを発する、拳銃に近いものだった。

「…そして、君たちも、会場へ戻ることは出来なくなったようだな」

「…何のつもりだ？」

臆してるのを隠しながら、ヒロが問う。

「…今は、今日の講演を良しとしない者、とだけ言っておこう。

とにかく来てくれないか。君たちに選択権はないように見えるのだが」

二人は前側にしか窓のない車の後部座席に乘せられる。

運転席側と後部側では空間は完全に仕切られているため、二人から外を見ることは出来なかった。

もちろん、と言うべきか、後部のドアはすべて、運転席の操作な

しには開かなくなっていた。

「…参ったな。何だか物騒な話に巻き込まれたみたいだ」

「どうしよう。講演の方、もう開場しちゃってるよ」

二人は通信手段を取り上げられたため、会場にいるスタッフに連絡することも能わなかった。

…どこをどう走ったのかわからないまま、どれくらいの距離を走ったのかもよくわからないまま、しばらくの時間が過ぎ、やがて車は止まった。

降りると二人は深い森の中だった。

ただし目の前には謎の建物。ごく一般的な一軒家と言った感じの建物が並ぶ。

また、二人の後ろには車が走ってきたと思われるよく整備された舗装路が、木々の緑をわけるように伸びていた。

「…中に入ればいいのかい？」

ヒロが運転手…先ほど二人に銃をちらつかせた男に尋ねると、彼はにこやかな顔を縦に動かす。

男は確かに年を取っているが、身なり、身だしなみは小綺麗な印象を受けるものだった。

「…僕に付いてきてくれ」

そう二人を促すと、彼は二人を建物の中へ『招いた』。

中は正直奇妙な作りをしていて、入り口からひたすら廊下だけが続いていた。

時々曲がるものの、曲がった先はただの廊下。段々と中心へ進んでいるようだった。

十回ほど曲がると、やや広い個室といった感じの部屋にたどりつく。

壁の大きなペーパーテレビ、掛け時計など、部屋の調度品は比較的贅沢な印象を与えるものだった。

部屋の中には大きなテーブルと、その左右に別れて三人掛けの

ソファが二個。部屋に根付いているかの如く置かれていた。

またその別の対面にも一人掛けのソファが一對おかれている。

そこには既にそれぞれ、人が腰掛けていた。

片方は教授だった。

片方は……？

「教授。無事だったんですね！」

ジュナがほっとした様子で声をかける。

「……ああ。見ての通りだ。講演会は、申し訳ない形になってしまったがね」

「いえ。……しかし、心配しました。連絡しても繋がらないものだから……」

「……まあ、拉致された事には変わりないのだがね」

教授は目の前にいる人間をちらりと見た後、そう返した。

「……まあしかし、彼らは私たちに危害を加えるつもりでもないらしい。今のところはね」

そのまま、教授は二人にその男を紹介する。

「……彼が、昨日二人に話したクリアウオータだ」

クリアウオータは軽く会釈をすると、二人にソファに腰掛けるよう座った。

運転手の男も、二人の対になる位置に座り、5人がテーブルを囲う形になる。

「初めまして。ライネス・クリアウオータと言います。鴉丸同盟に加盟して久しいものです。誠に申し訳ないのだけど、今日の講演会は中止ってことにさせていたどうか。なに、同盟にはすでに沢山の人がいますから、一度の講演会くらい、どうってことないでしょう」

ライネスは悪びれもせずこの様なことを三人に向けて言った。

「……一体何の用ですか。まさか同盟加盟者が、同盟の講演会を妨害するなんて……」

ヒロは出来るだけ抑えた声でライネスに言う。

「…まあまあ、それは確かに申し訳ないが、私たちはあまりにも宣伝の機会がないものでね、一つここいらで大々的に宣伝をする必要性が出てきたって訳だよ」

「…宣伝とは、例の戯れ言を、かな？」

教授はそうライネスに言った。

「戯れ言…。まあそうでしょうね、私たちの言葉なんて、言わば全て戯れ言に他なりません。」

あなた達も、そして私達も、結局は戯れ言を廻して世界を囲い込もうって腹な訳じゃあないですか」

彼は教授が何か言おうとしたのを遮り、二人に向き直って言った。「私の記憶が正しければ、お二人にはまだ、私の考え方を伝えてはおりませんね。」

「…今日はそれをお二人に伝えるという意味合いも込め、この様な大立ち回りを演じているんですよ」

「…それは、『羽』に関することですね？」

ヒロが問う。

「…まあそうだな。鴉丸同盟の活動に関する事ですよ。だから君たちにも大いに関係在るでしょうね」

「…聞かせてください」と、ヒロは促す。

「…率直に言って…僕は鴉丸同盟の存在目的…つまり『羽』の機能停止というものには非常に賛成しています。あの光に関する悪い影響はもう一世紀以上前から主張がでていますし、それを裏付ける論文も、学術的に正当なものでも、もう随分と存在しています。」

「…確かにあの羽が私たちに与えてきた文化的影響は、とても大きなものでしたが、これ以上あの光に頼っていては、我々は文明だけが先を行き、実の伴わない、抜け殻の生活へと退廃していくに違いないでしょう。」

私たちの文明は、科学的な意味では必要以上の所まで進歩してしまっています。少なくともとしばらくは、この先しばらくは、むしろ

る形而上的な、精神的な部分を伸ばしていくべきかと思います。鴉丸同盟のここまでの考え方は、私も非常に賛成するものなんです」
聞く限りで、ライネスが敬虔な加盟者であったことを、二人は感じ取った。

「しかし、一方で鴉丸同盟は平和民主主義を掲げ、議会での承認のみにより、この目標を達成しようとしていますよね。」

「いえ、これも、考え方としては非常に素晴らしいと思うんですよ。乱暴なやりかた、人を傷つけ殺めるやりかたは良くない。確かに良くはない。」

「ただ、これを完全に遵守するのはあまりにも非現実的なように思えるんですよ。」

「私が加盟してからすでに十年。発足はそこから更に十五年前。既にこの活動は二十五年の歳月をかけているんです。」

「しかし、『教科書通り』の活動の末の成果は、やっと一国と大差ない宇宙連合での理解を得られたにすぎない。」

「きつとゲジヒテさんは『宇宙連合での勝利の影響は大きい』とか、さもゴールに近いかなのようなことを言うのでしようが、考えてみてください、現在全世界（地球外も含む）人口は百四十億。宇宙連合は僅か二億足らず。つまり、鴉丸同盟はまだ、世界七十分の一の人間のコミュニティーをバックにしたに過ぎないんです。」

しかも、宇宙連合は確かに宇宙の情勢にいち早く反応し、星内の国々はそれに呼応しないともかぎりません、しかし、『宇宙の情勢にいち早く反応』すると言うことは、裏を返せば、こういった事案では比較的簡単に世論を動かせる集団なんですよ。」

つまり、他の国々はここより遥かに腰が重い。鴉丸同盟は世界の七十分の一、それも、最も味方にしやすい七十分の一をバックにつけたに過ぎないんですよ。」

いいですか、二十五年の歳月の成果がこれだけです。『平和的にElwinaを止めるに至るまで、一体如何程の歳月を要するのでしょうか？』

いいですか？その間にも光は刻々と人々の心を蝕んでいるのですよ？それなのに、この様な気長な所業を行っていて良いはずがないでしょう？

もしもこの先遠い未来に目的を達したとしても、『精神的健常者』が世界から消え去っていたならば、活動は全て無駄になってしまいうんですよ？

いや、そもそも、このやり方が全世界に通用するのかすら非常に疑問です。

もう、私の言わんとすることはわかったでしょう。つまり、平和民主主義なんて、所詮は理想でしかなく、実際に目的を達成するためには、もっと強硬な手段を、多少なり使っ必要がある、と思うんです」

ライネスは、二人が口を挟む暇もないままに、ここまでを一口に話した。

「…つまり、武力を交えつつ、他国を『制圧』して、Elwin a 停止にこぎつけようと言うことですね？」

「…もちろん最低限の範囲ですよ。出来る限り今のやり方で、と言うことは変わりません。ただ、議会の理解を得るのは、皆さんが想うよりずっとずっと難しい事なんですよ。

人は基本的に変化を嫌いますからね」

「…戦争もすると言うこと？」

「最悪の場合は、そうなるでしょうね。相手が頑なにこちらの主張を聞き入れないのならば」

「…それは、こちらの主張を一方的に押し付けて、通らなければ力でねじ伏せる…それだけのことですよね」

ヒロは鋭い口調で言った。

「…ならば、一体誰がこの目的を達成するって言うんです？相手に私たちの主張を聞き入れさせなければ、目的を達成させることは出来ないんでしょう？」

ヒロさん、あなたは私をガキ大将と同じだ、みたいに言いますが、

私とガキ大将には全く違う点があるのをお分かりですか？

私には、絶対に実現しなければならぬ命題があるんですよ？

それは私の我が儘でも何でもなく、この世界の為に、です。

しかも、ことは急を要しています。もう手段を選んでいるステージは過ぎてしまっているんですよ」

「…でも、それで何人も人が傷ついたり、殺されたりするんですよ…？」

「それは今のElwinaだって同じです。ただ、Elwinaの害悪は自殺とか精神疾患という形で現れるために、被害の大きさが見えにくいだけです。」

私たちが何も話を進展させなければ、戦争に匹敵する位の割合で全世界で、人が被害に遭うんです。それも永久的にね。

ただただ戦争を良くないと言うのはおかしい話だ。人を死に至らしめる原因、もっと大きな、防ぐべき原因が他に存在していると言うのに。

…まあ、あなた達にここですぐ考えを変えてもらおうとは思っていませんでしたよ。

これはただのアピールです。鴉丸同盟のなかに別派閥が出来たと言う、ね。

ご心配なく。今のところ私たちの派閥が鴉丸同盟本筋の活動を阻害したり、鴉丸同盟を壊したりする積もりはありません。

あくまでも私たちは同じゴールを目指す同朋ですよ。

…だから、あなた達も、これから表層化するであろう我々を阻害しないでほしいんですよ。もし明らかな妨害が続くようならば、上の同朋関係にも、ヒビが入りかねないということを覚えておいて下さいね」

「先ほどアピールの場がほしいと言ったな。一体どういうことだ？」

教授は呆れ顔で問う。

「…いえ、今日の講演会は演目を変えさせていただき、我々の派

閣の宣伝をしたんですよ。あなた方がここにいる間に、ね。

…プレゼンは概ね盛況だったみたいですよ。

…そんな怒らないで下さい。いまやあなた方にとって、一回の講演が潰れるくらい大した被害じゃないでしょう。

…此方は只今宣伝に必死なんですよ。まあ、申し訳ないとは思っただんですが、一寸利用させていだいたわけですよ。

「…君らがなにを言おうが、鴉丸同盟の本筋を変えるつもりはありませんよ。又、こちらは身内の尻拭いをしないわけには行きませんから、あなた方が他国に危害を加えるようなら、私たちは全力で阻止します」

ヒ口ははつきりとそう告げた。

それは事実上の宣戦布告。

「…そうですか。誠に残念です。」

私たちはいつか敵同士で相見えることになるでしょうね…それもまた、目的達成の為の道ならば、仕方ない」

この瞬間、鴉丸同盟の活動は新たな方向へ向くことになる。

しかし、この決裂が、後に全世界を巻き込む戦禍の遠因になるとは、この時はまだ、知る由もなく…。

「…さて、ここでもって私たちは残念ながら仲たがいになってしまったわけです。したがって、あなた方を生かしておく理由もないのですが…」

ライナスは手元に置いていた銃に視線を落とす。一気に空気が緊張する。

「…やめておきなよ」

館についてから初めて、ヒロの向かいに座っていた運転手が口を開く。

「…いま幹部を殺したりしたら、面倒なことになっちゃうだろう」
口調からして、ライナスが上位、運転手が下っ端というわけではないらしい。

ライナスは一瞬考えて、

「ふ、わかってるよ。少し脅かしてみただけだ。現時点ではこちらだって力不足だ。本家に本格的なけんかをする真似はしないさ。本家は平和主義で通っているわけだから、こっちがあまり過激な行動に出ない限りは、僕らが攻撃されることもないだろうからな」

もちろん三人にも聞こえるように、ライナスはこう言った。

「…まあ、講演会はもう少しで終わりますから、もう少し待っていてくださいね。その時間になったら、先ほどの駅までお送りしますよ」

それから、一時間後、三人は再び先ほどの車に乗せられ、三人が待ち合わせするはずだった駅まで連れて行かれた。

車から降りると、運転手は、

「まあ、とりあえずは、あまり面倒を起こさないようにしましょう。お互いにね」

とだけ言って、また車は走り去って行った。

休日の駅前に、三人は呆然と立っていた。

三人は朝から一切食事をとっていなかったので、駅前のレストランに寄ることにした。

休日の駅前：当然ながらレストランは満員に近い状態で、食べるものを注文したあと、何とか四人がけの席が空いていて、三人はそこに座った。

食事が来るまで、三人は一切の無言だったが、その後、最初に、口を開いたのはヒロだった。

「そうだ、ここで一つ気になっていたことがあるから、教授にちよつと聞いてみたいんですがね」

「…なんだい？」

「…鴉丸同盟の最終目的はElwinaをストップさせること。」

…まあ、最終的には廃棄することですよ。でも、一つだけ気になるのは、いったいその時『羽』はどうするんですかね？これについては、組織として何か話はあるんですか？オレはまだ日が浅い方なので、何も聞いていないんですが」

これはヒロが前から抱いていた疑問だった。

もちろん、Elwina自体は所詮人間が作った機械だから、機能を止めた後はスクラップにでもしてしまえばいいだろう。しかし、『羽』の方は、そう簡単に捨てられるものではない。いや、おそらく捨てるのは不可能である。なぜなら、（少なくともこの世界において）『羽』は宇宙の一部分の文明全体を恒常的に、永久的に支えることができるほどのエネルギー媒体だ。それは、エネルギーを抽出する上では非常に喜ばしいものだが、破壊するとなると、何らかの形で、その無限に限りなく近いエネルギーはこの世界に放出されることになる。

そうなれば、世界の存在が危ぶまれるのは言うまでもない。

「…そう、それは非常に気になっていたことなんだ。あの『羽』」

は破壊することは物理的に不可能。かといって、たとえElwinaを破壊したとしても、『羽』が現存する限りは、人間の性質からいって、またElwinaに似たものを開発して、人はあれに頼るようになるだろう」

教授は腕を組んで考え始める。

「では、同盟の人々もその処理方法は知らされていないんですか？」

「でも、ゲジヒテさんは何か策を持っているらしい」

「策？でも、今言ったとおり、破壊は不可能なんですよね？」

ヒロが教授に問う。

「だが、たとえば、幽閉してしまうとかして、完全には無くさないが、誰の手にも届かない所にやってしまっ、とか完全に破壊しなくても方法はあるんじゃないか？」

教授は答えた後で、独り言のようにこう続けた。

「…なるほど、ということは、その後は同盟の加盟者のみが『羽』のありかを知っているということになるのか…」

「いえ、もつと言うと、場合によっては、幹部や代表のみが知るということもあり得るでしょうね。状況がどうなるかは全くわからないですけど」

つまり…。

「つまり、『羽』をこの同盟が管理できる可能性を持つわけですよ。あくまで可能性ですけど」

「…それは、ゲジヒテさんを疑っているということかな？」

教授はあくまで冷静に聞く。内心どう思っていたかは定かではないが。

「それも、全くない、というわけではありませんが…それより懸念しているのは、むしろ、『羽』を獲得することで、何らかの利益を得ようっていうやつが現れないかってことですよ」

「そうだよね。そんなすごい力を持つものを独り占めしたら、売ることできるかもしれないし、『人質』代わりにして何らかの権

力を持つこともできそうだなものね」

ジュナが冷静に補足した。

「…さっきのライナス達も実際どう思っているかはわからない…注意すべきは、単なる異端だけではないってことですよ」

「…なるほど。それは考えていなかったな…一歩間違えると、この同盟から世界を支配するものが出てしまうということか…」

「この団体は確かに平和主義でいいことですけど、やはりそういったいろいろな危険因子に対する意識は今一つ足りないように思えるんですね…」

これはどこかでもあったようなジレンマである。平和主義でいることは確かにいいことだが、いくらこっちが平和を主張しても、相手が勝手に過激になられたらどうしようもないって話。自衛しなきゃいけないけど、どこまでが自衛なんだろうってことだ。

「…教授の言うとおり、この先は同盟の加盟者が増える分、（予定通りいけば）徐々にこの考えが世界に広まっていくにつれ、あらゆる危険因子のリスクも高まるってわけだ…」

おれ達はそういった因子をうまくいなしたり、時には同盟を守るために何らかの行動を起こしたりしながら、かつ、他人を巻き込まないように、できるだけ巻き込まないようにE1wina停止にこぎつけなければいけないってわけですよ」

周囲にはたくさんの他人がいる。たくさんの他人が集まって遅めの昼食を摂っていた。

そんな風にその『世界』の中ではたくさんの人がひしめき合っていた。

その世界の中で、他人を危険にさらすことなく、世界のエネルギー源を変えていかなければいけないのだった。

それは途方もない計画のようだった。

…そして、もちろんこのシナリオは、完全なるグッドエンドとい

うわけには行く筈がなかった。

A - 1451 ヴァイスナハト／環の着地点（前書き）

続きがまとまらなくてかなり止めていましたが、やっと固まったので書きました。

A - 1451 ヴァイスナハト/環の着地点

事態は突然動きだすことになる。まあ、情勢の変化なんて常に突然ではあるのだが。

二人は相変わらずの「布教」活動にいそしんでいた。

いつからだろう。鴉丸同盟の活動は、今や完全に「布教」という認識を持たれていた。それが悪いことなのかどうかはわからない。（少なくともいいことではないだろう。彼らの目指すものは宗教ではないのだから）しかし、誰彼ともなく、鴉丸同盟は宗教という扱いを受けている。

そのため、（彼らが強硬手段を全く行わないにもかかわらず）彼らの活動に反発する輩がいなくても限らなかったわけだが、活動はどちらかといえば順調。

だが、当然なかなか考えがつたわらない地域もあった。

特に、地球に於いては、かなり厳しく反対する所もあった。

多くの地域では、学者の助力により、その科学的な主張により、考えが浸透していった。

そう、あの教授に限らず、学問の力はとても助けになるのだった。でも、逆に元々学術的な面で発展していない地域、或いは宗教と学術が不可分な地域では、この理論を浸透させるのは困難だった。

とりわけ苦労しているのは、エルガルド自治区を始めとする、通称「Land of Round-環の着地点」と呼ばれる地域。このあたりはエルガルディアと云う宗教の信仰者がほとんどで、この宗教の教えが、Elwina停止理論と全く相容れない。

その総本山であるエルガルドは、未だに鴉丸であるだけで、入国すらできない。

今日もこの地域の懐柔策について話し合われていた。

鴉丸の幹部は25人いるが、内15人は、各々自分の持ち場の地域があった。

だから、この会議の参加者は11人。鴉丸同盟幹部の会議の、最もスタンダードなスタイルだ。

ヒロとジュナも勿論参加していた。彼等には担当地域がない。エルガルドのように特殊な事情のある地域を除けば、地域担当の幹部は、大抵その地域出身の有力者がやるので、元々出どころのはつきりしない彼らは、地域担当にはなりにくいのだ。

円卓を囲んで、11人の幹部がみな、顔を合わせている。

「まあ、宗教の存在は厄介なのは確かだが、結局まずはさ、ある程度信頼の置ける人間の文章を以て、考えをもう少し受け入れてもらうしかないとおもうんだ」

ヒロは会議に於いてそう云った。

「だが、文章じゃあなかなか伝えたいことが伝わらない」

「そうだな…もう少し中立な観点があつた方がいいのかもしれない」

「何かこう、うちの支持者ではない筋からの科学的な証明なんかが出来ればいいのだが…」

ヒロとは別の幹部が各々に云う。

この筋を見つけるは簡単なようで難しい。何故なら、そんな科学的な証明を正しく出来る者の殆どは、その重大さに気づき、既に支持者となつているからだ。

「…それに、エルガルディアの思想は、『Elwina』を光の神とし、それと共に滅びゆくのは『Heaviness』と云う幸福の世界への解脱を意味するから、そもそも滅びる事への抵抗がほとんどないんだ」

「流石に環の着地点担当だけあって、詳しいね。リルケさん」

「まあね。これくらいは流石に向こうとのコンタクトを試みる過程で、嫌でも知ってしまう事だ」

「でも、環の着地点の人たちは、昔から、世界が滅びると知っていたの？エルガルディアって、結構歴史の長い宗教だよね？」

ジユナが疑問を挟む。

「ああ。彼らの教書には既に、世界の終わりについて言及している。流石に、千年以上前にこの事態を予想していたとは思われないがね」

「宗教は色々あるが、無常感をその教えの中にもつものが多い。つまり人も動物も、大地も、世界だって『いつかは滅びる』っていう考え方だ。きっとエルガルディアも、そう云った観点から、世界の終わりについて書いていて、それがこの『Elwina』のエピソードと合致しちゃったんだろう」

「ふむ…つまり、彼らも『Elwina』の危険性は理解している、と？」

ゲジヒテがリルケに訊く。

「少なくとも、首脳や宗教関係者の上の方は。只、民間の末端まで、正しく理論が伝わっているかは疑問ですね。何しろ、貧富が大きい地域ですから」

「『Elwina』から来る厭世観が、却ってエルガルディアの教えの強さを助長してる可能性もありますね」

「ふーむ、厄介だな…」

「何にしても、環の着地点との交渉は早急に進行させたいですね、何やら不穏な動きもあるようですし…」

リルケは、ヒロたちに目配せしながら云った。

「なに？どういう事だ？」

ゲジヒテの問いに、実際に会っているヒロが答えた。

「…えーと、どうも同盟の一部に、今より強硬な手段に出ようとしている輩がいるようでして、先日も、ちょっとトラブルがあった所なんですよ」

「強硬な手段？」

「はい、つまりは、議会のみ出なく、武力などで制圧しよう、と

「云う…」

「無理に『Elwina』を破壊すると云うのか？」

ゲジヒテはあからさまに不快な表情を呈した。

「そこまでは…」

ライナスの言葉を信じるなら、あくまで世論を勝ち取った上で『Elwina』を停止するつもりの方だった。

それは、Elwinaを無理に破壊する事への恐れか、それとも？
やがて、午前の活動時間は終わり、会議は、話をまとめられないまま終わった。二人は昼食をとることにした。

二人は食堂で、各々の食べたい物を買ひ、あいているテーブルに座った。昼時なので、すいているってわけではないが、そもそもこの食堂がかなりのスペースを確保しているものなので、座れないほど混んでいるわけではなかった。

ヒロは頼んだリゾットを一口食べたのちに言う。

「さつき本を読んでいて、一つ気になったことがあったんだ」

「なに？」

ジュナが皿から顔をあげて尋ねる。

「一体どういう経緯で、『羽』はこの世界にやってきたんだろうって。なんでかはわからないけれど、そのことについては、歴史書にも科学書にも全く書かれていないんだ。ただ『いまから1452年前に羽からのエネルギー抽出を始めた』とだけ書いているものばかりなんだよ」

「そうね、いまはA-1452年だもんね。でも、『A』はなんなの？」

「そこもわからないんだ。それより前は普通に数字だけで歴を表していたみたいだしね。なんにしても、何らかの形でその頃、あるいはもっと前に、『羽』はジュナのいた世界からやってきたはずなんだけれど」

「…そういえば、みんなどうしているんだろう。もう大分経つよね…」

ジュナはさびしげな表情を浮かべた。

「…そうだな。ここであっちの時間の流れがどうなっているかはわからないが、おれらにしてみればもう長い間離れてしまっているな」

「そういえば。私たちは結局。どう動いたらいいの？『羽』を処分するんだよね？」

「さあな。あの男はこの世界では見ていないし。いつか遭遇と想ってるんだけどな」

ヒロは手を広げて云う。

「いるとしたら、烏丸同盟じゃないかな。利害があまりにも一致しているし」

「でも、この世界の人って、『呪』使えないよね？本当にこの世界の人のかな…」

「…そうか。呪印で人を別の世界に飛ばせるってことは、あいつも元々はラング＝ナハトの人間の可能性もあるのか」

「或いは又別の、ね」

「ああ。正直若干忘れかけていたよ。オレ自身、この世界は三つ目だっことも、世界は少なくとも、二つよりたくさんあるってことも…」

ヒロは天井を眺めて、呟いた。

独り言のような。

ジュナに告げるような。

「でも、彼がもし、別の世界の住民だとしたら、その目的は尚更にわからないね」

「いや。例えば世界がたくさんあるのだとすれば、『羽』の存在については慎重に扱わないといけないだろう」

「？」

「そつか。オレ、ジュナにオレがいた世界のこと、余り話してなかったつけ。オレの世界では『羽』は只の木の箱に封印されていたんだ。オレ、その時は別に専門家じゃなかったからわかんないけど、あの世界にとつての『羽』は、世界全体のエネルギーになる程の存在じゃなかったって思うんだよ」

エネルギーも、時間も、人間も全て、比較されるべき存在。全ては相対的なものなのだ。

「そつか。彼がエネルギー的に巨大な世界にいた場合、この世界程『羽』の扱いは難しくないし、むしろ莫大なエネルギーを得られるから、有用ってわけなのね」

「そう。『羽』の意味も色々ってわけ。オレの世界なんて、『羽』は全く意味をなしていないし。そもそもほとんどの人はその存在を知らないよ」

その時、食堂のスクリーンが映すニュース番組で緊急ニュースを知らせるアラーム音が響く。

ニュースキャスターが字幕と共にニュースを読み上げる。

「えーっと、只今速報が入りまして、テラ・エルガルド自治区の大統領官邸が占拠されました。詳細はわかっておりませんが…」

ニュースキャスターはいかにも突然のニュースと云った感じで文章を読んでいる。ただ突然だけでなく、内容もあまりに衝撃的。いくらプロと云えど、戸惑いを隠しきれないようだ。

「エルガルド…まさか」

だが、ヒロやジュナのショックの大きさは、キャスターの比ではなかった。

何故なら、彼らはこの事件の意味を知っているから。

そして、恐らく、犯人の事も。知っているから。

A - 1451 ターニングポイント。終わりの始まり

映像は唐突に切り替わる。

おそらくは、犯行グループがそうするように仕向けた映像。

そこにはなにやら荘厳な建物が映し出されていた。

どこかの神殿のような、数百年の歴史があるかのような建造物。

言うまでもなく、それは、長い歴史を持つエルガルド自治区の中枢、エルガルド大統領官邸。

そして、云うまでもなく、ただ建物だけが映し出されたわけではない。

建物はただの背景。

ただし極めて重要な意味を持つ。

その映像の主題、そうとすることもできる、背景。

建物をバックに、二人の男が映し出されている。

誰？おそらく、世界の多くの人はその人たちの顔に見覚えがなかっただろう。

少なくともこれまでの時系列に於いて、彼らはあくまで歴史の一端であり、歴史の中心に立つ人たちではなかったから。

しかし、ヒロとジュナ、そして一部の鴉丸同盟に属する人たちならば、あるいはその顔に覚えがあり、その映像を前に今、絶句していたりしているのかもしれない。

そう、映し出されている一人はライナス。

先日、ヒロ、ジュナ、そして、あの教授を一時的に拉致した張本人。

それは、ある意味鴉丸同盟の一部の人たちにとっては予想されていたこと。予定調和の衝撃。

とはいえ、やはり、早すぎた。事態は想像以上に、想定異常に転機を迎えている。そのことを思い知らされた。

その、激動の歴史のページとなる映像が、今、全世界中に流さ

れているというわけだ。

そして、そのページの主役として世界の中心に表れたのが、元或いは現在も鴉丸同盟の一員である、ライナスというわけである。

さて、もう一人の男は云うまでもない。が、面識を持つのは、殆どジユナ、ヒロ、教授の三人のみ。あの時名を名乗ることのなかった運転手であった。

映像は、この二人に上下関係ではなく、対等のパートナー関係があることを示しているようだった。

映像の中の主役は語る。

「たった今、われわれ『シュヴァルツナハト』一同は、エルガルド自治区大統領官邸を制圧した。云うまでもなく、これから当自治区は、我々の管理下に置かせていただく。理由簡単。単純明快。我々は、我々の主義、理想に則つて、『Elwina』の停止を目指してきた。『Elwina』を動かし続けることにおける弊害は、現在多くの科学的根拠に基づいて証明されている。だから、我々はそれを背景に、その弊害を取り除こうと、努力してきた。しかし、そんな状況にもかかわらず、不合理、不条理、非科学的な理由から、『Elwina』の停止を強く拒む集団がいる。私たちは努力した。どうにか、平和的手段で解決を試みた。手段は尽くした。あらゆる所まで。しかし、彼らは一向に私たちの主張を聞き入れず、ついに武力行使を敢行してきた。今回、このような手段をとったことは、我々にとって誠に不本意で、残念であるが、我々の合理性を守り、また目的を達成するために、致し方なかったとご理解いただきたい。ライナスは、ここまでを一気に告げた。シュヴァルツナハトという名は、おそらく世界的には新出単語。新たに現れた集団だった。そこからは、代わつてもう一人の男、運転手が口を開く。

「さて、これから我々が予定している道を告げておくことで、この『環の着地点』を中心とした、『Elwina』停止に不合理に反対する人たちへ、正しい判断のための猶予を与えたいと思う。我々は、まず、このエルガルド自治区全体を早急に制圧する予定だ。

期間は、概ね3週間程度を見ている。その後、この環の着地点全体に、我々の主張を受け入れてもらうべく、実力を行使していきいたいと考える。抵抗勢力には容赦しない。少々無理やりなやり方で心苦しいが、我々は正しい主張をしていて、彼らが大人気ない理由でそれを受け入れない、そういうことを、重々理解していただきたい。環の着地点の制圧が終了後、その他の反対勢力の制圧に入る。我々は、『Elwina』協定に加盟している各地域、宇宙居住区全てを制圧した後、協定事項に則って、『Elwina』停止を敢行する心積もりだ。先ほども申し上げたとおりだが、反対勢力を制圧するには、ある程度のタイム・ラグが生じる。云うまでもなく、彼らが協力を申し出てくれさえすれば、我々も不必要な犠牲を出す必要がないのだから、反対勢力各位には、素早い対応を期待する」

運転手がそう告げると、映像は途切れ、ニュースのスタジオの状況に戻った。

この映像は、映像を受信可能な媒体のほぼ全てに、番組の一部として、或いは電波ジャックによって放映された。

世界中の人がそれを目にし、世界中の人が何かを思った。

そして、世界中で何かが起こった。

それは多くの人にとってはいわゆる空前絶後の大事件。

しかし一部の人間にとっては、そして、ほかの世界人々にとっては、完全なる予定調和。

歴史の直線状に、或いは歴史の帯の上で、あつてしかるべき大事件。

ライナスと、なぞの運転手の言葉が、その、幕開けだったというわけだ。

さて、世界は三つに分かれることになる。つまり、鴉丸同盟に同調し、平和に『Elwina』停止を目指す人々。『環の着地点』を中心とする、『Elwina』存続を求める人々。そして、『シ

ユヴァルツ「ナハト」を中心とする、強硬手段で『Elwina』を停止させようとする者。

しかし、これは建前。

なぜなら、

そのいずれもが武力に手を出し始めるのは、この事件の、ほんのわずか後に過ぎなかったから。

つまり、世界は、三つ巴の、ありきたりの、予定通りの、戦争へ突入するということだった。

A - 1451 ターニングポイント。終わりの始まり（後書き）

次は視点を分けて順番に書きます。どれから書いてもいいのですが、環の着地点から書こうと思います。

A - 1451 アイゼンベルク軍部1

環の着地点。

世界で最も厳格に『Elwina』を神格化する場所…。

ここでは全てに於いて『Elwina』を信じることが正しく、それを守ることが、このヴァイス「ナハト」の民の使命であり、環の着地点の民の使命であった。

この地で『Elwina』が神格化されている理由、それは。エルガルドに『Elwina』の期限があると云われているからだ。

いまから、この暦での1452年前…。

ヴァイス「ナハト」の繁栄（人によつては腐敗と受け取る）は始まったのだ。

さて、今日はこの環の着地点に於いて、歴史上に刻まれるであろう大事件が起こった…。

環の着地点の中心地、エルガルドの官邸が、シュバルツ・ナハトを名乗る一団に占拠されたのだった。

犯人のトップグループは目下のところ立てこもっている。

エルガルドの隣国であり第2の勢力を誇るアイゼンベルクにも、そのニュースはいち早く飛び込んできた。

今、時間軸はあの歴史的犯行声明がなされた直後。

アイゼンベルク軍部ではすぐさまミーティングが開催される。

視点を軍中枢の会議室に移してみる。

「…非常に残念だが、演説によると、シュバルツ・ナハトによる一件は、対岸の火事って訳にもいかないだろう。直ちに戦闘へむけて準備する必要があるそうだ」

世界の地図が移ったスクリーンの前で、多くの勲章を携えた男が云う。

彼はアイゼンベルク軍部元帥、ビスマルク。当然のことながら、この国家的危機に於いて、軍をトップからまとめる立場である。

「しかし、あのシュバルツ・ナハトと云うのは、一体何なんだ」

彼は一番近くのリサーチ部隊に尋ねた。

「はい。今のところまで調べて得た情報によると、彼らは元々鴉丸同盟の一員であつたようです。もちろんあとで雇われた傭兵なども多数存在するようですがね。中心人物の一人はライナスと云う男で、かねてより、非武装主義の同盟に於いて不満を持ち、独立を画策して同盟内で密かに動いていたようです」

答えたのはリサーチ部のトップ、バック部隊唯一の大将である女、エリゴザイル。

さらに別の男が質問をする。

「もう一人の方は？」

彼はフロントの大将の一人、W。

「目下不明ですが、彼はどうかやら鴉丸同盟の人間ではないと云うことが囁かれています」

「へえ？幹部なのに？」

「はい。噂の域を出ないソースではありますが…。何にしてもかなり謎の存在で、いままでの時系列での、プレイヤーとしての情報が、今のところ全く掴めてないんです」

「ふうん。まあいいで、戦力は？」

元帥が再びエリゴザイルに尋ねる。

「はい。先に云っておきますが、かなり『覚悟』をもって立ち向かう必要があることを先に申し上げます」

彼女はそう云うと、目の前のパネルを操作した。しばらくして、各人のパネルに人名が羅列された表が現れた。

「手始めに、これは彼らについている、或いは雇われているその筋で有名な人間のリストです」

ここではそのリストは割愛するが、軍部一同はそのそうそうたる顔ぶれに息をのむ。

「ちなみに、このリストは必ずしも正しくない可能性があり、またここにはない有名人が新たに加わっている可能性も否定出来ないのでも承を。これを見る限り、各専門のスペシャリストがバランスよく配備されていますが、やはり遠距離系のスペシャリストが目立ちますね」 「流石に歩兵で争うだなんてことはしないか…奴らが衛星を抑えているのなら厄介だ」

エリゴザイルの向かいに座るユリエスが云った。

「…防衛を前提に考えるなら、防空用迎撃機器類は必須ですね。でないと、あつと云う間に空襲にやられてしまいます」

「…特に、政府系の建物だな…空から一瞬で破壊されてはシャレにならない」

この世界では、言うまでもなく、武力は極めて発達していた。超高度から誤差が殆どないようにピンポイントで爆撃するのは、いとも容易い世界だ。

「エルガルドは勿論、この辺りの国はどれも中央政権の力が強いですからね…中央がやられてしまえば、国は一気に瓦解するでしょうね」

ユリエスが続けて云う。

「地上戦力に関しては？」

元帥がさらにエリゴザイルに問う。

「やはりそれなりの人間が雇われていますね。恐らくこちらも時期を見て、攻めてくるのでしょうか」

「時期…か」

「恐らくは、中央政権を破壊してから、地方へ陸上部隊を送るのではないかと…油断は出来ませんがね」

エリゴザイルは手に資料を持ちながら云う。

その後も防衛戦略について精密に話し合われた後、散会した。

エリゴザイルは、疲れた頭を休めるべく、32階の談話室にいた。

窓からはアイゼンベルク帝都の市街地が見える。

粉のような人々があちら、こちらへとあるいて行く。

「…ふう」

エリゴザイルは、片隅のソファに座っていた。

と、そこに、別の男が、談話室に現れた。

キイル中将。エリゴザイルの部下に当たる男だった。

「…お疲れ様です」

キイルはエリゴザイルに話しかける。

「やつと資料集めも一段落ですね。先輩、ここ数日、殆ど寝てないでしょう？」

「…まーね」

エリゴザイルは応じる。

「こんな時の為の部隊だから、まあ当然っちゃ当然だけど」

エリゴザイルは、何やら意味深な笑みを浮かべている。

「それでも、先輩が数日前から動いていたから、軍部も迅速に行動できそうですね」

「…そうね。『事件が起こってから』動いたんじゃない、間に合わないからねえ」

「しかし、アイゼンベルクの中枢も人が悪い…『エルガルドがやられることなど、何日も前に掴んでいた』と云うのに、誰もエルガルドにそれを伝えないで」

キイルは窓の外に目をやった。その方向は恐らく、今崩れかけているエルガルド…。

「まあ、それが世の中よね。エルガルドは潰れ、アイゼンベルクが環の着地点を守り、今度はアイゼンベルクが新たなエルガルディ

アの中樞になるって訳ね」

「…エルガルディアの呼び名も変えなければいけませんね」

「…そうね」

「…でも、多分世界の中心がここになることはないわね」

「…何故です？」

キイルは訊く。ある程度答えの見当を付けながら。

「…上には内緒だけど、エルガルド占拠のニユース、どこから手に入れたか知ってる？」

エリゴザイルの問いにキイルは頸を傾げる。

「勿論、シユヴァルツ」ナハトの構成員からよ。名前は、確かフイエルだったかな」

「…やっぱりそうなんですか…」

キイルは溜め息をつき、続ける。

「彼らは『エルガルド占拠のニユースを聞いても、我々が動かないことを見越して』、我々にニユースを流したと」

その目的は…？

「目的は、恐らく私たちの国を傀儡として環の着地点を制圧しようってことね。今はまだその他の動きはないけど…」

「…でも、それじゃあ、話は『Elwina』停止に流れるんじゃない…」

「あら、今時、真に『Elwina』を継続する事が正しいと思っっている人なんているのかしら」

あれだけ科学的根拠がそろっているのに、とエリゴザイルはつけ加えた。

「…エルガルドだって多分そうだったと思うけど、彼らが失うことを恐れているものは、『Elwina』なんかではなくて、エルガルディアを崩すことによって失われる権威よね」

「権威…」

「そう。エルガルディアの本拠地と云う名の下に、エルガルドは、

環の着地点の頂点に立っていたのよ」

エリゴザイルの言葉に、キイルは納得したように頷く。

「なる程…他の環の着地点の人々は、エルガルドと、他の環の着地点の国々からの報復を恐れ、それぞれが形上は、エルガルディアを信じていたってわけか…」

「そう。そして今ついに、その均衡が崩れたってわけ。ウチは少なくとも他の国々より早く行動しているのだからけど、それでも『シュヴァルツナハト』のシナリオに乗っかっているに過ぎないのだと思うわ」

「…大将は、それでいいと？」

キイルは恐る恐る訊ねる。

「…そうね。エルガルディアなんて結局はガラス細工なんだから、無理にエルガルドの後釜を狙うのは良くないと思う。だから、当分は、このシナリオに乗っているふりをするのがいいと思うわ」

「…シナリオ…この先どうなっていくんでしょう？」

「…さあ。みんながみんな各々のシナリオを描いて行動してるけど、先のことは、まるで赤い丘のようにわからないわ」

ただ、決着は近い。そう彼女は認識していた。

1500年あまり続いた『Elwina』の世界は、史上二度目の『革命期』にさしかかっていた。

A - 1451 アイゼンベルク

アイゼンベルク中枢の組織構造を簡単に示そう。

まず、この国は基本的に立憲君主制を採っている。

つまり、皇帝が存在する。

但し、皇帝が政治や外交の局面で表立って何かをすることはない。なぜなら、アイゼンベルク国家法の中で、それらの実権は、大統領や、それ以下の大臣らに任されているからだ。彼らは政治・外交の中枢として機能しているのだ。

一方、形上はその傘下にありながら、事実上、大統領と同等の発言力を持つのが軍部トップの元帥である。

これは成り行きでそうなってしまったと言うことだ。何故ならば、元帥は軍部を全て握っていて、いざという時にはそれらを動かして、国を掌握しうるからである。

いつの間にか、軍部元帥のイスは、大統領につぐ出世のゴールと見なされるようになった。

リケルメ元帥はミーティング後、すぐさま専用キャビンで大統領官邸に向かっていた。

云うまでもなく、現状の共有、今後の動きについて話し合うためだ。

全てはタイミングの勝負、多分そう云うことになるのだろう、彼はそう考えていた。

昔のように歩兵同士の大規模の戦闘は減り、ピンポイントでの「人道的」な攻撃が一般的になったいま、戦争はかつて以上に、政治ゲームの一環になっていた。

現状にもっとも適した、最もムダのない行動はどれか、リケルメは、いつもそう考えて行動しているつもりだった。

しかし、今回の場合、そもそも、ゴールはどこなのか、それを明確にする必要があった。

国が目指しているのは、ポストエルガルドで、その為にシュヴァルツ・ナハトの動きを利用しているのか。

それとも、我々はエルガルディアという思想を棄て、環の着地点の解放者として、新時代に於けるこの地域の主導者となるのか…。

いずれにしても、エルガルドが窮地に陥っている今、このアイゼンベルクがある程度のプレゼンスを得ることが出来るだろう。であれば、結局は我々の選択と云う事になる。我々が『Elwina』と共に、生きるのか否か…。

政治にかかわる人間であれば、エルガルディアに整合性がないことは、もう、とくに知っている。そして、それでも敢えてエルガルディアを国民にも、国外にも訴えてきた理由も。

だから、ここでエルガルディアを存続させることが、世界全体にとってプラスではない…そんなことは、とうに解っている…。だが…。

そのあたりまで彼が思案をめぐらした所で車は大統領官邸の駐車場にいた。

「…ですが、エルガルディアの不当性を知るのは、あくまで上層部の人間のみ。我々はエルガルディアを徹底すべく、国民には、『都合の悪い』情報は絶ってきていましたから…。ですから、もしここでエルガルディアを棄てるとなれば、国民にそれを如何に伝えるかという点が問題になってきます」

リケルメは大統領に、エルガルディアについての意見を伝えた。

「確かに。国民にこのことを広めるのは、あからさまなコストとリスクになるな。上手く思想を誘導しなければ、この先世論分離や、反発運動なんかがおこるかもしれない」

大統領は思案する。この国の身の置き方を。

ここでの選択が、この国のこの先の地位も、この世界のありかたも、そして、自分の行く末すらをも決定付けるものであることはとうに理解している。

だからこそ、迷い。思案。

「…されど…やはり、ここは、世界の中心となることを目指すべきではないか？」

大統領は、その重い口を開く。

「…この事態を利用しない手はない。この事態に乗じて、我々は Elwina の時代を終わらせ、次の時代のパイオニアになるべきなのではないだろうか」

大統領は自らにも言い聞かせるように云う。

「やはり、そういうのではないかと思っていましたよ。今はこの国が頂点を目指すには絶好のタイミングです。こんな時勢は、もしかしたら、もう二度とこないかもしれませんからね」

リケルメは大統領の判断に肯定の姿勢を示してみせた。

「…しかし、だとすると、エルガルドとは縁をきることになるな」「そちらは大丈夫でしょう。結局あそこは権力の塊でしかなかったのですから、こんな事態になってしまえば、我々はあれに荷担する必要などありませんよ。…それより、問題は、世論形成と、鴉丸同盟、シュヴァルツ・ナハト双方との距離の取り方でしょう。そもそも、我々は、破壊を赦すのか、停止を選ぶのか」

リケルメの言葉に大統領はあまり思慮もなく返す。

「それはいまはまだ成り行きをみておいた方がいいんじゃないか？そのいずれか勢力を持った方につけばいい話ではないか。実際、どっちが強いんだ？」

この質問に対し、リケルメは呆れ顔をするのを必死に我慢しながら答えた。

「それは勿論、シュヴァルツ・ナハトはいま目下のところ勢力を拡大させていますからね。こちらの方が圧倒的な勢力ですよ」

リケルメは端的に答えた。

「もし、そのおつもりがあるならば、彼らのトップ、ライナスとコンタクトを取るべきでしょうね。タイミングを見計らって、ね」

「なるほど。あとは思想家と国民をどう納得させるかだな……」

大統領が思案を始めた所で、リケルメは大統領に礼をし、部屋をあとにした。

リケルメはまた大統領官邸に来た時とは別の車に乗り込んだ。

いわゆるリムジンのような形をしているものだったが、そこには既にもう一人、男が乗り込んでいた。

謎の男。それはまさしく、シュヴァルツⅡナハトがエルガルドを制圧したとき、ライナスの横にいた男だった。

「……ふう。全く。大統領のくせに相変わらず世界が見えてなさすぎだ。一体なにを判断するってんだ。あの頭で」

「ちゃんと云ったのか？ シュヴァルツⅡナハトが鴉丸より上だつて」

謎の男が訊いた。

「ああ。勢いがあるから、ってな。簡単に信じたよ。ふつ、歴史くらい勉強しておいて欲しいものだ」

「まあ、大統領が賢すぎちゃあ、ウチらが困る。よしとしようじゃないか」

謎の男が笑いながら云った。

「まあな。ただ、あれが我が国のトップってなるとな、ちよつと虚しい気持ちも起こるってもんだ」 「トップか、いつの時代も、どの『世界』でも、トップなんてのは、案外大したことない奴がやつたりするもんだよ」

謎の男はため息をつく。何か憂鬱な記憶をマドラーでかきまわすように。

「まあ、これであいつがライナスに近づいたらOKって訳だ。シ

ナリオ通りってか」

「全く。一体どれくらいの間がかかったもんかな。僕がこの『世界』に来てからさ。すっかりこの黒い服が板についてしまったよ」
謎の男はまた深いため息をついて、自分の衣装を見下ろした。

「しかし、あんたはまた、どうしてこんなややこしい立ち位置なんだ。オレは自分が最終的にいいポジションにつけばなんでも良いが、あんたは一体何を目指してる？」 リケルメの問いに謎の男は微笑んで答える。

「詳しくは云えませんよ。まだ、ね。ただ、私も所詮はサラリーマンみたいなものですよ。これは業務の一環っただけです。まあ、ご心配なく。私は世界を着実にうまく運ぶつもりですし、アナタのこともしっかり考慮していますよ。勿論、鴉丸同盟のこと、シュヴァルツⅡナハトのこと、ね」

「なんだかよくわからんがな。まあいい。どうもあんたが裏で糸を引いているみたいだからな。きっとあんたに乗っかるのがいいんだと、オレの勘が云ってるよ」

「それはありがたい。さて、私はそろそろ次の約束があるので、降りましようかね」 そう云うと、運転手に告げ、街の中で車を止めさせた。最後に簡単に挨拶すると、彼は車から降り、人通りの多い道を、真っ直ぐ歩いていった。やがて、通りの向こうへと消えた。

リケルメはまだ、彼のことを信じていないし、理解していないし、慕ってなどいない。

ただ、シュヴァルツⅡナハト、鴉丸、エルガルディア。…彼はその全てにつながりを持っている状況と云うわけだ。

リケルメは自分が利用されるのだとある程度気がついてた。しかし、それでも、自分が成功する期待値は、彼につくことで最大になると思った。

車は出発し、世界を逆走するような感覚で、全てを抜き去ってい

つ
た。

A - 1451 エルガルド：帝都エルガルド

当然のことながら、エルガルドでは戦乱が続いていた。ライナスらシュヴァルツナハトは、確かに官邸を制圧したものの、都市部の国民で、この制圧に納得した者はいなかったし、最大の問題として、軍部を御しきれていなかった。

軍部は官邸を目標点として戦闘を行うことを決定。少なくとも、軍部の忠誠心は高く、大統領であり、エルガルディアの教祖を救うべく、ライナスの奇襲後、直ちに戦線を敷いた。

エルガルドは開発途上の強国には珍しくないことだが、非常に貧富の差が激しく、それが帝都にもよく現れていた。

この都市を大まかに説明すれば、中心部には大統領官邸、そしてエルガルディアの聖地にあたる『E l w i n a Ⅱ B u i l d i n g s』、その西側には各政府関連の建物があった。

聖地に近い、西側以外の部分は、貴族の住かとなっていて、一般人は立ち入れない地域になっている。

その北側は、所謂商業地で、身分にあまり関わらず様々な店がたちならぶ。

西側は比較的一般的な居住地で、エルガルディア信仰が最も強いと云われている。ちなみに、貴族は教養の高さから、「立場上、エルガルディアを信頼している」人もいると云われている。

最後に南側は、所謂スラム街で、政府の力も充分に及ばない、無法地帯となっている。

彼らはあまりエルガルディアに興味を持たない。宗教に興味を持たない人が多い。

軍は大きく二手に別れ戦闘をくり広げていた。

一方は帝都直属軍。ライナスらに敗れたことで中枢にある軍本拠地を奪われたものの、エルガルディアに権益を持つ一部の貴族や、

西部にいるプリーストを中心とした地下組織の手を借りながら、ゲリラ戦のような戦いを繰り広げている。

一方は暴徒化した南部の人間と、ライナス軍の最も下層民が、都市の外側を守っていて、当然、エルガルドの他支部の精鋭が、この壁をこじ開けて、中枢での戦いに参じようとしている。

この世界の尺度になるが、武器はあからさまに、エルガルドのほうが原始的。

「重い銃」や、戦車などの「重機」を用いていた。

それも全く歯がたたないわけではなく、幾人もの人間の操作によって、幾人もの人間が消える。

敢えて「人間」と云うのは、必ずしも完全にシュヴァルツィナハト軍のみを殺せているわけではないからだ…。

奇襲から即時始まった市街地戦線。当然全ての市民が移動する間などなく、多くは建物内や、街の中の避難所にいる。エルガルド軍は流れ玉や、誤射、誤爆によって、平時ならば「多数」と表現するに足る市民を消していた。

対するシュヴァルツィナハト軍。

恐らく歩兵など大して集めていない筈。しかし、その重視していない歩兵ですら、強大、かつ効率的な兵力を持っていた。

彼らが多く所持する銃は「光学電磁銃」と呼ばれるもので、云わばレーザー銃のようなものだ。

大きさは所謂マシンガンと呼ばれるものの十分の一。

一方で精度はそれよりはるかに高い。また、光学電磁銃のもう一つの特徴は、敵を殺さずに再起不能にできることだ。

レーザーは体を傷つけるのではなく、脳に「一時的」にショックを与えるもの。ただし、どのくらい長い間ショックを与えるかは使用者が設定できる。

その他にも、一定の壁を透過するなど、この武器は非常に強力だった。

従って、シュヴァルツィナハト軍は殺された人間とは比べものに

ならない軍人を戦闘不能にした。市民を一人も殺すことなく。無関係な建物も殆ど破壊することなく。

戦力は歴然。しかもエルガルド軍が劣勢なほど、街が破壊されないという皮肉な状態が続いていた。

ライナスは官邸の上の階からそれを見てた。彼がいる大統領官邸はこの帝都で二番目に高い建物だから、街の殆ど全体を見渡せるのだ。

ところどころ、散発的に爆音が響くことはある。しかし、それは激しい市街地戦が行われているにしては、異様に少なく感じられた。そして同様に、火の手が上がっているのも、都市の外周の一部のように思われた。

ただ、帝都の西側は他と比べると、やや破壊されている箇所が多いように見受けられた。

彼にとって、ここまではシナリオ通り。信仰の厚い地域ほど、被害が大きくなることまで。勿論、それによって、信仰の厚い人間を目減りさせようと云う魂胆も在ったが、それ以上に、エルガルドにたいする反発心を煽ろうとしていた。

やがては戦争は国中に広がるだろう。いや、既にその様相を呈しつつある。エルガルド軍の支部は既に部隊を整えつつあるし、シュヴァルツⅡナハト軍の一部小隊は、それぞれに備え、各々国内に入りこんでいる。一部では、小競り合い、鏖迫り合いも起こっているとのこと。

ライナスは考える。どうせ、国内全体に戦闘が広がったとしても、やっぱり状況は圧倒的であろう、と。むしろ、如何に此方が人道的に配慮して戦闘を行っているか。それがシュヴァルツⅡナハトにとつての「闘い」だった。

それについても、今のところは全く問題がないのだろう。常にリ

アルタイムの情報がこの階層まで伝わっているわけではないが、相手の戦死者は、少なくとも、此方の軍が殺めた数は、二桁に満たないとのこと。むしろ、相手の誤射や誤爆の類いの方がずっと頻繁におきている。勿論全て予定通り、この、シュヴァルツ「ナハト」の。だが、当然ながら、ライナスには気になっていることがあった。……あまりにもうまくいきすぎている……。自分一人ではここまで最先端の武器は集められなかったし、ここまで兵力を揃えることもできなかったし、何より、こんなに的確なストラテジーを組むことなど、できるハズがなかった。ライナスはそう確信していた。

そう、それらは全て、「奴」のおかげだった。

ニユースで取り上げられている、経歴不明の謎の男……。ライナスと彼の邂逅が、ある種、今回の事件のプロローグとなっていた。

ライナスと彼が出会ったからこそ、ライナスは鴉丸とは別の路線を歩むことを決意し、ライナスと彼が一緒だったからこそ、この大胆なシナリオが用意され、そして、ライナスに彼が頼ったからこそ、そのシナリオが実行に移されたのだった。

勿論、ライナスは出会って以降、彼について多少のことは知っていたので、「謎の男」と云う感じではない。だが、それでもなお、ライナスは彼のことを完全に知っていると云うわけではないし、彼が話したことを、全て理解しているわけではない。ライナスにとって、彼との出会いは、彼の存在は、あまりに唐突で、非現実的で、不可解だった。

そう、つまり、この世界に介入している「ストレンジャー」はヒ口たちだけではなかったって、わけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5344d/>

CrossLord

2010年10月20日03時34分発行